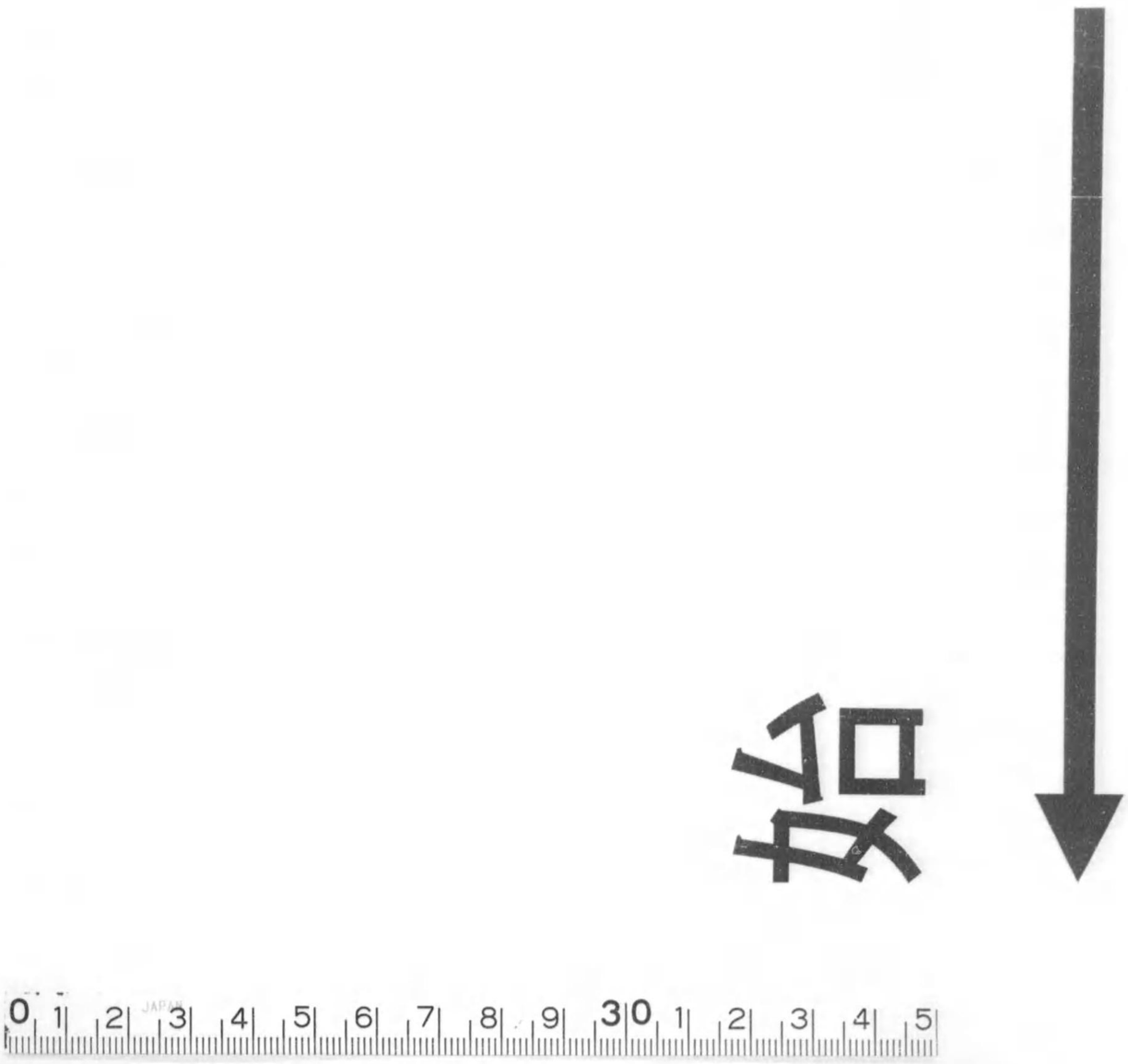


324
614

3C-70
324-614

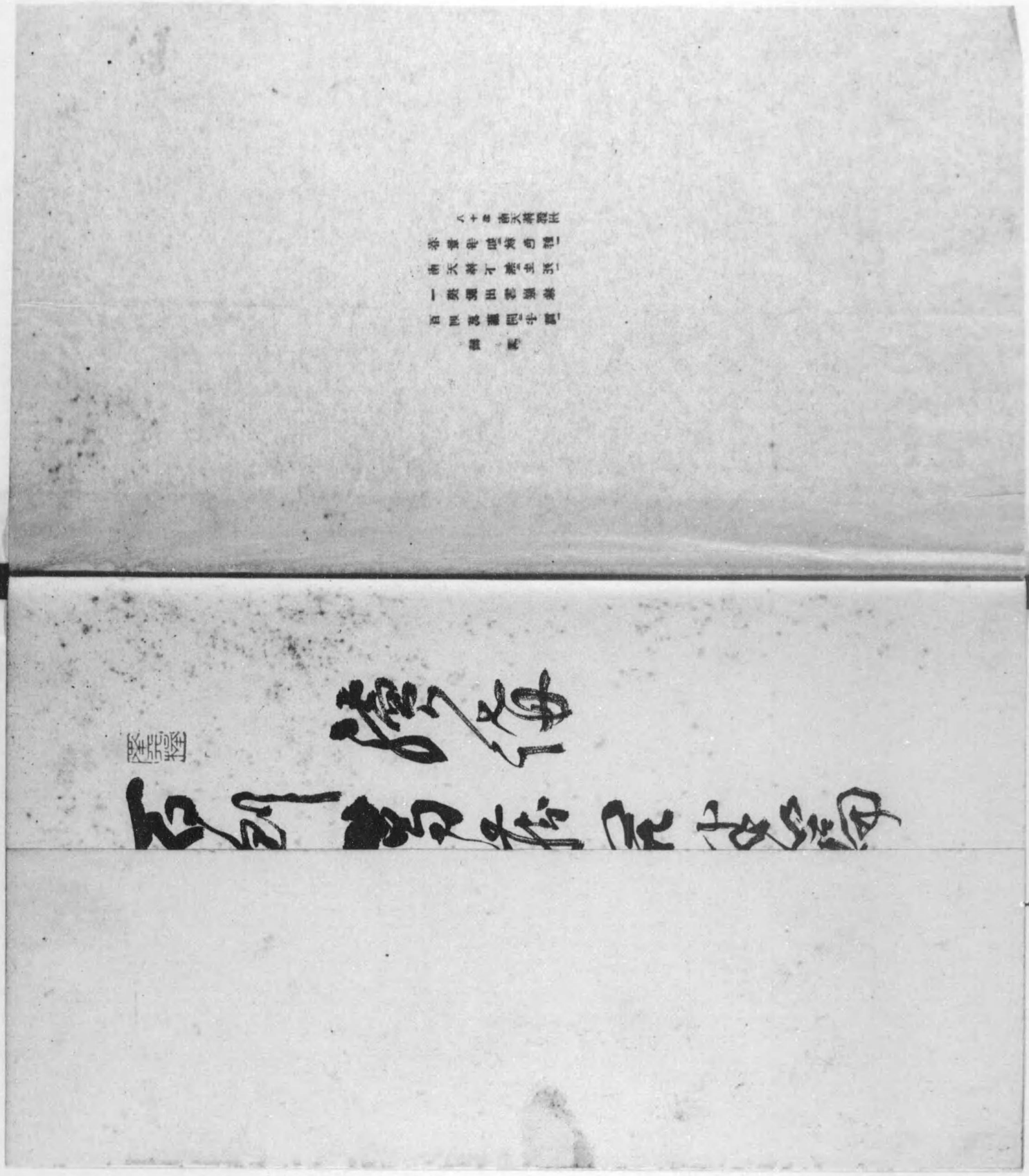
拙"号"嘯名嵐集

中巻

大正
8. 11. 27
内交

貳

一百
柳
樹
蔚
蔚
綠
陰
間
流
水
聲
雪
後
山
巒
秋
色
主
蒼
蒼
谷
南
黃
天
株
伊
林
如
秋
葉
色
主
紅
株
八十
南
天
株
路
川



八十番 南天棒殺佛

亦是老婆心切一
南天棒才逢主人一
一棒彈出雲嶺外
百四五蘊問千聲
頌 高

提唱碧巖集 中卷

目次

前言……（一）

卷三

第二十一則　智門蓮花荷葉……（五）

第二十二則　雪峯鼈鼻蛇……（二四）

第二十三則　保福妙峯頂……（六三）

第二十四則　劉鐵磨臺山……（八二）

第二十五則　蓮華庵主不在……（一〇〇）

第二十六則　百丈奇特事……（一二八）

第二十七則　雲門體露金風……（一四二）

第二十八則　涅槃和尚諸聖……（一六〇）

第二十九則　大隋劫火洞然……（一八二）
第三十則　趙州大蘿蔔……（一九六）

卷四

第三十一則　麻谷振錫遶床……（二〇九）
第三十二則　臨濟佛法大意……（二四〇）
第三十三則　陳尚書看賚福……（二五五）
第三十四則　仰山問甚處來……（二七六）
第三十五則　文殊前三三……（二九七）
第三十六則　長沙一日遊山……（三一七）
第三十七則　盤山三界無法……（三三五）
第三十八則　風穴鐵牛機……（三五三）
第三十九則　雲門金毛獅子……（三八七）
第四十則　南泉如夢相似……（四〇二）

卷五

第四十一則　趙州大死底人……（四二一）
第四十二則　龐居士好雪片片……（四三七）
第四十三則　洞山寒暑廻避……（四五六）
第四十四則　禾山解打鼓……（四七五）
第四十五則　趙州萬法歸一……（四九七）
第四十六則　鏡清雨滴聲……（五一四）
第四十七則　雲門六不收……（五三一）
第四十八則　王太傅煎茶……（五四六）
第四十九則　三聖以何爲食……（五六七）
第五十則　雲門塵塵三昧……（五八二）

卷六

第五十一則　雪峯是什麼……（五九五）
第五十二則　趙州石橋略彴……（六二七）

目次終

第五十三則　馬大師野鴨子……（六三九）
第五十四則　雲門近離甚處……（六五七）
第五十五則　道吾漸源弔孝……（六六九）
第五十六則　欽山一鏃破三關……（六九八）
第五十七則　趙州至道無難……（七二一）
第五十八則　趙州時人窠窟……（七三四）
第五十九則　趙州唯嫌揀擇……（七四四）
第六十則　雲門拄杖子……（七五七）

提唱碧巖集　中卷

「提唱碧巖集」の上卷を看た者には、南天棒の提唱振りが解つたらう。老衲の提唱は、世の宗匠等のものとは少々違ふぞ。氣に協はぬ處があれば、雲門でも雪竇でも圓悟でも、容赦なくコノ南天棒を喫らはせるからサ。

提唱を書物にするは好いとか惡いとか、何んの彼のと云ふ者も世間には有るさうぢやが、書物にするのが惡いならばサ、提唱することも全體ならぬ譯ぢや。聲は律となり、身は度となる。ぢやから何事も、法の爲めにや爲なくちやならぬ。世間の云ふことに頓着せず、五十年來提唱し來つた祖錄は、殘らず公にして、永劫學人の便にせう。ナンの隱すことがあらうかい。春は花、秋は紅葉サ。天地間に何一つとして隱れたるものと云ふはない。ソノ隱さない天地間に、禪の提唱のみが隱さにやならぬ

と云ふ法があるものか。禪は單純ぢや、秘密はないぞ。禪の字が、單を示すと云ふのも面白い。名詮自稱かサ。

云ふまでもないが、古人は色と聲とを大にしなかつたから、書物を著しても、今のやうに新聞に廣告したり、雜誌に書き立てたりすることはなかつた。勿論、サウ云ふ機關もなかつたのぢや。ソノ代り古來の宗匠は、各々夫れ〳〵に法幢を建て、宗旨を立するから、學人の方から撥草瞻風して師を訪ひ、道を尋ねに來たものぢや。所謂桃李物言はず、下自ら蹊を成すと云ふ風ぢや。

然るにカウ忙しい世の中となつては、いくら叫んだり怒鳴つたりして廣告しても、容易に學人の方が眼が醒めぬから、ナカ〳〵南天棒の前に出て來てからに、「是れ什麼」なんと云ふ者はない。ソレデ老衲が是れサ、年が年中、東西に錫を飛し、寄せ太鼓も打ち、舞ひもするが、五十年間に僅かタツタ三千人の士姉しか接し得ないのぢや。世の中には禪を禪宗坊主の專有物のやうに心得て居るものが澤山あるやうぢやが、禪はソンナものぢやないぞ。ソレデ老衲は禪を俗家に勸め、居士や大姉を打出して國恩の萬分の一に酬ひたいと思ふて、日々夜々、是れ東奔西走してからに、ソレ提唱よ、打坐よと勸める。コレが老衲の誓願ぢや。今時は山內に引き込んで、學人の來るのを待つて居る時ぢやない。ソンナことをして居つたら、禪は滅びて仕舞ふばかりぢや。釋尊はドウぢや、三百餘會錫を飛した。達磨は遙々印度から支那へ渡つて來たではないか。古來の祖師方の攝化方を見よ。實に時機を叩いて行運に當ると云はうか、所謂時代思想ぢや。唐宋時代には、又た其の時代に應じて接得した。ぢやから、今日講ずる此の「碧巖」も「虛堂錄」も、出版されたと云ふものぢや。ソリャ書いた者もあり、其の原稿を燒いた者もある。ソコが卽ち大事な處ぢや。我が國でも鎌倉時代の禪はドウぢや、五山文學に於てはドウぢや。又た一休や澤庵の接得の仕方から、白隱の接得振りを能く看るが好い。「槐安國語」ぢや、「荊叢毒藥」ぢやと、ソレ〳〵筆辯を勞したものぢや。大いに眼を開いて看よ。

今日のやうに言論が盛んに、交通が自由な世の中ではサ、老衲の提唱も筆記して書物にこしらへて南天棒の臟腑を世間にサラケ出すの必要があるぢや。ならう事なら、老衲は入れ齒がゆるんでも好いから、蓄音器に吹き込んで、八十の老僧の提唱を、後昆に聞かせたいと思ふ位ぢや。老衲も提唱するには、是れ迄に隨分多くの書物を調べたり、書き入れしたりしたものぢや。播州明石在の寓居の頃は晝夜打ッ通しに遣つたものぢやから、トウ〳〵眼を瞳して仕舞つて、一週間計りも見えぬとがあつた。コレも菩薩行の一つぢや。から老衲の提唱を出版するものも亦た是れ菩薩の大行ぢや。釋尊の廣長舌相は、普く三千大千世界を覆ふと云ふではないか。ソレ何故かと云へばサ、佛說は何處までも廣く行き渡つて居るからぢや。ソレぢやから老衲の提唱も、成るべく直接に聞かせたいが、遠く隔つて居る者は、サウもならぬ。或は老衲が若し世を去るやうになれば、いくら聞かうとしても聞くことは出來ぬ。併しソレを聞かせるのは、書物や手紙ぢや。コノ「提唱碧巖集」は南天棒の手紙ぢやわい。釋迦

正傳七十九代の手紙ぢや。此の手紙は遠方に居る者にも、又た老衲が隔世しても、轉展せらるゝぞ。

此の「提唱碧巖集」は、五千餘卷の經にも勝るから、一人でも多く見、一人でも多く聞くが好い。

老衲は全體書くことが好きぢや。墨蹟でも三萬から書いた。手紙なぞも、朝の三時に起きて、接衆の間に書く、手紙と云ふても提唱ぢや。「大惠書」も手紙ぢやが、白隱の「遠羅天釜」も手紙ぢや。手紙は何れ位人を度するか知れぬ。老衲は年中に、幾萬と云ふ手紙を出す。ぢやから世間で老衲のことを、南天棒と云ふの外に、手紙鄧州と迄綽名して居るさうぢや。

サー諸人、此の提唱は眼で讀んではならぬ、心の眼で讀め。ソコデ、讀んだら此の公案を練つて見なくちや役に立たぬぞ。併し、兎角「書は三寫を經て烏焉馬となる」とは昔しからの金言ぢやから、カウした出版には、校合の者等、間違ひのないやうに能く氣を付けてやらなくちやならぬ。書は言を盡さず、言は意を盡さずで、ナカ〳〵思ふやうにはいかぬものぢや。讀む者は眞意を汲んで、冷暖自知す可しぢや。前話しが長々しかつた。サー是れから本文の提唱に掛からう。

佛果圜悟禪師碧巖集卷第三

秣陵遠庵吳自弘　校
天界比丘　性湛　閲

第二十一則　智門蓮花荷葉　【智門蓮花荷葉】

垂示云建法幢立宗旨錦上鋪花脫籠頭卸角馱太平時節或若辨得格外句擧一明三其或未然依舊伏聽處分

【和訓】垂示に云く、法幢を建て宗旨を立す、錦上に花を鋪く。籠頭を脫し角馱を卸す、太平の時節。或は若し格外の句を辨得せば、擧一明三。其れ或は未だ然らずんば、伏して處分を聽け。

【提唱】　コレから巻の第三ぢや。第二十一則、「智門蓮花荷葉」と、碧巖、頌出する處の一百則はサ云ふまでもなく、是れ雪竇の述作ぢや。ソレぢやから本來雲門宗より出て來る。就中コノ則は、最も雲門、臨濟を以つて、所依の旨を爲すことを明すぢや。智門和尚は、卽ち雪竇の師とする處の尊宿ぢやから。

「垂示に云く、法幢を立て宗旨を立す、錦上に花を鋪く」と、コリヤ師家に拘ることぢや。サー佛に代つて化を擧げやうとするにはサ、隨處に法幢を建てにやならぬ。ソレから、ナンボ學者が寄り合ふても、宗旨が無ければ役に立たぬぞ。宗旨と云ふと疵が付くがサ、コレが無けにや駄目々々。ぢやから講釋もするが、垂示もする、着語もするぢや。法身上には說法もないが、應身にや出て說法もする。所謂「錦上に花を鋪く」ぢや。「籠頭を脫し角馱を卸す、太平の時節」と、コリヤ學人に拘るぢや。馬の鼻先に嵌めて有る籠のやうな、物を喰ふともならぬ、無明業識なぞと云ふ邪魔物は取つて仕舞へ。ソレから馬の脊中に物を澤山積んでからに、左右に突き出て、丁度角のやうになる程の無明も悟も、負ふもの擔ぐものサー總ての知見解會を捨てゝ、「太平の時節」を得てから法幢を建つるぢや。「或は若し格外の句を辨得せば、擧一明三」と、コノ則などを「格外の句」とも法窟の爪牙とも云ふぢや。サー此れを手に入れやうぞならば、ソレからは「擧一明三」ぢや。コノ語のそは、上巻の第一則で提唱した。「其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて伏して處分を聽け」と、若しサウでないならば、コノ處斷、分別を聽けと、本則を持ち出して來た。福本には、コノ則と次の二十二則との垂示が、反對になつて居る。

擧僧問智門蓮花未出水時如何　○鈎在不疑之地　○泥裏洗土塊　○那裏得這消息來　智門云蓮花　○一二三四五六七　○疑殺天下人　僧云出水後如何　○莫向鬼窟裏作活計　○又恁麼去也　門云荷葉　○幽州猶自可最苦是江南　○兩頭三面　○笑殺天下人

【和訓】　擧す。僧、智門に問ふ、蓮花未だ水を出でざる時如何。（○不疑の地に鈎在す。○泥裏に土塊を洗ふ。○那裏よりか這の消息を得來れる。）智門云く、蓮花。（○一二三四五六七。○天下の人を疑殺す。）僧云く、水を出でて後如何。（○鬼窟裏に向つて活計を作すこと莫れ。○又た恁麼にし去れり。）門云く、荷葉。（○幽州は猶ほ自ら可なり、最も苦しきは是れ江南。○兩頭三面。○天下の人を笑殺す。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「擧す。僧、智門に問ふ、蓮花未だ水を出でざる時如何」と、コレは驗主問ぢや。コノ坊主は一ト筋縄でいける奴ぢやない。ナンでも一つ、智門のドテッバラを驗みやうとする爲めにサ、カウ問ふて來た。コレが所謂格外の所問ぢや。「蓮花未だ水を出でざる時如何」と、實にスサマジイ所問ぢや。コレをサ、威音以前などと、汚ない考へで見ては見えぬぞ。

「智門云く、蓮花」と、智門も智門ぢや、「蓮花」とはサ。問も詰めぢやが、答も詰めぢや。コノ南天棒ならば、豆腐や豆腐――と云はうぞ。

「僧云く、水を出でて後如何」と、ソンならば、蓮花が水を出た後は如何ぢや。理が事と現れたら如何ぢや。

「門云く、荷葉」と、ナンぢや、蓮の葉ト。熱鐵のやうに詰めた。前箭は猶ほ輕く、後箭は深しぢや。サーこれも納なら蒟蒻や蒟蒻――と云ふべいぞ。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「擧僧問智門蓮花未出水時如何」――「不疑の地に鈎在す」、コノ僧も中々拔け切つた奴ぢや。魚の居る處を見定めてからに鈎を下した。悧悋な者でなけにや、斯うは出られぬ。「泥裏に土塊を洗ふ」混沌未分ぢやなどと云ふまいぞ。「那裏よりか這の消息を得來れる」、サーそのやうな馬鹿なことは、何處から持つて來たかッ。

「智門云蓮花」――「一二三四五六七」、コレ何ぢや、いにろはにほへとカ。唱拍相ひ隨ふで、圜悟が隨けて舞ふた。「天下の人を疑殺す」、蓮根と云へば好いに、蓮花と云ふたは、實にハヤ喰べ惡いものぢや。天下の人の命取りぢや。

「僧云出水後如何」――「鬼窟裏に向つて活計を作すこと莫れ」、根と云ふべきに花と云ふたは、不二平等の穴ぢや。コレが圜悟、自慢の句ぢや。「又た恁麼にし去れり」、コノ坊主、裏へ廻つて問ふたのぢやが、出、未出に滯るナ。

「門云荷葉」――「幽州は猶ほ自ら可なり、最も苦しさは是れ江南」、幽州は寒國ぢや、ソノ寒いのには堪へもするがサ、堪忍ならぬのは江南ぢや。江南の苦しさは、どうも堪へ難いぞ。コレはサ、初めの「蓮花」といふたは幽州ぢや。後の「荷葉」と云ふたは江南ぢや。コレを古來より妙處があると云ふが、何處に妙處があるか看よ。「兩頭三面」「天下の人を笑殺す」、智門もサ、蓮花ぢやの、荷葉ぢやのと、實にハヤ金毛九尾の狐ぢやから、色々な面を掛け換へてからに、天下の人を笑殺するぞ。コレが又た容易に出來ることぢやない。諸人どうぢや。「兩頭三面」は拔置いて、一面を自己で見よ。

智門若是應機接物猶較些子若是截斷衆流千里萬里且道這蓮花出水與未出水是一是二若恁麼見得許儞有箇入處雖然如是若道是一顯頂佛性籠侗眞如若道是二心境未忘落在解路上走有什麼歇期且道古人意作麼生其實無許多事所以投子道儞但莫着名言數句若了諸事自然不着卽無許多位次不同儞攝一切法一切法攝儞不得本無得失夢幻如許多名目不可强與佗安立名字誑鑄儞諸人得麼儞諸人問故所以有言儞若不問敎我向儞道什麼卽得一切事皆是儞將得來都不干我事古人道欲識佛性義當觀時節因緣不見雲門擧僧問靈雲云佛未出世時如何雲竪起拂子僧云出世後如何雲亦竪起拂子雲門云前頭打着後頭打不着又云不說出與不出何處有伊問時節也古人一問一答應時應節無許多事儞若尋言逐句了無交涉儞若能言中透得言意中透得意機中透得機放令閑閑地方見智門答話處問佛未出世時如何牛頭未見四祖時如何斑石內混沌未分時如何父母未生時如何雲門道從古至今只是一段事無是無非無得無失無生與未生古人到這裏放一綫道有出有入若是未了底人扶籬摸壁依草附木或敎他放下又打入莽莽蕩蕩荒然處去若是得底人二六時中不依倚一物雖不依倚一物若露一機一境作麼生摸索他這僧問道蓮花未出水時如何智門云蓮花便只攔問一答不妨奇特諸方皆謂之顚倒語那裏如此不見巖頭道常貴未開口已前猶較些子古人露機處已是漏逗了也如今學者不省古人意只管去理論出水與未出水有什麼交涉不見僧問智門如何是般若體門云蚌含明月僧云如何是般若用門云兎子懷胎看他如此對答天下人討他語脉不得或有人問夾山道蓮花未出水時如何只對他道露柱燈籠且道與蓮花是同是別出水後如何對他道杖頭挑日月脚下太泥深儞且道是不是且莫錯認定盤星雪竇忒煞慈悲打破人情解所以頌出

【和訓】智門、若し是れ機に應じて物を接せば、猶ほ些子に較れり。若し是れ衆流を截斷せば、千里萬里。且らく道へ、這の蓮花、出水と未出水と、是れ一か是れ二か。若し恁麼に見得せば、儞に許す、箇の入處有ることを、然も是の如くなりと雖も、若し是れ一と道はゞ、佛性を籠侗し、眞如を籠侗す。若し是れ二と道はゞ、心境未だ忘せず、解路上に落在して走らば、什麼の歇期か有らん。且らく道へ、古人の意作麼生。其れ實に許多の事無し。所以に投子道く、儞但だ名言數句に着することなれ。若し諸事を了せば、自然に着せじ。則ち許多の位次不同無し。儞、一切の法、儞を攝すること得じ。本と得失夢幻、如許多の名目無し。强ひて佗の與めに名字を安立す可からず、儞諸人を誑鑄し得てん麼。儞諸人問ふが故に、所以に言有り。儞若し問はずんば、我をして儞に向つて、什麼とか道はしめてか卽ち得ん。一切の事は、皆な是れ儞將ち得來る、都て我が事に干らず。古人道く、佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべしと。見ずや、雲門、僧、靈雲に問ふて云く、佛未だ出世せざる時如何。雲、拂子を竪起す。僧云く、出世して後如何。雲亦た拂子を竪起すと云ふを擧す。雲門云く、前頭は打着、後頭は打不着。又た云く、出と不出とを說かずんば、何處にか伊が問ふ時節有らんと。古人、一問一答、時に應じ節に應じて、許多の事無し。儞若し言を尋ね、句を逐はゞ、了に交涉無からん。儞若し能く言中に言を透得し、意中に意を透得し、機中に機を透得して、放つて閑閑地ならしめば、方に智門答話の處を見ん。問ふ、佛未だ出世せざる時如何、牛頭未だ四祖に見えざる時如何。斑石の內、混沌未分の時如何。父母未生の時如何。雲門道く、古從り今に至るまで、只だ是れ一段の事。是も無く非も無く、得も無く失も無く、生と未生と無し。古人、這裏に到つて、一綫道を放つて、出有り入有り。若し是れ未了底

の人ならば、扶籬摸壁、依草附木。或は他をして放下せしむれば、又た莽莽蕩蕩、荒然たる處に打入し去る。若し是れ得底の人ならば、二六時中、一物に依倚せず。一物に依倚せずと雖も、若し一機一境を露さば、作麼生か他を摸索せん。這の僧問ふて道く、蓮花未だ水を出でざる時如何。智門云く、蓮花。便ち只だ欄問の一答なり。妨げず奇特なることを。諸方皆な之れを顛倒語と謂ふ。那裏にか此の如くなる。見ずや、巖頭道く、常に貴ぶらくは、未だ口を開かざる已前、猶ほ些子に較ることを。古人、機を露す處、已に是れ漏逗し了れりと。如今の學者、古人の意を省せず、只管に去つて理論す。出水と未出水と。什麼の交渉か有らん。見ずや、僧、智門に問ふ、如何なるか是れ般若の體。門云く、蚌、明月を含む。僧云く、如何なるか是れ般若の用。門云く、兎子懷胎と。看よ、他、此の如く對答す。天下の人、他の語脈を討ぬるに得ざることを。或は人有つて、夾山に問ふて道く、蓮花未だ水を出でざる時何何。只だ他に對して道はん、露柱燈籠と。且らく道へ、蓮花と是れ同か是れ別か。水を出でゝ後如何。他に對して道はん、杖頭日月を挑ぐ、脚下太だ泥深しと。儞且らく道へ、是か不是か。且らく錯つて定盤星を認むること莫れ。雪竇頌煞だ慈悲、人の情解を打破す。所以に頌出す。

【提唱】 コレから圜悟の評唱ぢや。「智門、若し是れ機に應じて物を接せば、猶ほ些子に較れり。若し是れ衆流を截斷せば、千里萬里」と、智門が、蓮根と答ふべきを、蓮花と答へたはサ、應機接物か。サー何んと衆流を截斷したか。コノ評は十成ぢやない、三句を以つて論ずべからずぢや。蓮花未だ水を出でざる時如何。云く、蓮花と。是れ卽ち雲門宗の骨髓ぢや。應機ではない、又た接物でもない、コヽに仔細こそあるぢや。「且らく且へ、這の蓮花出水と、未出水と。是れ一か是れ二か」とコリャ又た何んたる嘆言ぞ、コレではお茶の給仕もならぬぢや。「若し恁麼に見得せば、儞に許す、箇の入處有ることを」と、「入處」と云ふが、平等の知見を以つて、蓮花荷葉と云はゞ、千里萬里ぞ。

と云ふてからに、差別の知見を以つて、蓮花荷葉と云はゞ、又た千里萬里ぢや。諸人會す麼。「然も是の如くなりと雖も、若し是れ一と道はゞ、佛性を顢頇し、眞如を籠侗す」と、面ばかり大きな面をしてケッカッても、無分曉のラチなしぢや。又た目も鼻もない、まるで青冬瓜のやうぢやと。コレは面白くない評ぢや。「若し是れ二と道はゞ、心境未だ忘せず、解路上に落在して走らば、什麼の歇期か在らん」と、ソンナことに拘はつて居つたら、何時休歇と云ふ處があらうぞ。「且らく道へ、古人の意作麼生。其れ實に許多の事無し」と、ソンなら智門の意は如何ぢやと云へばサ、コリャ又た大いに在りぢや。九虎關とも云ふやうな深々微妙なことがあるぢや。「許多の事無し」とは、圜悟が裏を書かれたのぢや。「所以に投子道く、儞但だ名言數句に着すること莫れ」と、コノ語には少しく仔細が有る。コレを以つて本則を見やうとすると、大いに違ふぞ。「若し諸事を了せば、自然に着せじ、卽ち許多の位次不同無し」と、サー諸事を了して大休歇の場があいたなら、コノ邊の消息は分明ぢや、サウあらうぞならば、天に在る星の如く、又た地に在る砂の如くで、十界總べて「位次不同」と云ふことは無くなる、階級が失せるぢや。「儞、一切の法を攝す。一切の法、儞を攝すること得じ。本と得失夢幻如許多の名目無し」と、生滅でも貧富でも、佛でも神でも、動かすことはならぬ。會するときんば十二時を使ひ得るぞ。サーこの自由の働があつてこそ、「無得失夢幻」で、柳綠ならず、花紅ならざる場があるぢや。別して六ヶ敷いことはないぞ。「强ひて佗の與めに名字を安立す可からら

ず、爾諸人を誑鑄し得てん麼」と、佛と云ふさへ汚はしいのに、汝の爲めに名字を安立するなんぞと云ふて、佛を持つて來てもサ、人々の佛性は誑は喰はぬぞ、ソノ手は桑名の燒蛤ぢや。「爾諸人問ふが故に、所以に言有り、爾若し問はずんば、我をして爾に向つて、什麼とか道はしめてか即ち得ん」と、お主等が何んの彼のと云ふから、喧しいぢや。つまり問ひも答へも、云ふことも語ることもないぢやないか。「一切の事は皆な是れ爾將ち得來る、都て我が事に干らず」と、智門は問へばこそ答へたぢや。病を見て藥を與へるやうぢや。智門はケロリッとして居る。ナゼなれば、佛になつても佛性は佛にならぬぞ。是れ迄が投子の語ぢや。「古人道く、佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべし」と、コレは近い頃の潙山が、法眼の拈出した遠い處の涅槃經に在る語を持ち出したぢや。「佛性の義を識らんと欲せば」とは實にハヤ天に倚る長劍ぢや。佛のトットキの語ぢや。「當に時節因緣を觀ずべし」、是れ金剛を呑むやうぢや。サーこの「因」と云ふたは、法友に近付くが好いと云ふぢや。又た「緣」とはサ、ソノ法友に近付き進むが好いと云ふぢや。「見ずや、雲門、僧、靈雲に問ふて云く、佛未だ出世せざる時如何。雲、拂子を竪起す。僧云く、出世して後如何。雲亦た拂子を竪起すと云ふを擧す。雲門云く、前頭は打着、後頭は打不着」と、雲門が、靈雲と僧との問答に一着を與へたぢや。是りや是れ、雲門、宗旨向上の調、誠に微妙の大慈大悲ぢや。併しコノ南天棒ならば、前頭は打不着、後頭は打着と云はうぞ。「打着」とは、黑星をくらはせたと云ふぢや。「又た云く、出と不出とを說かずんば、何處にか伊が問ふ時節有らん」と、何んと云ふても、久參の上士でなくてはいかぬ。「古人、一問一答、時に應じ節に應じて」と、實に醫師が病家に赴いて、サ、病を見る見る時にや何んの分別も無いぢや。只だ病に應じて藥を與ふるだけぢや。古人の一問一答も實にソノ通りぢや。「許多の事無し」と、コノ四字は不可ん。「爾若し言を尋ね、句を逐はゞ、了に交涉無からん。爾若し能く言中に言を透得し、意中に意を透得し、機中に機を透得して、放つて閑閑地ならしめば、方に智門答話の處を見ん」と、徒に言句を逐ふては不可ぬが、又た未透者は參句せねばならぬ。サー尋ね〳〵、尋ね盡して、尋ねることのない時こそあれ。「園原や伏屋に生ふる箒木の有りとや見えて逢へぬ君かな」ぢや。サー汝等、「言中に言を透得し」と、コレは雲門宗ぢや。「意中に意を透得し」と、コレは曹洞宗ぢや。「機中に機を透得し」と、コレは臨濟宗ぢや。是れ等を悉く透得し、萬事を放つて大ヒマがあいたならば、ソノ時初めて智門の答處が見えやうぞ。「問ふ、佛未だ出世せざる時如何。牛頭未だ四祖に見えざる時如何。斑石の內、混沌未分の時如何。父母未生の時如何」と、コノ漢字三十四字は削る方がよい、蜀本にもコノ文字はない。「斑石の內」といふ斑石とは、「太平廣記」の意に依ると、卵のことゝある。卽ち「斑石の內」とは、未生の時を云ふたものぢや。大濟禪師もサウ云ふて居る。併しコノ「斑石の內」の三字は削つたがよいと、楞伽も心宗も皆な云ふて居る。「雲門道く、古從り今に至るまで、只だ是れ一段の事。是も無く非も無く、得も無

く失も無く、生と未生と無し」と、昔から今日まで、コノ一段の大事に於てはサ、是非の、得失のと云ふ沙汰はない。只だ〳〵自己のホテッパラを識得さへすれば好い。ナンの生の未生のと、ソンナことがいらうかい。「古人、這裏に到つて、一綫道を放つて、出有り入有り」と、コレから些子の自由が出るぞ。以下は圜悟の評ぢや。「若し是れ未了底の人ならば、扶籬摸壁、依草附木。或は他をして放下せしむれば、又た莽莽蕩蕩、荒然たる處に打入し去る」と、未了底の人なりや、言を尋ねたり句を逐ふたりして、かゝぐり廻つてケッカル。サウしてサ、取り亂れて埒も無い。西も東も知らぬ黒漫々底に入るぞ。併しサ、コヽを漕ぎ拔けると、明了底の處があるぞ。「莽莽蕩蕩」とは荒廢の義ぢや。「若し是れ得底の人ならば、二六時中、一物に依倚せず。一物に依倚せずと雖も」と、サウあらうぞならば、佛にも法にも依らぬがサ、併し佛に代つて化するから。「若し一機一境を露さば、作麼生か他を摸索せん。這の僧問ふて道く、蓮花未だ水を出でざる時如何。智門云く、蓮花」と、サー人の爲め、拈鎚竪拂したら如何ぢや。時の人が如何かゝぐり當てやうぞ。僧と智門との問答はドウぢや。「便ち只だ攔問の一答なり。妨げず奇特なることを」と、智門が先をかなくつて、舌の先を打つた。俗に云ふ、機先を制すぢや。併しコノ十字は好くない、削るがよい。「諸方皆な之れを顚倒語と謂ふ。那裏にか此の如くなる」と、出を問ふたら不出を答へた。コレを取り違へた答と云ふがサ、ドウして左樣か。諸人何んと見る。コレがコノ則の餌ぢや。「見ずや、巖頭道く、常に貴ふらくは、未だ口を開かざる已前、猶ほ些子に較ることを」と、あのサイトリサシを見なさい。此方が未だ口を開かない已前に機を見て取るぢや。聲前の一句ぢや。「古人、機を露す處、已に是れ漏逗し了れり」と、問が出るや否や、荷葉と漏逗し、蓮花と漏逗し了つた。イヤ〳〵是れ、祖佛も命乞ひぢやものを。コレは巖頭の語ぢや。「如今の學者、古人の意を省せず、只管に去つて理論す。出水と未出水と、什麼の交渉か有らん。見ずや、僧、智門に問ふ、如何なるか是れ般若の體。門云く、蚌、明月を含む。僧云く、如何なるか是れ般若の用。門云く、兎子懷胎と。看よ、他、此の如く對答す」と、書生禪の理窟ぢやいかぬ。出水の、未出水のと、ソンナ處に用は無いぞ。僧が智門に般若の體を問ふたら、智門は、蚌が明月を含むとやつた。コレも難則ぢや。ソレから又た般若の用を問ふたら、兎が胎んだと。サー兎が胎んだか、ナンノ兎が胎まうかい。コノ南天棒なら、立臼が胎んだと云はうぞ。「天下の人、他の語脉を討ぬるに、得ざることを」と、サー是りや死語か活語か。雪門が天下に對しての商量ぢや。「或は人有つて夾山に問ふて道く、蓮花未だ水を出でざる時如何。只だ他に對して道はん、露柱燈籠と。且らく道へ、蓮花と是れ同か別か。水を出でて後如何。他に對して道はん、杖頭、日月を挑ぐ、脚下太だ泥深し、と。爾且らく道へ、是か不是か。且らく錯つて定盤星を認むること莫れ。雪竇弐繁だ慈悲、人の情見を打破す。所以に頌出す」と、圜悟に「未出水」を問ふたなら、「露柱燈籠」と答へやうと。コノ南天棒ならサウは云はん、豆腐々々と云はうぞ。又た「出水」を問ふ

たなら、「杖頭、日月を挑ぐ、脚下太だ泥深し」と、答へやうと。コレも納なら蒟蒻々々と云はうぞ。サー豆腐と蒟蒻と、同か別か、是か不是かサ。コレから雪竇が慈悲糞を垂れて頌出するを見るがよい。

蓮花荷葉報君知　○老婆心切○現成公案○文彩已彰　**出水何如未出時**　○泥裏洗土塊○分開也好○不可龍侗去也　**江北江南問王老**　○主人公在什麼處○問王老師作什麼○儞自踏破草鞋　**一狐疑了一狐疑**　○一坑埋却○自是儞疑○不免疑情未息○打云會麼

【和訓】　蓮花荷葉君に報じて知らしむ。（○老婆心切。○現成公案。○文彩已に彰る。）出水は何んぞ未出の時に如かん。（○泥裏に土塊を洗ふ。○分開すること也た好し。○龍侗し去る可からず。）江北江南王老に問へ。（○主人公什麼の處にか在る。○王老師に問ふて什麼か作さん。○儞自ら草鞋を踏破す。）一狐疑し了って一狐疑せん。（○一坑に埋却せん。○自ら是れ儞疑ふ。○免れず疑情未だ息まざることを。○打って云く會す麼。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「蓮花荷葉君に報じて知らしむ」と、本則は好く意を消せども、爭でか此の両句を吐出する底の心腸を知らんやぢや。「蓮花荷葉」、別に難題ぢやないのに、雪竇が斯う提げて來て君に知らしむト。サー如何ぢや、誤つて指注せまいぞ。

「出水は何んぞ未出の時に如かん」と、コノ語を吐いた腸に毛が生えた。

「江北江南王老に問へ」と、天下の諸老和尚も埒は明くまい。合點が行かずは、ソコラの王老に問ふて見よ。「王老」と云ふても、コヽでは南泉のことではないぞ。「東村の王老夜銭を燒く」と云ふやうな意味で、只だおやぢ達と云ふことぢや。支那には、張、王、李、趙の四姓が最も多い。ソレぢやからコノ「王老」はソンヂョそこらの坊様達を指すのぢや。字句にからまるまいぞ。

「一狐疑し了つて一狐疑せん」と、先も無眼子なりや、此方も無眼子ぢや。明眼の知識も此に到つては、亦た未徹在ぢや。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「蓮花荷葉報君知」――「老婆心切」、叮嚀に頌したは頌したがサ。「現成公案」二句が賤しいぞ。蓮花は蓮花、荷葉は荷葉で、月並文句ぢや。「文彩已に彰る」、コノ一句で尾が見えたぞ。サー何ん

と彰れたか。僧が趙州に問ふのに、「國師、侍者を喚ぶ意作麼生」と。ソコデ州が云く、「一人の暗裏に字を書すが如し。字成らずと雖も、文彩已に露る」と。一寸口を開けば、早や彰るぞ。

「出水何如未出時」――「泥裏に土塊を洗ふ」、無分曉、ムサ〳〵しいぞ。「分開すること也た好し」、出水、未出水、卽ち蓮花、荷葉と分開しても也た好いがサ。「龍侗し去る可からず」、ソレを蓮花ぢや、荷葉ぢやと、ニチャクリ散らかして、折角の結構なものに疵を付けるな。能く〳〵穿鑿して見るが好い。

「江北江南問王老」――「主人公什麼の處にか在る」、王老に問へと云ふが、主人公はドコに居るか。サー何んな人に問はうぞ。無駄事を云ふわい。「王老師に問ふて什麼か作さん」、エー盲目知識共に問ふて、ナントせうぞい。ソレよりも自分で自分に問ふて、自知するが好い。「爾自ら草鞋を踏破す」、雪竇お主こそ、草鞋を踏み切して人に問ひ廻つて、役にも立たぬことをして居るぞ。

「一狐疑了一狐疑」――「一坑に埋却せん」、サー雪竇も一つ坑に葬つて了へ。「花抄」には、コノ句が「打云會麼」の下へ入れてある。「自ら是れ爾疑ふ」、爾等が自分勝手で疑つて居るぢゃ。人の咎と思ふなよ。「免れず疑情未だ息まざることを」、コレでも未だ疑つて居るか、疑が晴れぬかとビシャり打つ。「打つて云く會す麼」、コノ中に宗旨があるぞ。併し知らざるものは、喚んで一棒と作さん。

智門本是浙人得得入川參香林既徹却回住隋州智門雪竇是他的子見得好窮玄極妙直道蓮花荷葉報君知出水何如未出時這裏要人直下便會山僧道未出水時如何露柱燈籠出水後如何杖頭挑日月脚下太泥深儞且莫錯認定盤星如今人咬人言句者有甚麼限儞且道出水時是什麼時節未出水時是什麼時節若向這裏見得許儞親見智門雪竇道儞若不見江北江南問王老雪竇意道儞只管去江北江南問尊宿出水與未出水江南添得兩句一重添一重展轉生疑且道何時得不疑去如野狐多疑冰凌上行以聽水聲江北添得兩句一重添一重展轉生疑且道何時得不疑去如野狐多疑冰凌上行以聽水聲若不鳴方可過河參學人若一狐疑了一狐疑幾時得平穩去

【和訓】智門、本と是れ浙人なり。得得として川に入つて香林に參す。既に徹して却回して、隋州の智門に住す。雪竇は是れ他の的子なり。見得して好く玄を窮め妙を極む。直に道ふ、蓮花荷葉君に報じて知らしむ、出水何んぞ未出の時に如かんと。這裏、人の直下に便ち會せんことを要す。山僧は道ふ、未出水の時如何。露柱燈籠。出水して後如何。杖頭、日月を挑ぐ、脚下太だ泥深しと。儞且らく、錯つて定盤星を認むること莫れ。如今の人、人の言句を咬む者の、甚麼の限りか有らん。儞且らく道へ、出水の時、是れ什麼の時節ぞ。未出水の時、是れ什麼の時節ぞ。若し這裏に向つて見得せば、爾に許す、親しく智門を見るとを。雪竇道く、儞若し見ずんば、江北江南王老に問へと。雪竇の意に道く、儞只管に江北江南に去つて、尊宿に出水と未出水とを問ふて、江南に兩句を添へ、得たり、江北に兩句を添へ、得たり。一重に一重を添へば、展轉して疑を生ぜんと。且らく道へ、何の時か疑はざることを得去らん。野狐の疑多くして、氷凌上に行つて以て水聲を聽き、若し鳴らずんば、方に河を過ぐ可きが如し。參學の人、若し一狐疑し了つて一狐疑せば、幾く時か平穩を得去らん。

【提唱】　コレから圜悟の評唱ぢや。「智門、本と是れ浙人なり。得得として川に入つて香林に參す。既に徹して却回して、隋州の智門に住す。雪竇は是れ他の的子なり。見得して好く玄を窮め妙を極む。直に道ふ、蓮花荷葉君に報じて知らしむ、出水何んぞ未出の時に如かん」と、コノ智門和尚は浙人ぢやつた。蜀に入り香林に參して徹見し、後ち智門に住はれたぢや。雪竇はコノ智門の的子ぢやからサ、手裏が能く見える處から、「蓮花荷葉君に報じて知らしむ、出水何んぞ未出の時に如かん」と切つて放つた。併し雪竇のコノ腹中を知る者はないぞ。「這裏、人の直下に便ち會せんことを要す」と、コリヤ見一統の常見ぢや。「山僧は道ふ、未出水の時如何。露柱燈籠。出水して後如何。杖頭、日月を挑ぐ、脚下太だ泥深し」と、コレ、「笠は重し吳天の雪、鞋は香し楚地の花」か。「儞且らく、錯つて定盤星を認むること莫れ」と、コノ評は的當でない。併し若し一隅の義となさば、又た妨けずぢや。「如今の人、人の言句を咬む者の、甚麼の限りか有らん」と、サウ云ふがサ、今時は中々咬む人さへもないぢや。「儞且らく道へ、出水の時、是れ什麼の時節ぞ。未出水の時、是れ什麼の時節ぞ」と、全體、出水、未出水の時節と、ソリヤ何んのことぢや。「若し這裏に向つて見得せば、儞に許す、親しく智門を見ることを」と、コノ蓮花荷葉は恐るべき底の一句子ぢや。コヽで見ると箭新羅を過ぐぢや。死水裡ではいかぬぞ。能く智門を見よ。「雪竇道く、儞若し見ずんば、江北江南王老に問へ」と、サーこの「王老」には二つの義がある。一つは王の姓氏が多いからと云ふのと、又た一つには、

箇々尊大であつてからに、自から知識ぢやと稱するからと、兩方へ掛けて云ふたぢや。「雪竇の意に道く、儞只管に江北江南に去つて、尊宿に出水と未出水とを問ふて、江南に兩句を添へ得たり、江北に兩句を添へ得たり。一重に一重を添へば、展轉して疑を生ぜんと。且らく道へ、何の時か疑はざるとを得去らん」と、江北へ行つて問ふては疑ひ、又た江南へ行つて問ふては疑ひ、疑に疑を重ね、ソレからソレへと、語句に付いて取り擴げていつたならば、サッパリとした場は得られまいぞ。「野狐の疑多くして、冰凌上に行つて、以つて水聲を聽き、若し鳴らずんば、方に河を過ぐ可きが如し」と、狐の奴が、氷の上で、水聲が聞えるかドウかと疑ふやうにサ。「參學の人、若し一狐疑し了つて一狐疑せば、幾く時か平穩を得去らん」と、ソレでも、疑はねば役に立たぬ。大疑の下に大悟有りぢや。疑の無いのは元の默庵ぢやぞ。

注釋　〔法幢を建てる〕　宗旨を顯揚すること。〔前箭は猶ほ輕く後箭は深し〕　前の箭は輕かりしも、後の箭は確かに手應へしたりとは、愈々出で〻愈々急處に的中する意。師家爲人の作略に對する評語。〔唱拍相ひ隨ふ〕　唱は、となへる。拍は、手をうつ即ち唱和すること。〔幽州は猶ほ自ら可なり最も苦しきは是れ江南〕　支那に於ける俚諺なり。宋朝の末葉に、欽宗皇帝は幽州即ち今の北京の地に都せしに、金人入寇して內外甚だ亂れ、都を江南の臨安府に遷す。是れ金を避くる計に出でたるものなれども、何んぞ知らん、宋の滅亡する基ならんとは。遂に欽宗、金に降り、宋朝は全く滅亡に歸したり。故に云ふ、幽州も苦は苦なりしが、江南に到つて滅亡の最大苦痛に比すれば、まだ〳〵それ程でも無かりしと。即ち前後の二つを並べて、前者は猶ほ可と

すべきも、後者に到つては、最も苦痛の極みなりと云ふ意。〔十成ぢやない〕充分、滿足ではない。〔三句を以て論ずべからず〕三句とは、函蓋乾坤の句、截斷衆流の句、隨波逐浪の句を云ふ。〔顢頇、籠洞〕無分曉、無分別の義なり。顢は又た瞞に作る、母官の切。頇は河干の切。大面の貌。籠は力董の切。侗は它孔の切、未成器を云ふ。俗の諺に曰く、冬瓜は直くして籠侗と。又た乾坤籠侗の言有り、世界、南北、自他、今古の分無きを謂ふ。〔投子〕投子大同禪師。翠微無學の法嗣。慈濟大師と諡さる。〔十界〕十種の境界を云ふ。卽ち、佛界、菩薩界、緣覺界、聲聞界、天上界、人間界、修羅界、畜生界、餓鬼界、地獄界の稱。此の中、聲聞界迄の四界を悟界とし、約言して四聖と云ひ、天上界以下の六界を迷界とし、約言して六凡と云ふ、又六道とも云ふ。〔十二時を使ひ得る〕自由自在なること。〔註緯〕緯は呼嫁の切、たぶらかす也。〔靈雲〕靈雲志勤禪師、溈山靈祐の法嗣也。〔牛頭〕牛頭山の法融禪師。四祖大醫道信の旁出法嗣。牛頭派の祖。〔大濟禪師〕日峯宗舜禪師。妙心寺中興の祖。〔心宗〕心宗大興禪師。大德寺の第二世。〔莽莽蕩蕩〕莽は母朗の切、草の深き貌。「左傳」に、杜預の曰く、「草、廣野に生じて莽々然たり」故に草莽と云ふ。蕩は待朗の切。蕩蕩は法度の廢壞せる貌。詩に、「王道蕩蕩」と。又た廣平の貌。〔巖頭〕巖頭全豁、德山宣鑑の法嗣。清巖大師と諡さる。〔サイトリサシ〕未だ言に發せざる前に、其の意を知ること。〔聲前の一句〕未だ音聲に發して、言語文字の句とならぬ以前の眞の活句を云ふ。〔笠は重し昊天の雪、鞋は香し楚地の花〕詩人、玉屑の詩の一節。唐の天寶の間僧可士、僧を送る詩に、「一鉢卽ち生涯、緣に隨つて歲華を度す。是の山に皆な寺有り、何處をか家と爲さざらん。笠は重し昊天の雪、鞋は香し楚地の花。他年禪室を訪ふ、路岐の餘きことを憚らんや」と。

第二十二則　雪峯龍鼻蛇

【雪峯龍鼻蛇】

垂示云、大方無外細若隣虛、擒縱非他、券舒在我、必欲解粘去縛直須削迹吞聲、人人坐斷要津、箇箇壁立千仞、且道是什麼人境界、試擧看。

【和訓】垂示に云く、大方外無し、細なること隣虛の若し。擒縱他に非らず、卷舒我に在り。必ず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須らく迹を削り聲を呑むべし。人人要津を坐斷し、箇箇壁立千仞ならん。且らく道へ、是れ什麼人の境界ぞ。試に擧す、看よ。

【提唱】コレは第二十二則、「雪峯龍鼻蛇」ぢや。コノ則はサ、雲門宗は本と馬大師より出て、雪峯玄沙の間に盛大であつたことを明すぢや。是れを以つて之れを考ふれば、五家は皆な雲門、臨濟の宗に全備して居るとも云へる。曹洞の五位、兼中至の如きは、雲門、臨濟の宗旨に參ぜなかつたら、全く辨了し難い。況んや兼中到、卽ち洞上の究意の位に於てをやぢや。又た溈仰の宗は、百丈の「獨坐大雄峯」の一機を離れず、又た法眼の普利全脫の旨は、玄沙、地藏の爲人方便の中から出て居る。畢竟して皆な雲門、臨濟に歸收して、是れが根基と爲るが故ぢや。コノ則は讀まうと擬れば、早や寒毛卓堅するぞ。能くコノ機を用ひ得る底の人は誰れぞとならばサ、馬祖、南泉、長沙、趙州、及び、黃檗、保福、長慶、興化、眞淨等であらうぞ。

又た白隱に就て斯う云ふ話がある。天明五戊申年の五月十五日に、智門蓮花の話を講じ了つて云ふには、老僧明朝、河西の奈良村西柳庵に往かうとする。諸子親參して、各五家の門戸を立て將ち來れ。我れ寺へ歸つて諸子の心を試んと云ひ了ると、諸子は悉く推して西宮の分衞に行つた。ソコデ白隱は晨を凌いて出で去つたが、駕に乘つて河を過ぎ、道西の町に至る途中の野の中で忽然として、先師(正受老人)叮囑の境界に撞着したので、歡喜躍雀して一偈を打せられたぢや。ソノ偈と云ふのは、「去年の今日始めて語を爲し、今歲の斯時自ら門に入る。中夏望を過ぎて辰、巳に向ひ、五家の要路是れ緣々」と、コレは白隱が得意の偈ぢや。即ち五月十六日に西村氏の宅で書かれたのぢや。前置が長かつた。サーこれから垂示ぢや。

「垂示に云く、大方外無し、細なること隣虛の若し」と、人々腹の中を見よ、何萬方里あるかサ、實に無邊際ぢや。コヽからコヽまでが内で、コヽから先が外と云ふやうな隔りはない。一法の周遍して法界に充塞し、實に外もない、内もないぞ。ソレを又た細かにと云はうぞならば、蟻の鬚まで も入り渡つて居るぢや。「隣虛」とは梵語ぢや、玆には微塵と云ふ。「楞嚴經」には、「更に隣虛を拆けば、即ち實に空の性なり」と云ふてある。物を打ち摧いて見よ、空となるぢや。「擒縱他に非らず、卷舒我に在り」と、コリヤ應機爲人の處ぢや。與ふと奪ふと、此方次第ぢや。「必らず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須らく迹を削り聲を呑むべし。人人要津を坐斷し、箇箇壁立千仞ならん」と、サー悟の金箔を剝がうとするならばサ、煩惱の迹も、菩提の迹も削り取れ。佛とも禪とも云ふやうなソンナものもサ。シッカと手に握つてからは、地獄を破らうと、天堂を碎かうと自由自在ぢや。「且らく道へ、是れ什麼人の境界ぞ。試に擧す、看よ」と、コリヤ何人の境界ぞと、下の本則へかけて云ふたぢや。

擧雪峯示衆云南山有一條鼈鼻蛇○見怪不怪其怪自壞○大小大怪事○不妨命人疑着　汝等諸人切須好看○囚○一場漏逗　長慶云今日堂中大有人喪身失命○普州人送賊○以己方人　僧擧似玄沙○同坑無異土○奴見婢慇懃○同病相憐　玄沙云須是稜兄始得雖然如此我卽不恁麼○不免作野狐精見解○是什麼消息○毒氣傷人　僧云和尚作麼生○也好撈着這老漢　玄沙云用南山作什麼○釣魚船上謝三郎○只這野狐精○猶較些子○喪身失命也不知　雲門以柱杖擡向雪峯面前作怕勢○怕他作什麼○一子親得○一等是弄精魂○諸人試辨看

【和訓】擧す。雪峯、衆に示して云く、南山に一條の鼈鼻蛇有り。（○怪を見て怪とせざれば其の怪自ら壞す。○大小大の怪事。○妨げず人をして疑着せしむることを。）汝等諸人、切に須らく好く看るべし。（○因。○一場の漏逗。）長慶云く、今日堂中、大いに人有つて喪身失命す。（○普州の人、晦を送る。○己を以て人に方ぶ。）僧、玄沙に擧似す。（○同坑に異土無し。○奴は婢を見て慇懃。○同病相ひ憐む。）玄沙云く、須らく是れ稜兄にして始めて得べし。然も此の如くなりと雖も、我は即ち不恁麼。（○野狐精の見解を作すことを免れず。○是れ什麼の消息ぞ。○毒氣、人を傷る。）僧云く、和尚作麼生。（○也た好し。這の老漢を拶着す。）玄沙云く、南山を用ひて什麼か作さん。（○釣魚船上の謝三郎。○只だ這の野狐精。○猶ほ些子に較れり。○喪身失命も也た知らず。）雲門拄杖を以て雪峯の面前に擬向して、怕るゝ勢を作す。（○他を怕れて什麼か作さん。○一子親しく得たり。○一等に是れ精魂を弄す。○諸人試に辨じて看よ。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「擧す。雪峯、衆に示して云く、南山に一條の鼈鼻蛇有り」と、コノ則は錄中の大關所ぢや。雪峯は好い子供揃ひぢやからサ、ススマジイ語を吐き出して、子供に弄ばするぞ。是れ巖下に、虎、兒を弄するぢや。「南山に一條の鼈鼻蛇有り」とは、コリャ雪峯山の峯境致ぢや。「鼈鼻蛇」とは面白いぞ。鼻が鼈のやうで、サウして色の白い、大毒虫ぢやと。イヤ〳〵そんなものではない、目もないぞ、鼻もないぞ。コノ南天棒なら鼈鼻蛇とは云はぬ、コノ座敷に一つの牡丹餅があると云はうぞ。サー南天棒の「牡丹餅」と雪峯の「鼈鼻蛇」と、どれだけ違ふか。

「汝等諸人、切に須らく好く看るべし」と、サー鼈鼻蛇を見よ。惡くしたら呑まれべい程に、コレは、容易に見るなと云ふ心に看るけれども、コヽはサ〳〵、大いに仔細があるぞ。

「長慶云く、今日堂中、大いに人有つて喪身失命す」と、唱拍錯らず。各是れ文殊、普賢の境界ぢや。「今日堂中、大いに人有つて」と、長慶なりやこそ、一ト支へ支へたれ。實に雪峯下四十餘人の隨一ぢや、大善知識ぢや。ソノ長慶が、南山などと餘處ではないと切つて出た。コノ座敷が全體是れ彌陀ぢやがドウぢや。サー各々彌陀になると、玆でソレ喪身失命する。コノ喪身失命を取り違へるな、「南山」と「堂中」とは一條ぢや、コヽに父子同道の處があるぞ。

「僧、玄沙に擧似す」と、長慶が雪峯と同道唱和の處を、或る僧が玄沙の師備禪師に擧似したものと見える。

「玄沙云く、須らく是れ稜兄にして始めて得べし。然も此の如くなりと雖も、我は即ち不恁麼」と、ソコデ玄沙の云ふのに、流石は稜兄ぢや、稜兄なりやこそ、サウも云ふたがサ、併しコノ玄沙は、南山と云ふは可厭ぢやわいと。又た一疋の鼈鼻蛇がノロリと出た。

「僧云く、和尚作麼生」と、ソレでは和尚はドンナに思ひますと。ソリャこそ、這の僧、鈎に取つ付いて來たぞ。

「玄沙云く、南山を用ひて什麼か作さん」と、玄沙は流石、一老程あるぞ。南山は可厭ぢやと云ふ

てサ、僧の問ひ來るを見て、「南山を用ひて什麼か作さん」と、實にハヤ、只つた一口に呑み盡したぞ。古今の秘術、一聲に盡せり。又た、脆を喪ひ了る。惡む可く笑ふ可し。

「雲門、拄杖を以て雪峯の面前に擯向して、怕るゝ勢を作す」と、南天棒もサ、以前はコノ語、容易の看を作し了つたが、今日看來れば寒毛卓竪するぢや。又蛇が一疋出てうせた。是も大きいぞ、長慶は呑み、玄沙は毒を吐くに當つて、雲門は却つてコノ好運爲を作し去つた。「擯向」とは拄杖を立てざまに、擲つことぢや。コノ働きは誰れから習ふたのかサ、諸人は、サー如何用ひ得るぞ。

習語　コレから圜悟の着語ぢや。

「擧雪峯示衆云南山有一條鼈鼻蛇」――「怪を見て怪とせざれば其の怪自ら壞す」、コレは怪物かナ、怪物を怪物と見るやソレデすみぢや。コノ句は好くない。「大小大の怪事」、サハさりながら、實にスサマジイぞ。「大小大」とは北人が人を罵るのに、發端に遣ふ語ぢや。「妨げず人をして疑着せしむることを」、ナンの疑着ぞ。

「汝等諸人切須好看」――「囚」、ドコに居るかと思ふたらコヽに居つたか。スハ見よと、コリヤ圜悟の聲ぢや。泉大道、龍に騎るを囚と云ふ。能く力を着けて看よ。「一場の漏逗」、せう事なしに「切に須らく好く看るべし」などと云ふたは、既に漏逗ぢや。

「長慶云今日堂中大有人喪身失命」――「普州の人、賊を送る」、コレはサ方語で、「身を兼ねて内に在り」と云ふとぢや。普州の人は皆な賊ぢや、ソレぢやから、逃ぐる者も追ふ者も皆な賊ぢや。雪峯も長慶も同賊ぢや。併し長慶を賊意と見ては違ふぞ。雪峯が毒蛇を出したから、長慶もソレに劣らぬ毒蛇を出して、雪峯を一呑みにしたぢや。又た長慶、自分は活漢ぢやと思ふてからに、「今日堂中大いに人有つて喪身失命す」などとホザイたがサ、長慶も矢つ張り死漢ぢや。「己を以つて人に方ぶ」、長慶、自分が一呑に逢ふたものぢやから、人もサウと思ふか。

「僧擧似玄沙」――「同坑に異土無し」、コリヤ皆な透過の人々、何も〳〵毒蛇ぢや。「奴は婢を見て慇懃」、權助はお三に叮嚀ぢや。ソレ相應な處に問ひに行くものぢや。「同病相ひ憐れむ」、毒蛇に喰はれて、同じやうに疵を痛むものぞ。皆な雪峯下ぢやから、氣脈が通ずるぢや。

「玄沙云須是稜兄始得雖然如此我卽不恁麼」――「野狐精の見解を作すよを免れず」、雪峯の奴が古狐ぢやに、玄沙が又た何をか云ふて、人を誑すぞ。「是れ什麼の消息ぞ」、玄沙の「不恁麼」と云たは、ナンたる消息ぞと咎めた。サー何んと云へいぞ。「毒氣、人を傷る」、元來が蛇の子ぢやから、問へば直ぐ、コノやうに毒を吹き掛けるぢや。實に恐しいものかな、魔界へ入つたやうぢや。

「僧云和尙作麼生」――「也た好し這の老漢を拶着す」、コノ僧、能く一拶した。サウぢや〳〵、サウいかねばならぬ處ぢや。

「玄沙云用南山作什麼」――「釣魚船上の謝三郎」、コノ魚屋の小野郎ト。圜悟も膽が潰れたさう

な。玄沙は魚釣の子ぢやから、流石人を釣るのは上手ぢや、人計りか佛祖をも釣り上げるぞ。コノ一句最も好い、外の語は好くない創るがよい。「只だ這の野狐精」、「猶ほ些子に較れり」、玄沙も古狐ぢや、よく人を誑す。コノ九字は福本には無い。「喪身失命も也た知らず」、エー己が身體のクヅレルのも知らずにサ。雪峯が南山と云へば、玄沙は南山を用ひぬと云ふ。蜀本には、「猶較些子」とコノ句との間に、「釣魚」の句がある。順序はソノ方が好い。

「雲門以拄杖擲向雪峯面前作怕勢」――「他を怕れて什麼か作さん」、ナニが怕しいぞ。蛇が蛇を怕れてドウするか。コレハ圜悟なればこそ、外の人なら三十棒ぢや。「一子親しく得たり」、雪峯の子供の中でも、雲門と云ふ乙子が最も勝れた腕前ぢや。親に似た毒語ぢや。「一等に是れ精魂を弄す」、親子四人、いづれも精魂を弄する死漢ぢやがサ、中に就いて親疎を辨じて看よ。「諸人試に辨じて看よ」、サー拄杖を前へ投げ出した處、目を着けて看よ。

儞若平展一任平展儞若打破一任打破雪峯與巖頭欽山同行凡三到投子九上洞山後參德山方打破漆桶一日率巖頭訪欽山至鼇山店上阻雪巖頭每日只是打睡雪峯一向坐禪巖頭喝云噇眠去每日牀上恰似七村裏土地相似佗時後日魔魅人家男女去在峯自點胸云某甲這裏未穩在不敢自瞞頭云我將謂儞已後向孤峯頂上盤結草庵播揚大教猶作這箇語話峯云某甲實未穩在頭云儞若實如此據儞見處一一道來是處我與儞證明不是處與儞剗却峯遂舉見鹽官上堂舉色空義得箇入處頭云此去三十年切忌舉着峯又舉見洞山過水頌得箇入處頭云若與麼自救不了後到德山問從上宗乘中事學人還有分也無山打一棒曰道什麼我當時如桶底脫相似頭遂喝云儞不聞道從門入者不是家珍峯云他後如何即是頭云他日若欲播揚大教一一從自己胸襟流出將來與我蓋天蓋地去峯於言下大悟便禮拜起來連聲叫云今日始是鼇山成道今日始是鼇山成道後回閩中住象骨山自貽作頌云人生倏忽暫須臾浮世那能得久居出嶺纔登三十二入閩早是四旬餘他非不用頻頻舉己過應須旋旋除奉報滿朝朱紫貴閻王不怕佩金魚凡上堂示衆云一一蓋天蓋地更不說玄說妙亦不說心說性突然獨露加大火聚近之則燎却面門似太阿劍擬之則喪身失命若也佇思停機則沒干涉只如百丈問黃檗甚處去來檗云大雄山下採菌去來丈云還見大蟲麼檗便作虎聲丈便拈斧作斫勢檗遂打百丈一掴丈吟吟而笑便歸陞座謂衆云大雄山有一大蟲汝等諸人切須好看老僧今日親遭一口趙州凡見僧便問曾到此間麼云曾到或云不曾到州總云喫茶去院主云和尚尋常問僧曾到與不曾到總道喫茶去意旨如何州云院主主應諾州云喫茶去紫胡門下立一牌牌上書云紫胡有一狗上取人頭中取人腰下取人脚擬議則喪身失命或新到纔相看師便喝云看狗僧纔回首師便歸方丈正如雪峯

道南山有一條鼈鼻蛇汝等諸人切須好看正當恁麼時儞作麼生祇對不躡前蹤試請道看到這裏也須會格外句始得一切公案語言擧得將來便知落處看他恁麼示衆且不與儞說行說解還將情識測度得麼是他家兒孫自然道得恰好所以古人道承言須會宗勿自立規矩言須有格外句須要透關若是語不離窠窟墮在毒海中也雪峯恁麼示衆可謂無味之談塞斷人口長慶玄沙皆是他家屋裏人方會他恁麼說話只如雪峯道南山有一條鼈鼻蛇諸人還知落處麼到這裏須是具通方眼始得不見眞淨有頌云打鼓弄琵琶相逢兩會家雲門能唱和長慶解隨邪古典無音韻南山鼈鼻蛇何人知此意端的是玄沙只如長慶恁麼祇對且道意作麼生到這裏如擊石火似閃電光方可搆得若有纎毫去不盡便搆他底不得可惜許人多向長慶言下生情解道堂中機有聞處便是喪身失命有者道元無一星事平白地上說這般話疑人人聞他道南山有一條鼈鼻蛇儞便疑着若恁麼會且得沒交涉只去他言語上作活計既不恁麼會又作麼生會後來有僧擧似玄沙玄沙云須是稜兄始得雖然如是我即不恁麼僧云和尚又作麼生沙云用南山作什麼但看玄沙語中便有出身處便云用南山作什麼若不是玄沙也大難酬對只如他恁麼道南山有一條鼈鼻蛇且道在什麼處到這裏須是向上人方會恁麼說話古人道釣魚船上謝三郎不愛南山鼈鼻蛇却到雲門以拄杖擯向雪峯面前作怕勢雲門有弄蛇手脚不犯鋒鋩明頭也打着暗頭也打着他尋常爲人如舞太阿劍相似有時飛向人眉毛眼睫上有時飛向三千里外取人頭雲門擯拄杖作怕勢且不是弄精魂他莫也是喪身失命麼作家宗師終不去一言一句上作活計雪竇只爲愛雲門契證得雪峯意所以頌出

【和訓】儞若し平展せば、平展するに一任す。儞若し打破せば、打破するに一任す。雪峯、巖頭欽山と同行なり。凡そ三たび投子に到り、九たび洞山に上る。後、德山に參して、方に漆桶を打破す。一日巖頭を率いて、欽山を訪はんとす。鼇山店上に至つて雪に阻らる。巖頭毎日只だ是れ打睡す。雪峯は一向に坐禪す。巖頭喝して云く、瞳眠し去れ。毎日牀上、恰も七村裏の土地に似て相ひ似たり。佗時後日、人家の男女を魔魅し去ることを在らんと。峯、自ら點胸して云く、某甲が這裏未穩在、敢て自ら瞞ぜず。頭云く、我れ將に謂へり。儞已後孤峯頂上に向つて、草庵を結して、大教を播揚せんと。猶ほ這箇の語話を作す。峯云く、某甲實に未穩在。頭云く、儞若し實に此の如くならば、儞が見處に據つて、一一に道ひ來れ。是處をば我れ儞が與めに證明し、不是處をば儞が與めに剗却せんと。峯遂に擧す。鹽官の上堂に、色來の義を擧するを見て、箇の入處を得たりと。頭云く、此去つて三十年、切に忌む擧着することを。峯又た擧す。洞山過水の頌を見て、箇の入處を得たりと。頭云く、若し與麼ならば自救不了。後に德山に到つて問ふ、從上宗乘の中の事、學人還つて分有りや也た無や。山打つこと一棒して曰く、什麼と道ふぞと。我れ當時、桶底の脫するが如くに相ひ似たり。頭遂に喝して云く、儞、道ふことを聞かずや、門從り入る者は是れ家珍にあらずと。峯云く、他、後に如何んが即ち是ならん。頭云く、他日若し大教を播揚せんと欲せば、一一自己の胸襟より流出し將ち來つて、我が與めに鑿天鑿地し去れ。峯、言下に於て大悟。便ち禮拜し、起き來つて連聲に喝んで云く、今日始めて是れ鼇山成道、今日始めて是れ鼇山成道と。後に閩中に回つて、象骨山に住す。自ら賠るに頌を作つて云く、人生倏忽として暫須臾、浮世那んぞ能く久居することを得ん。嶺を出でゝ纎かに三十二に登らんとす、閻に入れば早く是れ四句餘。他の非、頻頻に擧することを用ひず、己が過、廉に須らく旋旋に除くべし。滿朝朱紫の貴に報じ奉る。閻王は怕れず金魚を佩ぶるとをと。凡そ

上堂、衆に示して云く、一一鑒に天機地、更に刻と說き妙と說かず、亦た心と說き性と說かず、突然として闖る。大火火聚の如し、之れに近づく則ん面門を燒爛す。太虛の劍に似たり、之れを擬する人は喪身亡命す。若も也た信思忖せば千差を沒す。

只だ百丈、潙仰に問ふが如きんば、誰れの處よりか去て來る。麼と云はく、大雄山下に鼎を煑つて主客を辨ず。丈云はく、還つて大龍蛇を見る麼。麼と云はば便ち虎鬚を作す。丈便ち拳を拈じて所る處を問ふ。麼と遂に百丈を打つこと一棚す。丈、吟々として笑ふ。便ち歸る。

州に見だす、そ僧を見て便ち問ふ、曾つて此の間に到る麼。云はく、曾つて到る。或は云はく、曾つて到らず。州、總に云はく、曾つて到らば、今日過ぎんを堪しく一口に盡ふと。

主は云はく、和尚の常品、僧に問ふ、曾つて到るか、曾つて到らざるか、總に道ふ喫茶去と。意旨如何。州に云はく、院主。主、應諾す。

州、云はく、喫茶去と。衆に揖して、門下に一陣を立つ。院は上堂に普しして云はく、衆に一狗が有り、上は人の頭を取り、中は人の腰を取り、下は人の脚を取る。擬議すれば喪身失命すと。或は新化到つて總かに相ふ有れば、師便ち喝して云はく、狗を看よと。僧ち龍かに首を回せば、師便ち方丈に歸る。

雪峯の、南山に一條の龍蛇を有り。次に等閑人、切に須らく好く看るべしと道ふが如きんば、正に當に感ずべし。前既に麼を聞ます、或は問ふ、道へ、看んと。遂り到つて、也た須らく是れ格外の旬を會して、始て麼の時、個の作麼生か、對せん。

得べし。一切の公案、語に言ひ、擧し得、將ち來らば、便ち落處を知らん。看よ、他の恁麼に衆に示すことを。且らく圓悟が與めに行ずと說き解と說かず、還つて情識を將つて測度し得ん麼。是れ他家の兒孫、自然に道ひ得て恰好なり。所以に古人道く、言を承けては須らく彩を會すべし、自ら規矩を立ることを勿れと。言には須らく格外に有るべし、句は須らく透脫に要すべし。若し是れ語、變通を解れば、海枯の中に確乎たり。雪峯恁麼に衆に示す、謂つ可し、無味の酸、人々口を震駭す。長慶、玄沙、若も是れ他家屋裏の人にして、方に他の恁麼の說話を會す。只だ雪峯、南山に一條の龍蛇を有りと道ふが如きんば、說と人に過つて落處を知る麼。這裏に到つて、須らく是れ消息を具して、始めて得べし。見ずや、高峯淨、卻て有り。云はく、蛟を打ち起て珠を弄ず。

雲門施、唱和す、長慶邪に隨ふことを解す。古に曲を、音に和して無し、南院山の龍蛇。何等人か出の意を知る、凝的皆是れ玄沙と。只だ、長慶恁麼に祇對するが如きんば、且らく道へ、意作麼生か、這裏に到つて、驟雨行火の如く、閃電光の如し。

長慶恁麼に祇對するが如きんば、且らく道へ、意作麼生か、這裏に到つて、驟雨行火の如く、閃電光の如し。

州、云はく、南山の龍蛇を愛せずと。却つて雲門に到つて、挂杖を以つて雪峯の面前に擲ぐして、怕る〻、勢を作す。雲門、蛇を弄する手を舉げて有つて、龍蛇を犯さず。明み有つて、或も也た打殺す、或も也た打殺す。他、尋常人の爲めにすること、大に阿の劍を鑄て如くに相ひ似たり、有る時は、飛んで三千里外に向つて、人の頭を取る。雲門、挂杖を擲つて怕る〻、勢を作す。他、也た是れ喪身失命することを要し、恁麼の作家の宗師、終に一言一句、上に去つて活路を作さず。雪峯、只だ雲門の、雪峯の意に契かんことを得ることを要するが爲めに、所以に頌を出す。

【提唱】　コレから圜悟の評唱ぢや。「偏若し平展せば、平展するに一任す」と、ヨッヤ長慶的ぢや。「今日堂中、大いに人有つて喪身失命す」と云ふに當る。ラッピラに出さば、出し次第ぢや。卽ち此の公案を平展せば、平展するに一任する。「偏若し打破せば、打破するに一任す」と、ヨッヤ玄沙底ぢや。「南山を用ひて什麼か作さん」と云ふに當る。打破しを云はば云ひ次第ぢや。卽ち打破せば、打破するに一任ぢや。「雪峯、巖頭欽山と同行なり。凡そ三ヶ所の坂子に到り、九たび洞山に上る。後、德山に參して、方に漆桶を打破す」と、コレから雪峯の因緣ぢや。「一日巖頭を率いて、欽山を訪はん

とす。鼇山店上に至つて雪に阻てらる。巖頭毎日只だ是れ打睡す。雪峯一向に坐禪す」と、コレは臨濟を訪ねた時のことぢや。コヽに錦香囊の因緣があつた。處が鼇山に至つて大雪に出逢つて、行くも歸るも出來ぬ、思はず雪見ぢや。スルト巖頭は毎日寢てばかり居つた。「あら樂や虛空を家と住みなして須彌を枕に獨り寢の春」か。併し雪峯は一向に坐禪した。「巖頭喝して云く、噇眠し去れ。毎日牀上、恰かも七村裏の土地に似て相ひ似たり」と、コノ呵責のスサマジイ處を知る者は稀れぢや。貴樣も眠れ。毎日々々床上でサ、土地神の作り付けのやうに、魔魅げな面をして、坐禪めいた振りをさらす。「佗時後日、人家の男女を魔魅し去ることあらん」と、已後には人をも魔魅せうと怒鳴つた。コレが雲門宗の出處ぢや。「峯、自ら點胸して云く、某甲が這裏未穩在、敢て自ら瞞ぜず。頭云く、我れ將に謂へり、爾已後孤峯頂上に向つて、草庵を盤結して、大敎を播揚せんと。猶ほ這箇の語話を作す」と、雪峯は、未だ々々胸中穩でないわいと云ふと、巖頭が、エー貴公は後には、佛祖も足踏みならぬ處に向つてからに、大いに祖敎を播揚するぢやらう。「峯云く、某甲實に未穩在。頭云く、爾若し實に此の如くならば、爾が見處に據つて、一一に道ひ來れ。是處をば我れ爾が與めに證明し、不是處をば爾が與めに剗却せん」と、雪峯が猶ほ未穩在と云ふと、巖頭が、サー全く未穩在ならば、爾が思ふ處を一々にマヶ出して見よと、コヽが檢定ぢや。「峯遂に擧す。鹽官の上堂に、色空の義を擧すを見て、箇の入處を得たり」と、鹽官の上堂に、「色卽是空」を擧するを見て、コヽが手に入つたト。「頭云く、此去つて三十年、切に忌む學着することを」と、アヽ措いてくれ〳〵。エーそんなとは三十年間は齒より外へ出すな、馬鹿々々しいト。コノ鹽官の上堂の示衆を詳しく云へば「夫れ諸佛の本源は、衆生の本有。迷ふ時は空を呼んで色と作し、了する時は色を呼んで空と作す。色空明暗、終に差別無し、看破せば還つて同じ」と、又た頌古の「聯珠集」の第一に、「佛陀跋陀、生法師と之れを論ず。衆微粟を色と曰ひ、衆微、自性無きを空と曰ふ。只だ因中の色空を明得して、未だ果上の色空を明めざる在り云々」と、ソレから鹽官は、「因中の色空は總に是れ夢中に夢を說く云々」と云ふたがサ、巖頭は是れをも嫌却したぞ。「峯又た擧す。洞山過水の頌を見て、箇の入處を得たり」と、洞山和尙が先きに雲巖の處に在つて、無情說法を問ふて、後ち辭し去つたが、疑心を懷いた。スルト因に水を過ぎて影ヶ睹、前旨を大悟した。ソノ時に偈がある。曰く「切に忌む他に從つて覓ぐることを、迢迢として我と疎なり。我れ今獨り自ら往く、處處に渠に逢ふことを得。渠今正に是れ我れ、我れ今是れ渠にあらず。應に須らく恁麼に會して、方に如如に契ふことを得べし」と。雪峯がコノ見處を提出したのぢや。「頭云く、若し與麼ならば自救不了」と、ソコデ巖頭の云ふのに、ソンナ見やうぢや他を救ふどころか、自分をも救へまいぞ。「後に德山に到つて問ふ、從上宗乘の中の事、學入還つて分有りや也た無や」と、ソレから雪峯は德山の處へ行つて、「從上宗乘の中の事」を持ち出して、己も喰はるゝかドウかと問ふた。「山、打つこと一棒して曰く、什麼と道ふ

ぞと。我れ當時、桶底の脱するが如くに相ひ似たり」と、德山、ピッシャリと一棒喫はした。面白い接しやうぢや。コレで悟も何も打毀して仕舞つた。けれども、「桶底の脱するが如くに相ひ似たり」と、初心改めざる處があるぢや。「頭遂に喝して云く、儞、道ふことを聞かずや、門從り入る者は是れ家珍にあらず」と、サー聞け、六根門頭より入る者は家珍ぢや無いぞ。「峯云く、他、後に如何んが卽ち是ならん」と、コリャ甚だ實頭ぢや。「頭云く、他日若し大敎を播揚せんと欲せば、一一自己の胸襟より流出し、將ち來つて、我が與めに葢天葢地し去れ」と、是れサ、コヽの處に仔細あらでは適はぬぞ。假りにも大敎を播揚しやうと思ふならば、一一我が物にして、天地をも葢ふやうにせなけりやならぬぞ。「峯、言下に於て大悟。便ち禮拜し、起き來つて連聲に叫んで云く、今日始めて是れ鼇山成道、今日始めて是れ鼇山成道と」、ソコデ始めて大悟した。コレが「鼇山成道」ぢや。「後に閩中に歸つて、象骨山に住す。自ら貽るゝ頌を作つて云く」と、閩中は雪峯の故郷ぢやから、歸つて來て、象骨山に住んだ。コノ雪峯山にある石は、形が象骨に似て白色である處から、象骨山とも云ふが、又たソノ山高くして白く見えるので、一名を雪峯山とも云ふぢや。雪峯はコノ山に住んでから、自ら頌を作つて後人に貽した。コノ頌中々容易な頌ではないぞ。實にハヤ雪峯門下の古曲ぢや。諸人決して等閑の看をなしてはならぬ。「人生倏忽として暫須臾、浮世那んぞ能く久居することを得ん」と、「毛晃」に「倏忽」とは犬の疾走する有樣ぢやと。ぢやから倏の字の火は、犬に作るがよいと云ふ。實に人生は暫時も止らぬ。コノ南天棒もイッの間にやら八十と云ふになつた。「嶺を出でて纔かに三十二に登らんとす、閩に入れば早く是れ四旬餘」と、飛猿嶺を出て三十二年間徧歷したト。コノ「纔」と云ふ字が、或本には「歳」になつて居る。コノ南天棒もサ、三十年の行脚に、二十五道場を徧歷して、五十餘名の智識と商量した。サウして雪峯山に住むやうになつては、早や四十六七年になるぢや。「他の非、頻頻に舉することを用ひず、己が過、應に須らく旋旋に除くべし」と、ヤー是ぢや、非ぢやと、人には關ふな。自己の過を除き去るに急々たるべしぢや。コノ「應」は「還」とする方がよい。「滿朝朱紫の貴に報し奉る、閻王は怕れず金魚を佩ぶることをと」、サー氣を付けぬと、ドンナ高位高官な人でも、紫衣金襴の香衣でも、無常の刹鬼は追ひ立て〳〵行くぞ。閻魔王は少しも怕れたり、頓着はせぬ。「云ふならく奈落の底に沈みては刹利も須陀も變らざりけり」ぢや。諸人、能く無常を知るが好いぞ。「凡そ上堂、衆に示して云く、一一葢天葢地、更に玄と說き妙と說かず、亦た心と說き性と說かず、突然として獨露す。大火聚の如し、之れに近く則のは面門を燎却す。太阿の劍に似たり、之れを擬する則んは喪身失命す」と、コレは鼇山成道を宣せられたのぢや。一一葢天葢地ぢや、置き處はない。實に一佛性、天を拄へ地を拄ふ。上霄漢に透り、下黃泉に徹する迄、只だコノ一句子ぢや。實にハヤ佛祖も命を乞ふぢやらう。「玄と說かず妙と說かず、亦た心と說かず性と說かず。突然として獨露す」とは、コリャ巖頭の誂へた通りぢや。盤に和して托出す夜明珠

か。「突然として獨露す」で、徧界曾つて藏せずがやや。併しサ、籔から棒を突き出すやうにト、サー如何突き出すか。「遠州濱松は好い茶の出る處乙女やりたや茶を摘みに」がやや。コノ味が會かるかナ、コノ意子合が合點されらどなら、喪身失命がや。「上堂示衆云」の云といふ字は無い方がよい。「若し也た佇思停機せば干涉を沒す」と、サー、ら〳〵すると白雲萬里がや。示衆の語は何んの役にも立たぬ。コレ迄が上堂の語がや。「只だ百丈、黃檗に問ふが如さんば、甚れの處よりか去來する。檗云く、大雄山下に菌を採つて去來す。丈云く、還つて大蟲を見るか。檗便ち虎聲を作す。丈便ち斧を拈じて斫る勢を作す。檗遂に百丈を打つと一摑す。丈、吟吟として笑ふ。便ち歸つて座」と、コレからソノ類則を擧するがや。百丈が黃檗にお主はドコから來せたと問ふた。スルト黃檗が、大雄山で菌を採つて來たと云ふた。百丈も拔からぬ、ソレがや大蟲を見なかつたかト。ソコデ黃檗がイキナリ虎聲をした。サーこの虎聲がサ、今も云ふた「突然」か「大火聚」か。百丈が斧を取つて打たらとしたら、黃檗がアベコベに手を側てゝピシャと打つた。スルト百丈は打たれながら、息の下でゝと忍び笑をした。ソレから歸つて坐に座つた。「衆に謂つて云く。大雄山に一の大蟲有り。汝等諸人、切に須らく好く看るべし、老僧今日親しく一口に遇ふ」と、コノ山に大蟲が居るから、看よ〳〵。祠も今日一口にせられた。兒を憐んで醜を覺えずがや。「趙州凡そ僧を見ては便ち問ふ、曾つて此の間に到る麼。云く、曾つて到る。或は云く、曾つて到らず。州、總に云く、喫茶去と。院主云く、和尙尋常、僧に問ふ、曾つて到ると、曾つて到らざると、總に道ふ喫茶去と。意旨如何。州云く、院主。主、應諾す。州云く、喫茶去」と、コレも類則がや、コノ話は實に是れ無味の談、人口を塞斷するがや。サー趙州の喫茶去、是れ「突然」か「大火聚」か。イヤハヤ洒落れた老僧がやわい。「紫胡、門下に一牌を立つ。牌上に書して云く、紫胡に一狗有り、上、人の頭を取り、中、人の腰を取り、下、人の脚を取る。擬議すれば喪身失命すと。或は新到纔かに相看れば、師便ち喝して云く、狗を看よと。僧纔かに首を回せば、師便ち方丈に歸る」と、コリヤ恐る可しがや。一千七百則の公案の那邊に、コノやうな毒氣があるかサ。紫胡門下に一狗があつたが、マルデ人のやうな狗がやや。坊主が來て相見すると、直に狗を見よと云ふ。僧が後方を振り返り見るや、紫胡はスト〳〵と方丈に歸る。ソノ風光實に愛す可しがや。天晴見事々々。「雪峯の、南山に一條の寵桑蛇有り。汝等諸人、切に須らく好く看るべしと道ふが如さんば」と、サー諸人、虎が出るぞ、用心せよ。「正當恁麼の時、爾作麼生か祗對せん。前蹤を蹈まず、試に請ふ、道へ、看ん」と、長慶、玄沙、雲門等は且らく措き、諸人はサー如何がや。試に道ふて看よ。「這裏に到つて、也た須らく是れ格外の句を會して、始めて得べし。一切の公案、語言、舉し得、將ち來らば、便ち落處を知らん。看よ、他の恁麼に來に示すことを。且らく爾が爲めに行と說き解と說かず、還つて情識を將つて測度し得ん麼」と、難透の句を會してあらうぞならば、サ、一切の公案を馬に付けて來やうとも、チャンと落處を知るがや。「蓋天蓋

地」の示衆を見よ。とても情識ぢや測度は出來ぬぞ。「是れ他家の兒孫、自然に道ひ得て恰好なり」と、長慶、玄沙、雲門なりやこそ、道ひ得て、いづれも分明ぢや。「所以に古人道く、言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立すること勿れ」と、コレは石頭和尚の「參同契」の中にある語ぢや。學人は師家の一言一句を奉受したならば、須らく祖々傳來の宗旨を會してサ、必らずカウありさうなもの、ア、ありさうなものと私に規矩を立つるな。「言は須らく格外有るべし、句は須らく透關を要すべし」と、併し、又た是れ規矩ではないかな。「若し是れ語、窠窟を離れずんば、毒海の中に墮在せん」と、悟の窠窟、卽ち正位を離れなかつたならば毒海中に墮ちるぞ。「雪峯恁麼に衆に示す、謂つ可し、無味の談、人口を塞鬪す」と、味も素氣もない評クッ、喰はれないでナンとする。

三世の如來も氣を呑み、聲を飲むぢや。實にハヤ、諸人の口を推し塞いだ。「長慶、玄沙、皆な是れ他家屋裏の人にして、方に他の恁麼の說話を會す。只だ雪峯、南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふが如きんば、諸人還つて落處を知る麼」と、コレは先刻御承知のことぢやかサ。「這裏に到つて、須らく是れ通方の眼を具して、始めて得べし」と、諸人はコノ則をドウ肯ふか。「見ずや、眞淨、頌有り、云く」と、眞淨、名は克文、黃龍慧南和尙に嗣いた。コノ眞淨と云ふは、實に五百年間出の人ぢや。能く此の則に徹して頌せられた。ソノ頌は、「鼓を打ち琵琶を弄して、相ひ逢ふ兩會家」と、知音同士の三人が相ひ聚つてサ、大鼓や琵琶を鳴らし、師學、賓主、手合が揃ふて面白い。雪峯は主人、外の三人は賓ぢや。「雲門能く唱和す、長慶邪に隨ふことを解す」と、就中雲門が好く雪峯曲を調べ、ソレへ自分の拍子をも付けて謠ふた。ソシテ長慶は、「堂中大いに人有つて喪身失命す」と云ふて、雪峯の毒手を見て、更に毒手を下した。「古曲、音韻無し、南山の鼈鼻蛇」と、聞く處も見る處もないか。音も調も好くつて、而も聞き取れぬは、コノ南山の鼈鼻蛇の類か。「何人か此の意を知る、端的是れ玄沙と」、コノ曲は無音韻ぢや程に、知る人がないぞ。併しサ、誰がコノ意を知るぞと云へば玄沙かな。「只だ、長慶恁麼に祇對するが如きんば、且らく道へ、意作麼生」と、サー長慶が答へた處はドウぢや。「這裏に到つて、擊石火の如く、閃電光に似たり、方に搆得す可し」と、コリヤ長慶の語ぢや。別にスルドはないが、眼がなければ見えぬ、骨折れ〳〵。「若し纖毫も去つて盡さゞること有らば、便ち他底に搆ること不得ならん。可惜許。人多く長慶の言下に向つて情解を生じて道ふ」と、難則で以つてからに、知見とか習氣とかを、手前で打ち拔き〳〵盡すでないならば、長慶にしてやられるぞ。ソレをも知らずに、長慶の言下に付き廻されて、「堂中纔かに聞處有らば、便ち是れ喪身失命せん」と、コノ示衆は死タワとぢやとサ、コレが今時の悟りぢや。「有る者は道ふ、元と一星事無し。平白地上に這般の話を說いて人を疑はしむ。人、他の、南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふを聞いて、儞便ち疑着すと。若し恁麼に會せば、且得沒交涉」と、又た或者は云ふのに、別に云ふことも語ることもない、あからさまぢやのに、ソレを南山に一條の鼈鼻蛇有りなぞと云ふて、人を疑

着せしめるのぢやと。コレは立枯輩の云ふことぢや。「只だ他の言語の上に去つて活計を作さば、既に恁麼に會せず、又た作麼生か會せん」と、サー他の言語を退けば又た如何ぢや。言語上に去つてと云ふても左様でない。又た去らぬと云ふても左様でない。コヽに「活計を作す」とは、一トかまへかまへることぢや。サーから會せなけりゃ、ドウ會するぞ、「後來僧有り、玄沙に擧似す。玄沙云く、須らく是れ稜兒にして始めて得べし。然も是の如くなりと雖も、我は卽ち不恁麼。僧云く、和尙又た恁麼生。沙云く、南山を用ひて什麼か作さんと。但だ看よ、玄沙の語中、便ち其身の處有ることを。便ち云く、南山を用ひて什麼か作さんと」、コノ玄沙の語は實に好語ぢやが、中々容易でない、錯つて會するものが多いぞ。只だ鼈鼻蛇とばかり云はうと云ふことか。サーこの語が好いと云ふてドコが好いか、看よ〳〵。「若し是れ玄沙にあらずんば、也た大いに酬對し難し。只だ他、恁麼に、南山に一條の鼈鼻蛇有りと道ふが如きんば、且らく道へ、什麼の處にか在る。這裏に到つて、須らく是れ向上の人にして、方に恁麼の說話を念すべし」と、コリヤ中々難透ぢや。玄沙なりやこそ、カウ返答もしたらう。サー何處に鼈鼻蛇が居るぞ。コレはサ、向上の人て無うても、坐禪に骨折るとコノ蛇の頭から尻ホタまで、鱗が何枚あると云ふことも、チャンと知れるぢや。「古人道く、釣魚船上の謝三郎、南山の鼈鼻蛇を愛せず」と、コノ古人とは誰れを指したものかサ、大方雪竇を云ふたものぢやらう。「南山の鼈鼻蛇を愛せず」とは鼈鼻蛇を愛すと云ふことぢや。「雪竇後錄」には斯うある。

「上堂して曰く、字を以つて成らず、八字不是。優曇華正に開く、躾著して香氣無し。麟笑す釣魚船上の客、南山を愛せず鼈鼻を愛す」とある。不二が云ふのに、コレは蓋し圖悟が雪竇の語を引いたのを、後人が「愛」の字を删つて、「蛇」の字を加へたのぢやらう、甚だ謂の無いことぢやと。一字でも誤りがある時は、遂に古人の語脈は通ぜぬことゝなる。愼む可きことぢや。「却つて雲門に到つて、拄杖を以つて雪峯の面前に擯向して、怕るゝ勢を作す。雲門、蛇を弄するの手脚有つて、鋒鋩を犯さず。明頭も也た打着、暗頭も也た打着。他、尋常人の爲めにすること、太阿の劍を舞す如くに相ひ似たり」と、雲門の遣り方、甚だ面白い。拄杖を投げ付けた處、打つ段には穴藏の底までも打つぢや。今時ぢや那邊ぢや、明ぢや暗ぢやと、ソンナ取りさばきではいかぬぞ。「有る時は、飛んで人の眉毛眼睫の上に向ひ」と、コノ雲門と云ふ男は、少しも隙間がない。ソレのみならず、少しも瑕を付けぬ。「有る時は、飛んで三千里外に向つて、人の頭を取る」と、雲門の作畧は、マルデ劍術者のやうに自由自在ぢや。サー玆の處を識得すれば目前分明ぢや。若し識不得ならばサ、三千里外に向つて、ツカもない人の首を打ち落すぞ。「雲門、拄杖を擯つて怕るゝ勢を作す、他、也た是れ喪身失命すること莫し麼」と、サー雲門、怪我はせなんだか、頭から呑まれはせなんだか。雪竇、特に雲門を賞翫する最も道理があるぢや。「作家の宗師、終に一言一句の上に去つて活計を作さず。雪竇、只だ雲門の、雪峯の意に契證得することを愛するが爲めに、所以に頻出す」と、コヽで一言出なく

て、ドコでするぞ。雪竇が、雪峰と雲門とが、ピッタリ合つた處を愛して頌出した。

象骨巖高人不到　○千箇萬箇摸索不着○非公境界　**到者須是弄蛇手**　○是精識精○是賊識賊○成群作隊作什麼○也須是同火始得　**稜師備師不奈何**　○一狀領過○放過一着　**喪身失命有多少**　○罪不重科○帶累平人　**韶陽知**　○猶較些子○這老漢只具一隻眼○老漢不免作伎倆　**重撥草**　○落草漢有什麼用處○果然在什麼處○便打　**南北東西無處討**　○有麼有麼○闍黎眼瞎　**忽然突出拄杖頭**　○看高着眼○便打　**拋對雪峯大張口**　○自作自受○呑却千箇萬箇濟什麼事○天下人摸索不着　**大張口兮同閃電**　○兩重公案○果然賴有未後句　**剔起眉毛還不見**　○蹉過了也○五湖四海覓恁麼人也難得○如今在什麼處　**如今藏在乳峯前**　○向什麼處去也○大小雪竇也作這去就○山僧今日也遇一口　**來者一一看方便**　○瞎○莫向脚跟下看○看取上座脚跟下○着一箭了也　**師高聲喝云看脚下**　○賊過後張弓○第二頭第三頭○重言不當吃

【和訓】象骨巖高うして人到らず。（○千箇萬箇、摸索不着。○公の境界に非らず。）到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべし。（○是れ精、精を識る。○是れ賊、賊を識る。○群を成し隊を作して什麼か作さん。○也た須らく是れ同火にして始めて得べし。）稜師備師奈何ともせず。（○一狀に領過す。○一着を放過す。）喪身失命多少か有る。（○罪、重科にあらず。○平人を累す。）韶陽知つて。（○猶較些子に較れり。○這の老漢只だ一隻眼を具す。○老漢免れず伎倆を作すことを。）重ねて草を撥ふ。（○落草の漢、什麼の用處か有らん。○果然として什麼の處にかある。○便ち打たん。）北東西討ぬるに處無し。（○有り麼有り麼。○闍黎、眼瞎す。）忽然として突出す拄杖頭。（○看よ、高く眼を着けよ。○便ち打たん。）雪峯に拋對して大いに口を張る。（○自作自受。○千箇萬箇を呑却すとも、什麼の事をか濟さん。○天下の人摸索不着。）大いに口を張る閃電に同じ。（○兩重の公案。○果然、賴に未後の句有り。）眉毛を剔起すれば還つて見えず。（○蹉過了也。○五湖四海恁麼の人を覓むるに也た得難し。○如今什麼の處にか在る。）如今藏して乳峯の前に在り。（○什麼の處に向つてか去る。○大小の雪竇、也た這の去就を作す。○山僧今日也た一口に遭ふ。）來る者は一一方便を看よ。（○瞎。○脚跟下に向つて看ること莫れ。○上座が脚跟下を看取せよ。○一箭を着け了れり。）師高聲に喝して云く、脚下を看よ。（○賊過ぎて後ち弓を張る。○第二頭第三頭。○重言、吃に當らず。）

【提唱】

コレから雪竇の頌ぢや。

「象骨巖高うして人到らず」と、コリヤ雪峰の家風ぢや。孤危嶮峻にして寄り付かれぬ、假令佛祖

でも寄り付くことはならぬぞ。參學に骨筋を拔いたからサ。「象骨」は前にも云ふた通り雪峰山の別名ぢや。雪峰の年譜に、「師歳四十八、石室に宴坐す。其の諸、其の出世を勸むる者有るも、師深く之れを拒む。同學に行實師伯と云ふ有り。謂く、師、道德隆重にして、鷲嶺、猴江の勝に非らず、以つて之れを述ぶるに足らず。議して象骨崖を以つて稱と爲す。師、之れを領す」とある。師が五十四歳の時、應天雪峰寺と勅賜されたと云ふ。

「到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべし」と、鼈鼻蛇は殊に人を喰ふ毒蛇ぢやから、蛇を使ふ腕がないと、寄り付かれぬ。三人とも蛇遣ひの名人共ぢやが、中でもサ、雲門のやうに、蛇を手捉へにするでなければいかぬ。ぢやからコノ句は雲門を目當に作つたぢや。ソロ〳〵雲門を引出し掛つた。

「稜師備師奈何ともせず」と、長慶も玄沙も、蛇のシンマイがならぬ、手に餘りはせぬかサ。コヽが容易でないぞ、釋迦でも彌勒でも手に負へぬ。祖父さんの雲門のみぢやと雪竇がホザいた。

「喪身失命多少か有る」と、長慶や玄沙でさへぢやに、ソノ外の人々は皆な蛇に嚙まれて居るぢやないか。ナンとも仕樣があるまい。

「韶陽知つて」と、雲門の奴が拄杖を擲つたのはサ、蛇の出處を知つて居るからぢや。

「重ねて草を撥ふ」と、草を撥ふて毒蛇を尋ねて、蛇は居らぬか、サー出よ〳〵。

「南北東西討ぬるに處無し」と、尋ぬれば尋ぬる程見えぬ。サー堅に求め、横に求めても無いぞ。ナンとして無いか。元來是れ別物ぢやない。「大屋の鑵子も空鑵子、隱居の鑵子も空鑵子。合せてヤカラ空鑵子」ぢや。コノ空の處が見事ぢや。

「忽然として突出す拄杖頭」と、尋ねても見えぬ處へ、忽然とサ、拄杖頭の大蛇が飛んで出た。コリャ如何ぢや。拄杖が蛇か、蛇が拄杖か、蛇を遣ふにや、カウ遣はなくちやならぬ。

「雪峯に拋對して大いに口を張る」と、雪峯の蛇も口を張つたがサ、雲門の蛇も大いに口を張つて、雪峯を一ト呑にせんとした。雪峯ばかりか、三世の諸佛も一ト呑ぢや。雪峯もサ、雲門にコンナ恐しい手段があらうとは思はんぢやつたらう。

「大いに口を張る閃電に同じ」と、ソノ手早いことゝ云ふたら、實に譬へやうもない。人の見分けが付かぬ位ぢや。コリャ雲門の機鋒の鋭いことを云ふたぢや。コヽは中々見損ふぞ。コノ南天棒も二十年蹉過して了つた。

「眉毛を剔起すれば還つて見えず」と、蛇が餘り眼の傍を通るから見えぬぞ。サー正眼に見來れば、コノ座敷が全體の彌陀ぢや。山も川も彌陀ぢやが、餘り近過ぎるから、「還つて見えず」ぢや。カウ蛇を出したり入れたりする處が、雪竇の蛇の遣ひやうぢや。ソンなら蛇は何處に居るかと云へば、

「如今藏して乳峯の前に在り」と、コリャ雲門の宗旨ぢや。「南山に鼈鼻蛇有り」と、ソノ蛇は雪竇

がッチャンと手に握つた、雪竇山にピチ〳〵と活きて居るぞ。コノ句はサ、南山の句、拄杖の句より超出して居る。

「來る者は一一方便を看よ」と、サー來る者は、逃るとも走るとも、蛇に喰つ付かれぬやうにするが好いぞ。雪峯は南山と云ふたが、雪竇は乳峯と云ふて、サー來て、我が蛇の遣ひやうを仔細に方便して看よ。

「師高聲に喝して云く、脚下を看よ」と、雪竇聲高に脚下を看よト。コレは〳〵恐しい、少しも鉾の穂尖を亂さぬ。併し、惜しいかな、老婆が過ぎる。雪竇め、堪へ兼ねて秘密を漏した。

頌 コレから圜悟の着語ぢや。

「象骨巖高人不到」――「千箇萬箇、摸索不着」、コノ「南山に一條の儘鼻蛇有り。汝等諸人切に須らく看るべし」と云ふたは、千萬人ともに摸り當てぬ。「公の境界に非らず」、雪竇、お手前獨り到つたやうに云ひやるが、お手前とても到ることはなるまいと、雪竇を抑下したぢや。

「到者須是弄蛇手」――「是れ精、精を識る」、怪物は怪物が知る。雪峯下の怪物ぢやから、雪竇も諸大老の蛇遣ひを能く知つて居る。「是れ賊、賊を識る」、なる程〳〵ソレに違ひない。「群を成し隊を作して什麼か作さん」、蛇遣ひは一人あれば好いのに、大勢集つてからに、アヽのカウのとトウ〳〵山へ舟を乗せ上げる。「也た須らく同火にして始めて得べし」、コヽに到るにはサ、象骨山で喰ひ合つた仲間同士ぢやないと知れぬぞ。

「稜師備師不奈何」――「一狀に領過す」、長慶も玄沙も、又た「奈何ともせず」と云ふ雪竇も、皆な同罪ぢや。「一着を放過す」、雪竇、「奈何ともせず」と云ふ大切な妙處を云ふて了うた。ソレを云ふでなかつた。

「喪身失命有多少」――「罪、重科せず」、長慶が、「今日堂中大いに人有つて喪身失命す」と、一度裁斷したら好いのに、又た「喪身失命」なぞと云ふは、いやが上に重ねて年貢を取られるやうなものぢや。「平人を帶累す」、雪峯、堂上人の長慶、玄沙のみならず、イロイもせぬ者まで喰ひ殺して、無事な人に世話をかける。厄介なわけぢや。

「韶陽知」――「猶ほ些子に較れり」、雲門も少しは取り處がある。「這の老漢只だ一隻眼を具す」、サハさりながら、一隻眼しか開かぬぢや。「老漢免れず伎倆を作すことを」、雲門、拄杖を取つたり抛げたり、コリャいらぬ伎倆と云ふものぢや。

「重撥草」――「落草の漢、什麼の用處か有らん」、雲門の奴、草を撥ふたりするのは、ナンノ眞似ぢや。「果然として什麼の處にか在る」、サー如何ぢや。蛇は上の町へ行つたか、下の町へ行つたかサ、宗旨の上を活きて働くがドコに居るぞ。「便ち打たん」、撥ふても撥はいでも、サー打つぞ。

「南北東西無處討」――「有り麼有り麼」、有るか〳〵と尋ねるがサ、全體尋ぬべきものがあるか

サ。「闇黎、眼瞎す」、雪竇、眼が潰れたか、ソレ眼の前に、ソレとあるのが見えぬかサ、ソラ上下四維皆な是れ彌陀ぢやがサ、見えぬと云ふは仕方のないものぢや。

「忽然突出拄杖頭」――「看よ、高く眼を着けよ」、「便ち打たん」、エー能く見違へぬやうにして、蛇を見付けたら打ち殺せ〳〵。

「拋對雪峯大張口」――「自作自受」、コノ大蛇、雲門が眞先に喫まれた。雪竇も亦た無用の蛇を弄し出してからに、結局自分が呑まれるぢや。「千箇萬箇を呑却すとも、什麼の事をか濟さん」、山を呑み川を呑み、客殿を呑み庫裡を呑む。サー呑み盡して如何ぢや。「天下の人摸索不着」、只だコノ些子、コノ蛇の働きは、天下の人も摸り當てることはなるまい。

「大張口分同閃電」――「兩重の公案」、本則さへぢやに、又候「大いに口を張る」とはヒチクドイ。「果然、賴に末後の句有り」、「脚下を看よ」と云ふ末後の句があるぢや。サー各々眼を付けて看よ。

「剔起眉毛還不見」――「蹉過了也」、眉毛を剔起する已前、已に蹉過ぢや。「五湖四海、恁麼の人を覓むるに也た得難し」、眉毛を剔起して見やうとする人には、中々逢ひ難い。雪竇のやうな人は、五湖四海を尋ねてもないぢや。「如今什麼の處にか在る」、聞き得た人と云ふは、ドコに在るぞ。

「如今藏在乳峯前」――「什麼の處に向つてか去る」、カヽミチヨウ、尾を掉つて逃げる小蛇共は皆な身を藏した。「大小の雪竇、也た這の去就を作す」、雪竇も亦た尾に付いて廻つた。「山僧今日也た一口に遣ふ」、圜悟、我れもコノ蛇に一口に喰はれたわいと、コリヤ圜悟の肝ッ膽ぢや。

「來者一一看方便」――「瞎」、頑是なしめ、見損ふなよ。「脚跟下に向つて看ること莫れ」、雪竇の脚下に付いてばかり看るな。雪竇の口車に乘るな。「上座が脚跟下を看取せよ」、雪竇よ、人の事はいらざる世話の燒き立ぢや。ソレより手前を看よ。「一箭を着け了れり」、サー雪竇の方便の一箭、膽に當りつちん。

「師高聲喝云看脚下」――「賊過ぎて後ち弓を張る」、蛇はトックに走つた。雪峯、長慶、玄沙、雲門、各々活手段あつて妙を盡して了つたのに、又候雪竇が斯う云ふたは、賊過ぎて後の弓ぢや。「第二頭第三頭」、初めには嶮峻に出たが、「方便〻看よ」ぢやの、「脚下を看よ」ぢやのと云ふは、第二頭第三頭ぢや、叮嚀すぎる。「重言、吃に當らず」、實に口數の多いお喋舌めト。併し、圜悟、ヒチクドイとは怪しいぞ。ナゼ怪しいかサ、手前で看よ〳〵。

象骨巖高人不到、到者須是弄蛇手。雪峯山下有象骨巖。雪峯機鋒高峻罕有人到。「他處雪竇」是他屋裏人。毛羽相似同聲相應同氣相求也須是通方作者共相證明。只這籠鼻蛇也不妨難弄。須是解弄。始得若不解弄。被蛇傷。五祖先師道。此籠鼻蛇須是有不傷犯手脚。底機於他

七寸上一揑揑住便與老僧把手共行長慶玄沙有這般手脚雪竇道稜師備師不奈何人多道長慶玄沙不奈何所以雪竇獨美雲門且得沒交渉殊不知三人中機無得失只是有親疎且問諸人什麼處是稜師備師不奈何處喪身失命有多少此頌長慶道今日堂中大有人喪身失命到這裏須是有弄蛇手子細始得雪竇出他雲門所以一時撥却獨存雲門一箇道韶陽知重撥草蓋爲雲門知他雪峯道南山有一條鑑鼻蛇落處所以重撥草雪竇頌到這裏更有妙處云南北東西無討處忽然突出拄杖頭元來只在這裏爾不可便向拄杖頭上作活計去也雲門以拄杖擲向雪峯面前作怕勢雲門便以拄杖作鑑鼻蛇用有時却云拄杖子化爲龍吞却乾坤了也山河大地甚處得來只是一條拄杖子有時作龍有時作蛇爲什麼如此到這裏方知古人道心隨萬境轉轉處實能幽頌道抛對雪峯大張口大張口兮同閃電雪竇有餘才拈出雲門毒蛇云只這大張口兮同於閃電相似爾若擬議則喪身失命剔起眉毛還不見向什麼處去也雪竇頌了須去活處爲人將雪峯蛇自拈自弄不妨殺活臨時要見麼云如今藏在乳峯前乳峯乃雪竇山名也雪竇有頌云石牕四顧滄溟窄寥寥不許白雲白長慶玄沙雲門雖弄得了不見却云如今藏在乳峯前來者一一看方便雪竇猶渉廉纖在不言便用却高聲喝云看脚下從上來有多少人拈弄且道還曾傷着人不曾傷着人師便打

【和調】象骨巌高うして人到らず、到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべしと。雪峯山下に象骨巌有り。雪峯の機鋒高峻にして、人の他の處に到ること有ること罕れなり。雪竇は是れ他の屋裏の人、毛羽相ひ似て、同聲相ひ應じ、同氣相ひ求む。也た須らく是れ通方の作者にして、共に相ひ證明すべし。只だ這の鑑鼻蛇、也た妨げず弄し難きことを。須らく是れ弄することを解して始めて得べし。若し弄することを解せずんば、蛇に傷けられん。五祖先師道く、此の鑑鼻蛇、須らく是れ、手脚を傷犯せざる底の機有つて、他の七寸上に於て、一揑に揑住して、便ち老僧と手を把つて共に行くべし。長慶、玄沙、這般の手脚有り。雪竇道く、稜師備師奈何ともせずと。人多く道ふ、長慶、玄沙、奈何ともせず。所以に雪竇、獨り雲門を美むと。且得沒交渉。殊に知らず、三人の中、機、得失無く、只だ是れ親疎有ることを。且らく諸人に問ふ、什麼の處か、是れ稜師備師奈何ともせざる處。喪身失命、多少か有ると。此れは長慶、今日堂中、大いに人有つて喪身失命すと道ふを頌す。這裏に到つて、須らく是れ蛇を弄するの手有つて、仔細にして始めて得べし。雪竇、他の雲門より出づ。所以に一時に撥却して、獨り雲門一箇を存す。道く、韶陽知つて、重ねて草を撥ふと。蓋し雲門、他の雪峯の、南山に一條の鑑鼻蛇有りと道ふ落處を知るが爲めに、所以に重ねて草を撥ふと云ふ。雪竇頌して這裏に到つて、更に妙處有り。云く、南北東西討ぬるに處無しと。儞道へ、什麼の處にか在る。忽然として突出す拄杖頭と。元來只だ這裏に在り。儞、便ち拄杖頭上に向つて、活計を作し去る可からず。雲門、拄杖を以て、雪峯の面前に擲向して、怕るゝ勢を作す。雲門便ち拄杖を以て鑑鼻蛇と作して用ふ。有る時は却つて云く、拄杖子化して龍と爲り、乾坤を吞却し了れり。山河大地、甚の處よりか得來ると。只だ是の一條の拄杖子、有る時は龍と作り、有る時は蛇と作る。什麼としてか此の如くなる。這裏に到つて、方に、古人の、心は萬境に隨つて轉じ、轉處實に能く幽なりと道ふを知る。頌して道く、雪峯に抛到して大いに口を張る。大いに口を張る閃電に同じと。雪竇、餘才有り。雲門の毒蛇を拈出して云ふ、只だ這の大いに口を張る、閃電に同じく相ひ似たり。儞若し擬議せば、喪身失命せん。眉毛を剔起すれば還つて見えずと。什麼の處に向つてか去れる。雪竇、頌し了つて、須らく活處に去つて人の爲めにす。雪峯の蛇を將つて、自ら拈じ自ら弄す。妨げず、殺活時に臨むことを。見んと要す麼。云く、如今藏して乳峯の前に在りと。乳峯は乃ち雪竇山の名なり。雪竇、頌有り、云く、石牕四に顧れば滄溟窄し、寥寥として許さず白雲の白きとをと。長慶、玄沙、雲門、弄し得と雖も、了に見えず。如今藏して乳峯の前に在り、來る者は一一方便を看よと。雪竇、猶ほ廉纖に渉ること在り。便ち用ひよと言はずして、却つて

高聲に、喝して云く、脚下を看よと。從上來、多少の人有つてか拈弄する。且らく道へ、還つて曾つて人を傷着するか、曾つて人を傷着せざるか。師、便ち打つ。

【提唱】　コレから圜悟の評ぢや、「象骨巌高うして人到らず、到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべしと。雪峯山下に象骨巌有り。雪峯の機鋒高峻にして、人の他の處に到ると有ると罕れなり」と、雪峯の機鋒が鋭いので、ソノ寝處まで踏み込む者はないぢや。コノ機鋒は佛からも貰はぬ、自己で爪牙を得ると出げるぞ。「雪竇は是れ他の屋裏の人、毛羽相ひ似て、同聲相ひ應じ、同氣相ひ求む」と、臨濟にはサ、我を折らぬが、雪竇には我を折つたぞ。雪竇は雪峯の四世の孫ぢやから毛並も、ナリフリモ能う似た。ドウセ一つ穴の狐ぢやもの。「也た須らく是れ通方の作者にして、共に相ひ證明すべし」と、難透の話を透過し〳〵さへすれば、是れ通方の作者ぢや。作者と作者と、お互に照し合ふてからに、ハツキリ證明するぞ。「只だ這の鼈鼻蛇、也た妨げず弄し難きことを。須らく是れ弄するとを解して始めて得べし」と、コノ蛇はサ、なか〳〵餘程上手な蛇遣ひでないと遣へぬテ。ドウして手の輪に乗るものでない。南天棒もサ、三十年來見損ふて居たのぢや。併し骨さへ折れば、自由自在に遣へるぞ。「若し弄することを解せずんば、蛇に傷けられん」と、サー自由自在に遣ふことがならぬと、却つて蛇のために傷められる。今も云ふ南天棒も、三十年と云ふもの、コノ蛇に苦められたぢやわい。「五祖先師道く、此の鼈鼻蛇、須らく是れ、手脚を傷犯せざる底の機有つて、他の七寸上に於て、一捏に捏住して、便ち老僧と手を把つて共に行くべし」と、手脚を傷けざる底とは、ドノやうなものぢや。斯樣な處を能く〳〵看よ。サー「七寸上」とはドコのとぢや。頭から七寸の間は蛇の急處ぢや。ソコをヒン握つて捉へると蛇の奴はグッタリして動かぬ。サウさへするならば、少しも手脚を傷けずに蛇を手捉にするとが出來るぢや。サー諸人はドウ捉へるぞ。七寸上が捉へられれば、南天棒と同行ぢや。己が負けて遣る。「長慶、玄沙、這般の手脚有り。雪竇道く、稜師備師奈何ともせずと。人多く道ふ、長慶、玄沙、奈何ともせず。所以に雪竇、獨り雲門を美むと。且得沒交渉」と、五祖の云ふた通り、長慶、玄沙には此の腕前があるが、人々は多く、雪竇が「稜師備師奈何ともせず」と云ふた語に隨つてからに、英雄の長慶、玄沙でも奈何ともすることが出來なかつたから、獨り雲門を褒めそやすと云ひクサルが。「殊に知らず、三人の中、機、得失無く、只だ是れ親疎有ることを」と、三人は同じぢや、別に優劣はない。同じ牡丹餅でも、出來鹽梅があるぢやらう。コリヤ好い評ぢや。「且らく諸人に問ふ、什麼の處か、是れ稜師備師奈何ともせざる處」と、サーそんなら道ふてみよ。ドコが、長慶、玄沙の奈何ともせぬ處ぞ。「喪身失命多少か有る」と、コヽは衲も三十年來見損ふて居つた。「此れは長慶、今日堂中、大いに人有つて喪身失命すと道ふを頭す。這裏に到つて、須らく是れ蛇を弄するの手有つて、仔細にして殆めて得べし」と、今日コノ通りガヤ〳〵

云ふて居るがサ、コノ座敷がナンと見える。皆な是れ全體の彌陀ぢやがサ如何ぢや。コヽを分明にしてこそ、始めて蛇の平頭をヒッ捉へるぞ。「雪竇、他の雲門より出づ。所以に一時に撥却して、獨り雲門一箇を存す」と、雪竇の奴は雲門から出たものぢやから、外の者を掃き除けて、雲門ばかりを云ふがサ。「道く、韶陽知つて、重ねて草を撥ふと。蓋し雲門、他の雪峰の、南山に一條の龍鼻蛇有りと道ふ落處を知るが爲めに、所以に重ねて草を撥ふと云ふ」と、雲門は蛇の居處を知つて居るからサ、草を撥ふて蛇を見せたぢや。ソリャ何故であらうぞならば、コノ道は今人捨てゝ土の如く、少しも顧みない。ぢやから、雪峯の後に重ねて草を撥ふたぢや。「雪竇頌して這裏に到つて、更に妙處有り、云く、南北東西討ぬるに處無し」と、雪竇が頌して、「南北東西討ぬるに處無しと。倆道へ、什麼の處にか在る」と、雪竇が頌して突出す拄杖頭と」、忽然として突出したから、脊戸にも海道にも一杯ぢや。天地に一杯ぢや。拄杖頭ばかりぢやないぞ。「元來只だ這裏に在り」と、カウ云ふては是法平等の見になる。ソレでは蛇は見えぬぞ。「倆、便ち拄杖頭上に向つて、活計を作し去る可からず」と、ソレならば拄杖頭には無いかナ。イヤ拄杖ばかりではないぞ、頭々上物々上、實に分明ぢや。「雪門、拄杖を以つて、雪峰の面前に擲向して、怕るゝ勢を作す」と、コノ次の「雲門便」から「轉處實能幽」までの七十三字は削る方が好いが、今老衲は前後に五字づゝ、十字を加へて讀んで置かう。即ち初めに「人多く情解して道ふ」と加へて、「雲門便ち拄杖を以つて鼈鼻蛇と作して用ふ。有る時は却つて云く、拄杖子化して龍と爲り」と、コノ「化」の字は錯つて會し去るぢや。「乾坤を呑却し了れり。山河大地、甚の處よりか得來る」と、上は三十三天、下は金輪奈落のドン底までも呑み盡すぞ。サー「乾坤を呑却」したら、山河大地はドコから得來るぞ。「只だ是の一條の拄杖子、有る時は龍と作り、有る時は蛇と作る。什麼としてか此の如くなる」と、コリャ如何してぢや。「這裏に到つて、方に、古人の、心は萬境に隨つて轉じ、轉處實に能く幽なりと道ふを知る」と、眞法界には心と說き性と說く、ソレではいかぬ。隨緣眞如（萬境）不變眞如（轉處）などと、サテ〳〵手ぬるい、實にハヤ汚ない、嚙み散した評ぢや。南天棒は好かぬ。コヽの「古人」とは摩拏羅尊者を指したものぢや。コノ下へ「且得沒交涉」の五字を入れてみるが好い。「頌して道く、雪峯に抛對して大いに口を張る。大いに口を張る閃電に同じと」、コヽは學人の疑處と云ふてサ、乾峯も失命するぞ。是れ風味に似たりぢや。「雪竇餘才有り、雲門の毒蛇を拈出して云ふ、只だ這の大いに口を張る、閃電に同じく相ひ似たり」と、雲門の奴が拄杖を擲つて怕るゝ勢をした、ソンナことがナンの閃電か。蛇は掴んで投げ出す程ある、脊戸にも海道にも一杯ぢや。「倆若し擬議せば、喪身失命せん」と、蛇を見損ふと命はないぞ。ソレなら擬議せぬが好いかナ。「眉毛を剔起すれば還つて見えずと。什麼の處に向つてか去れる」と、見やうとすりや見えないと、ソレならドコへ行つたか。「雪竇、頌し了つて、須らく活處に去つて人の爲めにす。雪峯の蛇を將つて、自ら拈し

自ら弄す。妨げず、殺活時に臨むことを。見んと要す麼。云く、如今藏して乳峯の前に在りと。乳峯は乃ち雪竇山の名なり」と、蛇は乳峯の前に藏してあると、雪竇が雪峯の蛇を出したり入れたり、おもちやにして居る。「乳峯」とは雪竇山のことぢや。「雪竇、頌有り、云く、石牕四に顧れば滄溟窄し」と、「石牕」とは雪竇山のことぢや。我が石の牕から見ると、三千世界も芥子粒程ぢや。併しコレを單に雪竇山のことゝのみ思ふと違ふぞ。コリヤ知解の皮をヒン剝くと現前するぢや。「寥寥として許さず白雲の白きことをと」、墨の黑きも許さぬ、柳の綠をも許さぬ、地獄の熱きをも許さぬぞ。「長慶、玄沙、雲門、弄し得と雖も、了に見えず。如今藏して乳峯の前に在り、來る者は一一方便を看よと」、三大老も穿鑿したが、遂に見えぬのを、雪竇は「如今藏して乳峯の前に在り、來る者は一一方便を看よ」と云ふた。コレは塗毒鼓のやうぢや。「雪竇、猶ほ廉纖に涉ると在り」と、虫眼鏡でも見えぬ處を圖悟は能く見拔いた。「便ち用ひよと言はずして」の四字は好くない。大燈國師もコレは削つた。「却つて、高聲に喝して云く、脚下を看よと。從上來、多少の人有つてか拈弄する。且らく道へ、還つて曾つて人を傷着するか、曾つて人を傷着せざるか。師、便ち打つ」と、サー氣を付けて脚下を看よ。蛇に喰ひ付かれまいぞ。コリヤ雪竇一代の腕力ぢや。コノやうな拈弄は、從上來何人がしたかサ。却つて人を傷着したか、せぬか、ドウぢや。ソコデ打つたが、何を打つたぞ、聾が鐵砲放つたか。サーこりや、傷着しても打つが、傷着せないでも打つぞ。コレが圖悟の蛇の遣ひやうぢや。

注釋 〔潙仰宗〕 潙山靈祐は百丈の法嗣。仰山慧寂は潙山の法嗣。〔法眼宗〕 法眼は地藏桂琛の法嗣。〔長沙景岑〕 南泉の法嗣。〔地藏〕 地藏桂琛禪師。玄沙師備の法嗣。眞應禪師と諡さる。〔分衛〕 托鉢のこと。〔稜兄〕 長慶のこと。慧稜と云ふより出づ。〔泉大道〕 支那の仙人。〔玄沙は魚釣の子〕 玄沙師備は漁師の子にして、幼より好んで釣を垂ると云ふ。〔テッピラ〕 打ち付けにと云ふこと。〔平展〕 平穩展開の意。放行の手段を云ふ。打破の對。〔瞳眼〕 瞳は喰ふなり。眼は眠を以つて食とする故に瞳眼と云ふ。「增一阿含經」に曰く、「世尊阿那律に告げて曰く、一切諸法は、食に依つて存す。眼は眠を以つて食とし、耳は聞を以つて食と爲す云々」と。〔點胸〕 自ら胸中を點檢すると。〔雲巖〕 雲巖曇晟禪師。藥山惟儼の法嗣。無住大師と諡さる。〔實頭〕眞面目、著實のこと。〔香衣〕 法衣を云ふ。〔刹利〕 地獄のこと。〔須陀〕 天堂のこと。〔大雄山〕 百丈山を云ふ。〔紫胡〕 紫胡岩の利縱禪師。南泉の法嗣。〔石頭〕 石頭希遷禪師。青原行思の法嗣。無際大師と諡さる。〔許クツ〕 つまらない評と云ふこと。〔スルドはない〕 鋭くはない。〔尻ホタ〕 尾の先を云ふ。〔不二〕 東福寺の不二岐陽和尙。〔ツカもない人〕 取り柄のない人を云ふ。〔シンマイ〕 始末すること。〔同火〕 江南の軍法に、五人を伍と曰ふ、伍に一鍋を帶びて、同じく飯を煮る、故に之れを同火と云ふ。〔イロイもせぬ者〕 弄せもせぬ者。〔自作自受〕 方語に云ふ、匠人枷を造ると。〔摩拏羅尊者〕 西天第二十二祖。〔乾峯〕 越州の乾峯和尙。洞山良价の法嗣。

第二十三則　保福妙峯頂　【保福妙峯頂】

垂示云、玉將火試、金將石試、劍將毛試、水將杖試、至於衲僧門下、一言一句一機一境一出一入一挨一拶、要見深淺、要見向背、且道、將什麼試、請舉看。

【和訓】垂示に云く、玉は火を將つて試み、金は石を將つて試み、劍は毛を將つて試み、水は杖を將つて試む。衲僧門下に至っては、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶、深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す。且らく道へ、什麼を將ってか試みん。請ふ擧す、看よ。

【提唱】コレは、第二十三則、「保福妙峯頂」ぢや。コノ則は、保福、長慶、鏡清の三人が、些旨を商略してからに、我が宗五家、別に生涯在るの大事を立することを明すのぢや。

「垂示に云く、玉は火を將つて試み、金は石を將つて試み、劍は毛を將つて試み、水は杖を將つて試む」と、コリャ喩ぢや、「淮南子」と云ふ書物にある。玉は火に入れて、三日三夜置いても色の變らぬのが眞の美玉ぢや。金は黑い圓い石で磨いてみると、ソノ好惡が知れる。劍は毛を吹き掛けて、ツンと切れるのが卽ち名劍ぢや。又た水は杖を以つてすれば、深いか淺いかゞ知れる。「衲僧門下に至っては、一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶、深淺を見んことを要し」と、併しぢや、衲僧を試むるには、問答（一言一句）、棒喝（一機一境）、進退（一出一入）、挨拶（一挨一拶）を以つてからに、學者の深淺を試むるぢや。「一出一入」の一出は放行ぢや顯ぢや、一入は把住ぢや隱ぢや。又た「一挨一拶」の一挨は輕く觸れるを云ひ、一拶は强く觸れるを云ふ。「向背を見んことを要す」と、今時那邊の畔が切れて、空諦三昧を得ねば向背なしとは云はれぬぞ。「且らく道へ、什麼を將ってか試みん。請ふ擧す、看よ」と、サー諸人は何を以つて試みやうとするぞ。請ふ本則を見よ。

擧保福長慶遊山次。這兩箇落草漢。福以手指云、只這裏便是妙峯頂。○平地上起骨堆。○切忌道着。○掘地深埋。慶云、是則是可惜許。○若不是鐵眼銅睛、幾被惑了。○同病相憐。○兩兩一坑埋却。雪竇着語云、今日共這漢遊山圖箇什麼。○不妨減人斤兩。○猶較些子。○傍人按劍。復云、百千年後不道無只是少。○少賣弄。○也是雲居羅漢。後擧似鏡清。○有好有惡。清云、若不是孫公便見髑髏遍野。○同道者方知。○大地茫茫愁殺人。○奴見婢愍懃。○設使臨濟德山出來也須喫棒。

【和訓】舉す。保福、長慶、遊山する次。（○這の兩箇、落草の漢。）瞞、手を以て指して云く、只だ這裏便ち是れ妙峯頂。（○平地上に骨堆を起す。○切に忌む道着することを。○地を掘つて深く埋めん。）慶云く、是は則ち是、可惜許。（○若し是れ鐵眼銅睛にあらずんば、幾んど惑了せられん。○同病相ひ憐れむ。○兩兩一坑に埋却せん。）雪竇頌して云く、今日這の漢と共に遊山して箇の什麼をか圖る。（○妨げず人の斤兩を減ずることを。○猶ほ些子に較れり。○傍人劍を按ず。）復た云く、百千年後無しとは道はず、只だ是れ少し。（○少賣弄。○也た是れ雲居の羅漢。）後に鏡清に擧似す。（○好有り惡有り。）清云く、若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏、野に遍きことを見ん。（○同道の者方に知る。○大地茫茫として人を愁殺す。○奴は婢を見て慇懃。○設使ひ臨濟、德山出で來るも、也た須らく棒を喫すべし。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「擧す。保福、長慶、遊山する次」と、古人は皆な斯うぢや、遊山する間も放過はせぬぞ。コノ則は容易でない、錯つて會する者が多い。心行所滅の地、一味平等の法門、不變眞如の直只中を云ふたものぢや。一顆の明珠と見錯るぞ。コノ南天棒も、四十二歳に至るまで錯つて會した。容易の看を作すな。

「福、手を以つて指して云く、只だ這裏便ち是れ妙峯頂」と、實にハヤ雪山をオッ開いたぢや。コノ「妙峯頂」とはサ、コノ客殿が取りも直さず妙峯頂ぢや。サー如何ぢや、會るか。コノ句は滿桶の毒水を頭から浴せかけたぢや。華嚴ぢやの、德雲ぢやのと、ソンナことは云はず、「這裏便ち是れ妙峯頂」と、サー如何ぢや。

「慶云く、是は則ち是、可惜許」と、是れ金は石を將つて試むる底ぢや。慶がカウ出て來たのを、多くは錯つて、妙峯頂と名付くるも、早や是れ汚却と云ふことぢやと會するが、笑ふ可きことぢや。

「可惜許」とは、併しマア膽の潰れたものぢや。

「雪竇着語して云く、今日這の漢と共に遊山して、箇の什麼をか圖る」と、コリヤ雪竇が、二人の肝ッ膽を見盡して言ふたぢや。又怪しいものが出て來たぞ。アヽお歴々、どうしたぢや、何をサラスのかと。雪峯、雲門も膽消て躍るわ。保福、長慶の高調子の中へ、猶々ケチなことを云ふた。

「復た云く、百千年後無しとは道はず、只だ是れ少し」と、ハヤ碧巌はコレで活き返つて來た。コレからサ、百千年後保福のやうな者がないとは道はぬが、全く稀れであらうぞと。コリヤ讃歎したのぢや。

「後に鏡清に擧似す」と、或僧がコノ則を、同じく雪峯下の鏡清に擧似した。アブナイものぢや。

「清云く、若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏、野に遍きことを見ん」と、「若し是れ孫公にあらずんば」とは、天に倚る長劍ぢや。「孫公」と云ふたのは長慶のことぢや、俗姓が孫氏ぢやからぢや。保福が「這裏便ち是れ妙峯頂」とサグリを入れたのを、流石は長慶ぢや、「可惜許」と。長慶でなければ、中々斯うは行かぬ。若し長慶でないならば、「髑髏、野に遍きを見ん」で、一味平等の死水

に沈んで、死人で野は一杯ぢやらう。ナゼなればサ、保福の「這裏便ち是れ妙峯頂」は、教理の上から問ふたのぢや。コリヤ死語ぢや。死漢に參せば、皆な是れ死漢であらうぞ。然るをサ、長慶は死語に落ちず、「可惜許」と活弄した。何れも作家の出合ぢや。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「舉保福長慶遊山次」――「這の兩箇、落草の漢」、エー遊山ぢやのと、コノよろけ者め。

「保以手指云只這裏便是妙峯頂」――「平地上に骨堆を起す」、厭なものぢや。毒に中つて死ぬ人が多かるべい。長慶は能く毒に中らぬ、ァ、驚き入つたものぢや。「這裏便ち是れ妙峯頂」と云ふた處を見損ふと、コレは見えぬぞ。サー斯うより外、講釋はならぬ。「切に忌む道着することを」、毒氣ぢやから、話しにもイヤぢや。「地を掘つて深く埋めん」、妙峯頂なぞがあると思へばィマ〳〵しい、地の中へ埋めて了へ。

「慶云是則是可惜許」――「若し是れ鐵眼銅睛にあらずんば、幾んど惑了せられん」、正眼を具するものでないと、保福に惑はされるぢや。日本が大半は誑されう。「同病相ひ憐れむ」、好い遊山連中ぢや程に、互に助け合ふて居る。「兩箇一坑に埋却せん」、ナンぢやい、「妙峯頂」の、「可惜許」の、と、エー此の厄介者め等、活埋にして呉れう。

「雪竇着語云今日共這漢遊山圜箇什麼」――「妨げず人の斤兩を減ずることを」、雪竇、餘所から見て評價せまいぞ。人の威光を減ずるぢや。「猶ほ些子に較れり」、充分ぢやないが、少しは眼が見える樣ぢや。「傍人劍を接ず」、保福や長慶の好箇の明珠を見てからに、見損ふまいぞと、雪竇、劍を握つて用心した。ソラ圜悟も助太刀せうとて劍へ手を掛けた。

「復云百千年後不道無只是少」――「少賣弄」、百千年後まで雪竇獨りとか。附木でも賣り廻る氣か、ソンナに押賣りしても買ひ手はあるまい。「也た是れ雲居の羅漢」、コレも雪竇の自點胸ぢや。併しコレを自慢とばかり見ては、雪竇は見えぬぞ。

「後舉似鏡清」――「好有り惡あり」、鏡清に判斷させうと思ふて、斯う擧似したのはサ、好いかの、惡いかの。

「清云若不是孫公便見髑髏遍野」――「同道の者方に知る」、皆な是れ同門下の盜坊ぢや。盜坊仲間は能く知つて居る。「大地茫茫として人を愁殺す」、圜悟から見れば、氣の毒なことには、大地茫々ぢや。知音がなく、泣き手がないから嬉しくないト。コレは好い消息ぢや。「奴は婢を見て慇懃」下働き同士は、お互に意が通し易い。ぢやから鏡清は、長慶なりやこそと、慇懃にあいしらつたぢや。「設使ひ臨濟、德山出て來るも、也た須らく棒を喫すべし」、例へ臨濟でも德山でもサ、コノ三人の出合に逢ふては、キョロ〳〵すべい。コレは佛祖を立たせぬ處ぢやから、斯う云ふたと思ふと取り違ふぞ。

保福長慶鏡清總承嗣雪峰他三人同得同證同見同聞同拈同用一出一入遞相挨拶蓋爲他是同條生底人舉着便知落處在雪峯會裏居常問答只是他三人古人行住坐臥以此道爲念所以舉着便知落處一日遊山次保福以手指云只這裏便是妙峰頂如今禪和子恁麼問着便只口似匾擔賴值問着長慶爾道保福恁麼道圖箇什麼古人如此要驗他有眼無眼是他家裏人自然知他落處便對他道是卽是可惜許且道長慶恁麼道意旨如何不可一向恁麼去也似則似罕有等閑無一星事賴是長慶識破他雪竇着語云今日共這漢遊山圖箇什麼且道落在什麼處復云百千年後不道無只是少雪竇解點胸正似黃檗道不道無禪只是無師雪竇恁麼道也不妨險峻若不是同聲相應爭得如此孤危奇怪此謂之着語落在兩邊雖落在兩邊却不住兩邊後舉似鏡清清云若不是孫公便見髑髏遍野孫公乃長慶俗姓也不見僧問趙州如何是妙峯頂州云老僧不答爾這話僧云爲什麼不答這話州云我若答爾恐落在平地上教中說妙峯孤頂德雲比丘從來不下山善財去參七日不逢一日却在別峯相見及乎見了却與他說一念三世一切諸佛智慧光明普見法門德雲既不下山因什麼却在別峯相見若道他下山教中道德雲比丘從來不曾下山常在妙峰孤頂到這裏德雲與善財的的在那裏自後李長者打葛藤打得好道妙峰孤頂是一味平等法門一一皆眞一一皆全向無得無失無是無非處獨露所以善財不見到稱性處如眼不自見耳不自聞指不自觸如刀不自割火不自燒水不自洗到這裏教中大有老婆相爲處所以放一線道於第二義門立賓立主立機境立問答所以道諸佛不出世亦無有涅槃方便度衆生故現如斯事且道畢竟作麼生免得鏡清雪竇恁麼道去當時不能拍拍相應所以盡大地人髑髏遍野鏡清恁麼證將來那兩箇恁麼用將來雪竇後面頌出更顯煥頌云

【和訓】 保福、長慶、鏡清、總て雪峯に承嗣す。他の三人、同得同證、同見同聞、同拈同用、一出一入、遞ひに相ひ挨拶す。蓋し他は是れ同條に生ずる底の人なるが爲めに、舉着すれば便ち落處を知る。雪峯の會裏に在つて、居常問答するは、只だ是れ他の三人なり。古人、行住坐臥、此の道を以て念と爲す。所以に舉着すれは便ち落處を知る。一日遊山する次、保福、手を以て指して云く、只だ這裏便ち是れ妙峯頂と。如今の禪和子、恁麼に問着すれば、便ち只だ、口、匾擔に似たり。賴に長慶に問着するに値ふ。爾道へ、保福恁麼に道ふ、箇の什麼をか圖る。古人此の如く、他の有眼無眼を驗せんと要す。是れ他の家裏の人、自然に他の落處を知つて、便ち他に對して道ふ、是は卽ち是、可惜許と。且らく道へ、長慶恁麼に道ふ意旨如何。一向に恁麼に去る可からず。似たることは卽ち似たり。等閑に一星事無きこと有ること罕れなり。賴に是れ長慶、他を識破す。雪竇着語して云く、今日這の漢と共に遊山して髑髏の什麼をか圖ると。且らく道へ、什麼の處にか落在する。復た云く、百千年後無しとは道はず、只だ是れ少しと。雪竇、點を解す。正に黃檗の、禪無しとは道はず、只だ是れ師無しと道ふに似たり。雪竇恁麼に道ふ、也た妨げず險峻なることを。若し是れ同聲相ひ應ずるにあらずんば、爭でか此の如く孤危奇怪なることを得ん。此れ之れを着語と謂ふ。兩邊に落在す。兩邊に落在すと雖も、却つて兩邊に住せず。後に鏡清に舉似す。清云く、若し是れ孫公にあらずんば、便ち髑髏の俗姓なり。見ずや、僧趙州に問ふ、如何なるか是れ妙峯頂。州云く、老僧、爾に這の話を答へず。僧云く、什麼と爲てか這の話を答へざる。州云く、我れ若し爾に答へば、恐らくは平地上に落在せんと。教中に說く、妙峯孤頂の德雲比丘、從來山を下らず。善財去つて參す、七日までに逢

はず。一日却つて別峯に在つて相見す。見え了るに及んで、却つて他の與めに、一念三世、一切諸佛、智慧光明、普見の法門を說く。德雲既に山を下らず、什麼に因つてか却つて別峯に在つて相見す。若し他、山を下ると道はゞ、敎中に道ふ、德雲比丘、從來曾つて山を下らず、常に妙峯孤頂に在りと。這裏に到つて、德雲と善財と、的的那裏にか在る。自の後、李長者、葛藤を打す。打得して好し。道く、妙峯孤頂は是れ一味平等の法門、一一皆な眞、一一皆な全。無得無失、無是無非の處に向つて獨露す。所以に義財見えずと。稱性の處に到つて、眼、自ら見えず、耳、自ら聞えず、指、自ら觸れざるが如く、刀、自ら割かず、火、自ら燒かず、水、自ら洗はざるが如しと。這裏に到つて、敎中大いに老婆相ひ爲めにする處有り。所以に一線道を放つて、第二義門に於て、賓を立し主を立し、機境を立し問答を立す。所以に道ふ、諸佛出世せず、亦た涅槃有ること無し。方便して衆生を度す。故に斯の如きの事を現ずと。且らく道へ、畢竟して作麼生か、鏡淸、雪竇、恁麼に道ふことを免れ得去らん。當時拍拍相ひ應ずること能はずんば、盡大地の人、彷徨、野に遍き所以ならん。鏡淸恁麼に證し持ち來れり、那兩箇恁麼に用ひ將ち來る。雪竇後面に頌出して、更に顯煥たり。頌に云く。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢや。「保福、長慶、鏡淸、總て雪峯に承嗣す。他の三人、同得同證、同見同聞、同拈同用、一出一入、遞ひに相ひ挨拶す」と、コノ三人の奴等が、寢たり起きたり、くんづほぐれつしてケッカル。「蓋し他は是れ同條に生ずる底の人なるが爲めに、擧着すれば便ち落處を知る」と、一つ同胞ぢやから、チラッとすれば、直に落處を知るぞ。「雪峯の會裏に在つて、居常問答するは、只だ是れ他の三人なり。古人、行住坐臥、此の道を以つて念と爲す。所以に擧着すれば便ち落處を知る」と、雪峯の會下で、毎日問答商量して、骨折つたのはコノ三人ぢやから、チョイと云ひ出しても、直に落處を知るぢや。「一日遊山する次、保福、手を以つて指して云く、只だ這裏便ち是れ妙峯頂と、如今の禪和子、恁麼に問着すれば、便ち只だ、口、匾擔に似たり」、サレ〳〵見損つた、三十年ぢや。今の禪者共ぢや、ナンとも云ふことは出來まい。「賴に長慶に問着するに値ふ。儞道へ保福恁麼に道ふ、箇の什麼をか圖る」と、保福が長慶に問ふたから好かつたのぢや。「這裏便ち是れ妙峯頂」とサ、保福は長慶を井戸の中に突き落す積りぢやつたらう。「古人此の如く、他の有眼無眼を驗せんと要す」と、古人は一挨一拶にもサ、人の深淺を見んとを要したぢや。「是れ他の家裏の人」と、雪峯に居らんでも、骨折れば直に「他の家裏の人」ぢや。「自然に他の落處を知つて、便ち他に對して道ふ、是は則ち是、可惜許」と、コノ語が含んで持つやうでなけらにや衲僧ではない。「且らく道へ、長慶、恁麼に道ふ意旨如何。一向に恁麼にし去る可からず」と、上の「可惜許」の句はサ、下根に恐しいことがあるぞ。外面一通りではない。圜悟の工夫も有る、各々言句を逐ふまいぞ。「似たることは則ち似たり、等閑に一星事無きこと有ること罕れなり。賴に是れ長慶、他を識破す」と、長慶の眼に似た者はあるまい。長慶の樣に、知見解會が一星事程もないと云ふぢや。又た汝等一向、長慶の眼の明かなるに似たとは星程もあるまいとも。又た、本分の上には、何んの言句もないとて、一向に恁麼に去るとも。又た、是は則ち是なれどもサ、又たサウしたものでもないとも云ふぢや、「雪竇着語して云く、今日這の漢と共に遊山して、箇の什麼をか圖ると。且らく道へ、什麼の處にか落在する」と、ナニか珍らしいことでも云ふかと思ひの外、ラッチもないことぢや。「復た云く、百

千年後無しとは道はず、只だ是れ少しと」、保福、長慶のやうな人は無いなぞと見ると、ソレこそ尻に眼藥ぞ。「雪竇、點胸を解す。正に黄檗の、禪無しとは道はず、只だ是れ師無しと道ふに似たり」と、コノ十八字は好くない、削る方がよい。但し蓋覆却か。黄檗の斯く云ふたも、點胸と見ては、黄檗も頭痛鉢拳ぢや。サー似たと云ふて、ドコが似たか、心元ない。「雪竇恁麼に道ふ、也た妨げず險峻なることを」と、さらサ〳〵、危ないぞ。併しコリャ、保福、長慶を罵つたのか、褒めたのか。人々眼を着けて看よ。碧巌中の大事ぢや。「若し是れ同聲相ひ應ずるにあらずんば、爭でか此の如く孤危奇怪なることを得ん、此れ之れを着語と謂ふ」と、同じ腹から出た者でなくては斯うはいかぬ。「兩邊に落在す。兩邊に落在すと雖も、却つて兩邊に住せず」と、コノ十四字も未審しい。好箇の石火砲を、保福、長慶の兩邊と作すとは何んぞや。サー圜悟、ドコが落在した、淺間しい。「後に鏡清に擧似す。清云く、若し是れ孫公にあらずんば、便ち闘鏃、野に遍きことを見んと。孫公は乃ち長慶の俗姓なり」と、コレが若し長慶でなかつたならば、忽ち毒に當たらうぞ。「見ずや、僧、趙州に問ふ、如何なるか是れ妙峯頂」と、コリャ趙州と僧との問答ぢや。「州云く、老僧、爾に這の話を答へず」と、コリャ中々面白い。盤に和して托出す夜明珠ぢや。斯う云ふたは、答へたが是かサ。妙峯頂がナンぢや。「僧云く、什麼と爲てか這の話を答へざる」と、コノ泣キッ面奴が。ソコデ趙州は、「州云く、我れ若し爾に答へば、恐らくは平地上に落在せん」と、コノ語は最も好い。三十年後地に擲たば金聲を作さん。「教中に說く」と、コレは「華嚴經」の入法界品の說ぢや。「妙峯孤頂の德雲比丘、從來山を下らず」と、サーこの妙峯孤頂は實にハヤ、高い〳〵程に、金輪水際より三十三天まで突き拔いて居る、佛も到ることはならぬ。ソレぢやのに、ナンとして德雲比丘一人が居るぞ。妙峯頂が德雲か、德雲が直に妙峯頂か。「從來山を下らず」と云ふがサ、全體皆な山ぢやもの、下るべき山が外にあらばこそ。外に山があると思へばこそ、下るのナンのと云ふぢや。妙峯頂は一味平等の法門を表したものぢや。然るに善財は此の法門に入得せぬから、德雲に相見するの分限がないぢや。抑「妙峯孤頂」とは須彌山を云ふたものぢや。善財は南詢して何んとして此の山を過ぎた。蓋し南は離の卦に配す。離は明ぢや。即ち善財の南詢は、自己を明めんが爲めぢや。若し此の義に依らうぞならば、何んぞ必らずしも方處を以つて此の山を論ぜんや。又た「德雲比丘」とは、萬德具足して、一切の萬善萬行、此處から出づると恰も湧出づるが如くであるから、斯く名付くるぢや。「善財去つて參す。七日までに逢はず。一日却つて別峯に在つて相見す」と、七日まで逢はぬとは、小悧巧なことを云ふたものぢや。コノ七日とはサ、七識までは相見叶はず、八識に至つてペタリと行き當つたがサ、無分別識ぢやから、後得智を得て、始めて今のがサウぢやものをと知る。ぢやから「別峯」と云ふぢや。「見え了るに及んで、却つて他の興めに、一念三世、一切諸佛、智慧光明、普見の法門を說く」と、相見了に於て、一念三世の諸佛と不二同體ぢゃ

「華厳合論」にはサ、「憶念一切、諸佛の境界、智慧光明、普見の法門を説く」とある。何れもコレは教中の大意を示したものぢや。「德雲既に山を下らず、什麼に因つてか却つて別峯に在つて相見す」と、サー斯うして銘々が居るコノ座敷が直に是れ德雲比丘ぢや。ソノ時山は見えぬ。方便定を以つて根本智に合ふぢや。卽ち後得智で合點する處が別峯ぢや。「若し他、山を下ると道はゞ、教中に道ふ、德雲比丘從來曾つて山を下らず、常に妙峯孤頂に在りと。這裏に到つて、德雲と善財と、的的那裏にか在る」と、德雲は山を下らぬのに、ドウして善財と相見が出來るか。ソリャ外でもない、菩提心の起る處が善財童子となるぢや。コノ子に曳かれて善光寺參りか。サーこの「的的」の處は、人々の眼中に在るぞ。「自の後、李長者葛藤を打す。打得して好し。道く」と、コノ「李長者」と云ふは字は通玄、別に棗柏大士と號した。コノ人が前にも云ふた「華厳合論」百二十卷を作つた。已下はソノ「合論」の中に云ふてある句ぢや。「妙峯孤頂は是れ一味平等の法門」と、コレから「水不自洗」と云ふまでが、「合論」の句ぢや。「妙峯孤頂」と、コリャ自己の面目、本分の家山ぢや。コノ鹽梅は、佛も衆生も、今時も那邊も、引つくるめて只だ一佛ぢや。「一一皆な眞、一一皆な全」と、足の踵を捉へても、十界三千、萬法、皆な是れ眞ぢや。一一皆な全佛ぢや。「無得無失、無是無非の處に向つて獨露す」と、ソレぢやから、佛も得る無く、衆生も失ふ無く、天上も是無く、塵界も非無き處にサ、男もあれば女もある、是の如く一佛と露れたぢや。「所以に善財見えずと。稱性の處に到つて、眼、自ら見えず、耳、自ら聞えず、指、自ら觸れざるが如く、刀、自ら割かず、火、自ら燒かず、水、自ら洗はざるが如し」と、サー入囘定の處を「稱性の處」と云ふ。一味平等の法性に契稱するからぢや。總じて華厳を「稱性」の說と云ふぢや。法性と心性と一枚、物我兩忘して、能見を絶し、所見を絶して見れば、見る人もなく、見らるゝ人もない。「這裏に到つて、教中大いに老婆相ひ爲めにする處有り。所以に一線道を放つて、第二義門に於て、賓を立し主を立し、機境を立し問答を立す」と、教中大いに差別に涉つてからに、隨緣眞如を設けてサ、賓主を立て、問答を立てたぢや。「所以に道ふ、諸佛出世せず、亦た涅槃有ること無し」と、コノ句は「華厳經」の兜卒天宮讚佛品の金剛幢菩薩の偈ぢや。コリャ妙峰頂の取り捌きぢや。「方便して衆生を度す、故に斯の如きの事を現ず」と、經は本と大願力を以つて、自在の法を顯現することを作すものぢや。卽ち是れ別峰ぢや。「且らく道へ、畢竟して作麼生か、鏡清、雪峯、恁麼に道ふことを免れ得去らん」と、サー首ッ玉のはづれ加減は如何ぢや。「當時拍拍相ひ應ずること能はずんば、盡大地の人、闊濶、野に遍き所以ならん」と、長慶と鏡清とが、ピッタリと相ひ應ぜないならばサ、サウして安居の人々が今の通りなれば、命がないぞ。皆なシャレ頭となるぢや。「鏡清恁麼に證し將ち來れり、那兩箇恁麼に用ひ將ち來る。雪竇後面に頌出して、更に顯煥たり。頌に云く」と、鏡清と、保福、長慶とは皆な同じぢや。サー雪竇が後面に頌出して更に分明ぢや。

妙峯孤頂草離離　○和身沒却○脚下已深「數丈也　拈得分明付與誰」○用作什麼○大地沒人知○乾屎橛○堪作何用○拈得鼻孔失却口　不是孫公辨端的○錯○看箭○着賊了也不知　髑髏着地幾人知　○更不再活○如麻似粟○闍黎拈得鼻孔失却口

【和訓】妙峯孤頂草離離。（○身に和して沒却す。○脚下已に深きこと數丈。）拈得分明なり誰れにか付與せん。（○用ひて什麼か作さん。○大地、人の知る沒し。○乾屎橛。○何の用を作すにか堪へん。○鼻孔を拈得して口を失却す。）是れ孫公端的を辨ずるにあらずんば。（○錯。○箭を看よ。○賊を着け了ることも也た知らず。）髑髏地に着く幾人か知らん。（○更に再活せず。○麻の如く粟に似たり。○闍黎、鼻孔を拈得して口を失却す。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「妙峯孤頂草離離」と、能くもカウ切つて放したナ。コリヤ雪峯下の古曲ぢや。源三位が討ち止めた鵺と云ふやうなもので、首は猿、尾は蛇、實に奇異の曲者ぞ。保福が「這裏便ち是れ妙峯頂」と、切つて出した處はサ、三賢四果の人々でも眼の及ばぬ處ぢや。ドコだかカシコだか、丁度盲目馬を河原へ放したやうぢや。ソノ妙峯孤頂が草離離、とはドウぢや。

「拈得分明なり誰れにか付與せん」と、眞向是の如く擧起して分明ぢやけれども、知り手がない、長慶が「可惜許」と味つて、ソノ要所は雪竇もチャンと見破つたがサ、自分ぢや云へないものぢやから、次ぎ下のやうに、

「是れ孫公端的を辨ずるにあらずんば」と、若しも長慶が、「可惜許」と抑へなかつたならば、

「髑髏地に着く幾人か知らん」と、シャレ頭は實に滿地ぢや。コノ話では喪身失命する者が少くないぞ。ソレは鏡清も云ふた通りぢや。併しサ、只だ玆に、雪竇屋裏の風彩があることを知る者がないぢや。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「妙峯孤頂草離離」――「身に和して沒却す」、他人事ぢやないぞ。雪竇自身も一つに這入り込んだ、深味へ落ちたぢや。併しコノ句で見損ふナ。三光は寒毛卓竪すと付けたいと云ふて居る。「脚下已に深きこと數丈」、「妙峯孤頂草離離」と、コリヤ荆棘參天ぢや。モウこき拔かれたものでない。雪竇慈悲囊を垂れて居るわい。

「拈得分明付與誰」――「用ひて什麼か作さん」、ナニ程分明に拈得したとて、平地上の骨堆ぢや、

コノ圜悟などには何んの役にも立たんわい。「大地、人の知る沒し」、雪竇も這入り籠つたナ。「乾尿槪」、「何の用を作すにか堪へん」、何んの用に立つか。あとが汚ないわい。「鼻孔を拈得して口を失却す」、コリヤ方語で云ふ一得一失ぢや。サー何を拈得したか。宗意は拈じたが、口では通じられぬとは、言語道斷、呆れ果てたものぢや。

「不是孫公辨端的」――「錯」、コリヤ辨は付けられぬぞ、付けやうもない。雪竇、胴腹を打ち拔かれたナ。「箭を着よ」、妙峯頂は一味平等ぢや。サー「可惜許」の箭はドコに當つたか。看よ〳〵。「賊を着け了ることも也た知らず」、雪竇と云ふ巾着切りの付いたのも知らないでサ。

「髑髏着地幾人知」――「更に再活せず」、サー活きた者はないぞ。現在目の前にコノ通り、髑髏、死人が、「麻の如く粟に似たり」ぢや。コリヤ皆な毒死の者ぢや。「闍黎、鼻孔を拈得して口を失却す」、雪竇め、鼻を捉へても口を失ふたわい。コノ間に死活がある。實にハヤ、言語道斷、心行所滅の處があるぞ。

妙峯孤頂草離離草裏輥有什麼了期拈得分明付與誰什麼處是分明處頌保福道只這裏便是妙峯頂不是孫公辨端的孫公見什麼道理便云是則是可惜許只如髑髏着地幾人知汝等諸人還知麼瞎

【和調】妙峯孤頂草離離と。草裏に輥せば什麼の了期か有らん。拈得分明なり誰れにか付與せんと。什麼の處か是れ分明の處。保福の、只だ這裏便ち是れ妙峯頂と道ふを頌す。是れ孫公、端的を辨ずるにあらずんばと。孫公、什麼の道理を見てか、便ち云ふ、是は則ち是、可惜許と。只だ髑髏地に着く幾人か知らんと云ふが如きんば、汝等諸人還つて知る麼。瞎。

【提唱】コレから圜悟の評ぢやが、雪竇がモウ肝膽を吐き盡し了つた。コノ評は未審しいぞ。「妙峯孤頂草離離」。草裏に輥せば什麼了期か有らん」と、コリヤ不可ん。「拈得分明なり誰れにか付與せんと、什麼の處か是れ分明の處、保福の、只だ這裏便ち是れ妙峯頂と道ふを頌す」と、何を云つて居るのぢや。コンナ評では氣にいらぬ。「是れ孫公、端的を辨ずるにあらずんばと。孫公、什麼の道理を見てか、便ち云ふ、是は則ち是、可惜許と。只だ髑髏地に着く幾人か知らんと云ふが如きんば、汝等諸人還つて知る麼、瞎」と、知るも知らぬも皆な瞎ぢや。

【注釋】〔少賣弄〕小商人の小利益を以つて足れりとし、途に觸れて小物を賣弄するが如く、到底大商人の大利益を見る能はざるに名く。こせ〳〵として物の大局に通ぜざること。或は安賣りして、大利を占め得ざることなり。支那の方語に、「自ら誇ること莫れ」と云ふに同じ。〔蓋覆却〕天地を覆ひ却けるやうに大きく出たのかと云ふこと。〔三賢四果〕十住、十行、十回向の諸位に居る者。四果とは、入流、一來、不還、不生を云ふ。

第二十四則　劉鐵磨臺山　【劉鐵磨臺山】

垂示云、高高峰頂立魔外莫能知、深深海底行佛眼覷不見、直饒眼似流星、機如掣電、未免靈龜曳尾到這裏、合作麼生、試舉看。

【和訓】垂示に云く、高高たる峰頂に立つて、魔外も能く知ること莫し。深深たる海底に行いて、佛眼覷れども見えず。直饒ひ眼、流星に似、機、掣電の如くたるも、未だ免れず靈龜、尾を曳くことを。這裏に到つて合に作麼生。試に舉す、看よ。

【提唱】第二十四則、「劉鐵磨臺山」と、コノ則は潙仰の密作用は、本と百丈の大機用に在つて、彼此交徹し、最も須らく參取すべきを示したのぢや。

「垂示に云く、高高たる峯頂に立つて」と、直下に妙峯頂なることを、チラリッとでも見出すと、皆なカウぢや。「魔外も能く知ること莫し」と、大魔、外道計りぢやない。例令佛祖と雖も、手を挾むとはならぬ。諸天花を捧ぐるに路無しぢや。「深深たる海底に行いて」と、サウかと思へば、即今コノ座敷が直に是れ深々たる海底ぢや。「佛眼覷れども見えず」と、サー蟲眼鏡でも見えぬぞ。コレ迄は第一段で賓主相見の處ぢや。「直饒ひ眼、流星に似て、機、掣電の如くなるも」と、コリャ第二段で、如上の宗師の面前を云ふ。ドンナに恰悧な衲僧でも、鋭い老僧でもサ、「未だ免れず靈龜、尾を曳くこと」を」と、潙山面前では魂消て踊るぞ。藏さうとすれば愈々顯れるぢや。「這裏に到つて合に作麼生。試に舉す、看よ」と、サー畢竟、尾を曳かぬやうには、ドウあるか。本則を看よ。

舉劉鐵磨到潙山。○不妨難湊泊。○這老婆不守本分。山云、老牸牛汝來也。○點。○探竿影草。○向什麼處見誓訖。磨云、來日臺山大會齋和尚還去麼。○箭不虛發。○大唐打鼓新羅舞。○放去太速收來太遲。潙山放身臥也。○中。○爾向什麼處見潙山。○誰知遠煙浪別有好思量。磨便出去。○過也。○見機而作。

【和訓】舉す。劉鐵磨、潙山に到る。（○妨げず湊泊し難きことを。○這の老婆本分を守らず。）山云く、老牸牛、汝來也。（○點。○探竿影草。○什麼の處に向つてか聲訖を見ん。）磨云く、來日臺山に大會齋あり。和尚還つて去る麼。（○箭虛りに發せず。○大唐に鼓を打てば新羅に舞ふ。○放去は太だ速かに、收來は太た遲し。）潙山、身を放つて臥す。（○中れり。○爾什麼の處に向つてか潙山を見ん。○誰れか知る、遠き煙浪に別に好思量あることを。）磨、便ち出で去る。（○過也。○機を見て作す。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「擧す。劉鐵磨、潙山に來る」と、一方は是れ達磨九世の孫ぢや。一方は一箇の婆さんぢや。ソレがサ、佛見も法見も盡きて、互に作家の相見ぢや。今時にはコンナ女はない。婆サンの劉鐵磨が潙山の處へ遣つて來たと見える。潙山はソレを見ると、直にサ、

「山云く、老牸牛、汝來也」と、ホヽウ女牛か、うぬ來たかト。言中に響ありぢや。中々油斷はならぬ。

「磨云く、來日臺山に大會齋あり。和尚還つて去る麼」と、劉鐵磨は手だれの强弓引ぢや。東京の上野に行きはなされぬかと。「來也」の返事に一矢うらみた。實に妙手の知音、二人ともに放行の働きぢや。少しも蹤跡はない。

「潙山、身を放つて臥す」と、流石の大將、バッタリと臥られた。コヽは言語道斷、心行所滅ぢや。煙浪の彼方に、歌も連歌も籠つて居る。

「磨、便ち出て去る」と、潙山の臥たのを見て、婆サン、ズイトコサと出て行つた。サー臥すにも去るにも、消息はないぞ。

著語　コレから圜悟の着語ぢや。

「擧劉鐵磨到潙山」――「妨げず湊泊し難きことを」、潙山面前、萬仞の懸瀑のやうで、中々踏み止められぬ。コノ尼も寄り付かれぬ、ド比丘尼奴が。「這の老婆本分を守らず」、コノお婆々、婆々のやうにもない。ナンぢや、潙山に到るが早いか、足がヒョロ付くぢやないか。

「山云老牸牛汝來也」――「點」、ウン合點々々と、直に點をかけた。措いて呉りやれ。「探竿影草」、サバさり乍ら、「老牸牛、汝來也」と云ふたのは、コノお婆々を試めさうと、サグリを入れたのぢや。サー此の「來也」には油斷はならぬ。「什麼の處に向つてか聲訛を見ん」、潙山の肚裏を見たかサ、ムツカシイ處があるぞ。

「磨云來日臺山大會齋和尚還去還」――「箭虛に發せず」、コノ婆サン、無駄箭は放さぬ。能く覘つて潙山の胸板を射抜いた。「大唐に鼓を打てば新羅に舞ふ」、二人唱拍相ひ隨ふ底ぞ。名人同士の合奏ぢや、來也も去也もない。拍子が能く揃ふてサ、少しも違はぬ。「放去は太だ速かに收來は太だ遲し」、兩方ともに取り亂した。放去は誰れでもするがサ、收來は上手でないと過があらうぞ。片付けることはムツカシイものぢや。

「潙山放身臥」――「中れり」、星を喰らはせた。潙山、急處を好く射當てたぞ。「爾什麼の處に向つてか潙山を見ん」、潙山が身を放つて臥した處を看よ。サー潙山の用處はドウぢや。「誰れか知る、遠き煙浪に別に好思量有ることを」と、須磨明石の風景は、歌でなくては哀れを知らぬぞ。アノ雲

の下こそ我が親里よ。「鳴立つ澤の秋の夕暮」、名歌でないと分らぬ。コノ無限の恨みは、實にハヤ歌にも連歌にも籠つたぞ。字面の外があると思ふのを、ツイ取ツ放いた。知音でなくちや知れるものぢやない。

「磨便出去」――――「過也」、蹉過了ぢや。エー逃すまいものを。「機を見て作す」、悧巧な婆々ぢや。

溈山はコロリと臥る、婆は直に去る。少しも隙間がない。實にハヤ、作家の相見ぢや。

劉鐵磨（尼也）如撃石火似閃電光擬議則喪身失命禪道若到緊要處那裏有許多事他作家相見如隔墻見角便知是牛隔山見煙便知是火拶着便動捺着便轉溈山道老僧百年後向山下檀越家作一頭水牯牛左脇下書五字云溈山僧某甲且正當恁麼時喚作溈山僧卽是喚作水牯牛卽是如今人問着管取分疎不下劉鐵磨久參機鋒峭峻人號爲劉鐵磨去溈山十里卓庵一日去訪溈山山見來便云老牸牛汝來也磨云來日臺山大會齋和尚還去麼溈山放身便臥磨便出去爾看他一如說話相似且不是禪又不是道喚作無事會得麼溈山去臺山自隔數千里劉鐵磨因什麼却令溈山去齋且道意旨如何這老婆會他溈山說話絲來線去一放一收互相酬唱如兩鏡相照無影像可覩機機相副句句相投如今人三搭不廻頭這老婆一點也瞞他不得這箇却不是世諦情見如明鏡當臺明珠在掌胡來胡現漢來漢現是他知有向上事所以如此如今只管做無事會四祖演和尚道莫將有事爲無事往往事從無事生爾若參得透去見他恁麼如尋常人說話一般多被言語隔碍所以不會唯是知音方會他底只如乾峯示衆云舉一不得舉二放過一着落在第二雲門出衆云昨日有一僧從天臺來却往南岳去乾峯云典座今日不得普請看他兩人放則雙放收則雙收溈仰下謂之境致風塵草動悉究端倪亦謂之隔身句意通而語隔到這裏須是左撥右轉方是作家

【和訓】劉鐵磨は（尼なり）、撃石火の如く、閃電光に似たり。擬議すれば喪身失命す。禪道若し緊要の處に到らば、那裏にか許多の事有らん。他の作家相見、墻を隔てゝ、角を見て、便ち是れ牛なることを知り、山を隔てゝ煙を見て、便ち是れ火なることを知るが如し。拶着すれば便ち動し、捺着すれば便ち轉ず。溈山道く、老僧百年後、山下の檀越家に向つて、一頭の水牯牛と作つて、左脇下に五字を書して云はん。溈山僧某甲と。且らく正當恁麼の時、喚んで溈山僧と作さんが卽ち是か、喚んで水牯牛と作さんが卽ち是か。如今の人問着すれば、管取して分疎不下。劉鐵磨は久參にして、機鋒峭峻なり。人號して劉鐵磨と爲す。溈山を去ること十里にして庵を卓つ。一日去つて溈山を訪ふ。山、來るを見て便ち云く、老牸牛、汝來也。磨云く、來日臺山に大會齋あり。和尚還つて去る麼。溈山、身を放つて便ち臥す。磨便ち出で去る。爾看よ、他、一へに說話の如くに相ひ似たり。且つ是れ禪にあらず、又た是れ道にあらず。喚んで無事の會と作し得ん麼。溈山は臺山を去ること自ら數千里を隔つ。劉鐵磨什麼に因つてか、却つて溈山をして、去つて齋せしめんとす。且らく道へ、宣旨如何。這の老婆、他の溈山の說話を會して、絲來線去、一放一收、互に相ひ酬唱す。兩鏡の相ひ照して、影像の覩る可き無きが如し。攫攫相ひ副ひ、句句相ひ投ず。如今の人三搭すれども、頭を廻らず、這の老婆、一點も也た他を瞞ずること得じ。這箇は却つて是れ世諦の情見にあらず、明鏡の臺に當り、明珠の掌に在るが如し。胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ず。是れ他、向上の事有ることを知る、所以に此の如し。如今只管に無事の會を做す。四祖の演和尚道く、有事を持つて無事と爲すこと莫れ、往往に事は無事從り生ずと。爾

若し參得透し去らば、他の恁麼に、尋常の人の說話の如く一般なることを見ん。多く言語に隔礙せらる、所以に會せず。唯だ是れ知音にして、方に他底を會せん。只だ乾峯の衆に示して云ふが如きんば、一を擧して二を擧することを得ず、一着を放過すれば第二に落在す。雲門、衆を出でて云く、昨日一僧有つて天臺從り來つて、却つて南岳に往き去る。乾峯云く、典座今日普請することを得ずと。看よ他の兩人、放す則んば雙放、收むる則んば雙收。潙仰下に之れを境致と謂ふ。風塵草茵するにも悉く端倪を究はむ。亦た之れを隔身の句と謂ふ。意通じて語隔る。這裏に到つて須らく是れ左撥右轉して、方に是れ作家なるべし。

【提唱】　コレから圜悟の評ぢや。「劉鐵磨は（尼なり）、擊石火の如く、閃電光に似たり。擬議すれば喪身失命す」と、劉鐵磨は徑山二世洪諲の法嗣ぢや。諲は卽ち潙山祐の法嗣ぢや。劉は姓で、鐵磨と云ふは名ぢやが、流石は鐵做底の磨子と云ふだけはある。「磨」は「說文」には「石磑」なりとあるが、今は能く一切の物を碎く義に取るぢや。ヨノ尼、口牙俊利にして、ソノ機用、擊石火の如く閃電光に似て、とても外から手指しはならぬ。一寸でもウロタヘルと、身骨がたまらぬぞ。「禪道若し緊要の處に到らば、那裏にか許多の事有らん」と、禪道もサ、極則の地に達したならば、何も面倒なことはない。今日コノ通り潙山と鐵磨と、手を取つて共に行くばかりぞ。「他の作家相見、墻を隔てゝ角を見て便ち是れ牛なることを知り、山を隔てゝ煙を見て、便ち是れ火なることを知るが如し」と、サー潙山と鐵磨との相見は實に俊利底ぢや。一見便見、逃すものでない。擧一明三と云ふか、目擊道存と云はんか。サー「墻を隔てゝ角を見て、便ち是れ牛なることを知り」と、コリヤ第一則の時にも云ふたが、「涅槃經」の十七に出て居る句ぢや。併し、牛と見るはまだるい、直に是れ石臼なることを知るが好い。「捺着すれば便ち動じ」と、機轉自在ぢや。「捺着すれば便ち轉ず」と、クルリ〳〵と働く、實に見事なものぢや。丁度水上の胡蘆子のやうに、手の輪に乘らぬ。「潙山道く、老僧百年後、山下の檀越家に向つて、一頭の水牯牛と作つて、左脇下に五字を書して云はん、潙山僧某甲と。且らく正當恁麼の時、喚んで潙山僧と作さんが卽ち是か、喚んで水牯牛と作さんが卽ち是か。如今の人問着すれば、管取して分疎不下」と、コレは又た向上の大事ぢや。牛に生れ代つて來たらドウぢや。潙山僧として供養するか、水牯牛として荷を脊負はせるか、サー如何ぢや。是れ潙仰宗の古曲ぢや。卽今かやうな問が出て來たらドウぢや。埒が明くまい。言譯に困つてボロを出さうぞ。鑄型や口先ぢや駄目ぢやぞ。「劉鐵磨は久參にして、機鋒峭峻なり。人號して劉鐵磨と爲す」と、コノ婆サン、潙山下でも久參ぢやがサ、各々何も是れ、潙山に參ずることはない、只だ自己に參せよ。婆サン中々目ハシが利いて齒が立たぬから、劉鐵磨と云ふたぢや。「潙山を去ること十里にして庵を卓つ。一日去つて潙山を訪ふ」と、コノ婆サン、潙山の近い處に住んでからに、時々問答に出掛けたものと見える。「十里」と云ふても、ソノ頃の一里は六町を云ふたものぢや。「山、來るを見て便ち云く、老牸牛、汝來也。磨云く來日臺山に大會齋あり。和尙還つて去る麼。潙山、身を放つて便ち臥す。磨便ち出て去る」と、或日婆サンが來たものぢやから、潙山、「老牸牛、汝來也」と出た。スルト婆サンは

「臺山に供養があるが、和尚サン行きなんすか」と云ふた。實にハヤ、佛法臭くも世法臭くもない。

溈山又た無言で、ヨットセと寢轉んだ。ソコデ婆サン、コイツ耻をかいたナと出て失せた。「儞看よ他、一へに說話の如くに相ひ似たり」と、宗旨を手に入れた上の問答は、常の話のやうぢや。「且つ是れ禪にあらず、又た是れ道にあらず。喚んで無事の會と作し得ん麼」と、マルデ悟を云はず、佛道を云はず、離れたともナンとも云はないが、と云ふて、ヘンテツもないことゝ思ふな。「溈山は臺山を去ること自ら數千里を隔つ。劉鐵磨什麼に因つてか、却つて溈山をして、去つて齋せしめんとす。且らく道へ、意旨如何」と、溈山と臺山とはサ、日の出の濱と長崎と程遠ふのに、ナンデ、コノ婆サン、溈山に向つて齋に行くかと云ふたかサ。サーその意はドウぢや。「這の老婆、他の溈山の說話を會して」と、耳を捉へて鼻をカムやうな磨ぢやが、溈山の手元を呑み込み切つて居るからぢや。「絲來線去、一放一收、互に相ひ酬唱す」と、綿密に相續して、恰も針の跡の違ひがないやうにサ、放去收來、指しつ指されつ。「兩鏡の相ひ照して、影像の觀る可き無きが如し。機機相ひ副ひ、句句相ひ投ず」と、二人の出會は、兩鏡の互に照し合ふてからに、鏡中一絲を掛けざる底ぢや。少しも滯りがない。「如今の人三搭すれども頭を廻さず」と、サー打つても叩いても、突いても、機輪は轉ぜぬぢや。コノ語は「水滸傳」の中にある故事で、馬鹿者を云ふたのぢや。「這の老婆、一點も也た他を瞞ずること得じ」と、ナンとしやうとも、コノ婆さんは瞞されぬ。ナカ〳〵喰へぬ奴ぢや。「這箇却つて是れ世諦の情見にあらず」と、マルデ人の情識を離れ、陰界を離れたものと思へ。「明鏡の臺に當り、明珠の掌に在るが如し。胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ず。是れ他、向上の事有ることを知る、所以に此の如し」と、サー明珠が手に在りさへすれば、餅にせうと、饅頭にせうと、自由自在ぢや。實にハヤ、コノ尼は祖々傳來の大事を知り拔いたから、コノ藝當が打てるぢや。「如今只管に無事の會を做す」と、無事是れ貴人なぞとは大スカタンぢや。畢竟、身三口四意三の十惡罪を知らぬから、無事の會を做すぢや。「四祖の演和尚道く」と、コノ四祖の演和尚と云ふは、コリヤ不審ぢやテ。靳州四祖山の法演禪師、黃龍慧南に嗣ぐと云ふが、錄中にコノ語はない。又た獨本には「五祖演」とあり、張本、福本は「四祖」とあるが、二師共に本錄にコノ語は見當らぬ。「有事を將つて無事と爲すこと莫れ、往往に事は無事從り生ず」と、參學の人、陰界の間は皆な有事と思へ。人々日々、十惡を造りながら、ソレを無事ぢやとサ。兎角油斷が惡いぞ、三塗地獄も無事から出て來るぢや。「儞若し參得透し去らば、他の恁麼に、尋常の人の說話の如く一般なることを見ん」と、サー徹見した曉には、佛法の事は、尋常の說話のやうに手に入る。サウあらうぞならば、佛法と世法と違ひはせぬ。世法と違へば佛法ぢやない。「多く言語に隔碍せらる、所以に會せず」と、言語に隔碍せられるではない、己れか〳〵と自己に隔碍せらるゝぞ。儒者なぞは多くは斯う云ふ手合ぢや。今ま日本の禪者にも、コノ類が澤山有るぞ。「唯だ是れ知音にして、方に他底を會せん」と、コノ處は互に喰ひ合ひ、互に

吸ひ合ふたものぢやないと、コノ味ひは會らぬ。「只だ乾峯の衆に示して云ふが如きんば」と、コリヤ洞山の嗣の乾峯和尚の示衆ぢや。是れ保福も長慶も、恐らくは舌を捲く底の一句ぢやらう。「一を擧して二を擧することを得ず」と、乾峯、何の死たわごとを吐かすか。コノ南天棒ならば、朝の間の茶の子ぢや。久參の上士は家常の茶飯ぢや。併し、コレを知るにや、雲門の下語を手に入れぬといかぬぞ。「一着を放過すれば第二に落在す」と、片フタでも放すと駄目ぢや。「雲門、衆を出でゝ云く、昨日一僧有つて天臺從り來つて、却つて南岳に往き去る。乾峯云く、典座今日普請することを得ず」と、雲門が乾峯の腹中を見徹してからに、カウ出て來た。サーこれは又た呈解問か、驗主問か。乾峯のホテッ腹を見拔いて喰はせたぞ。そこで乾峯が褒美に普請を休めた。コリヤ餘り賤賣ぢや、キツイ氣に入つたぞ。「看よ他の兩人、放す則んば雙放、收むる則んば雙收」と、實に法界に彌綸し、絲髮も立せずぢや。「潙仰下に之れを境致と謂ふ。風塵草動するにも悉く端倪を究む。亦た之れを隔身の句と謂ふ。意通じて語隔る」と、全體コノ二十六字は好くない、削るがよい。南天棒は取らぬ。ぢやが云ふだけは云ふて置かう。潙仰下には九十六種の圓相がある、境致上に於てからに、自己作用を作して、ソシテ以つて此の事を說く。是れ心境一致ぢや。「風塵」の塵は驚にするが好い。チョットしても、早やソノ手元を看て取る。コレを隔身の句と云ふ。意通じて語隔るからぢや。世間今まで評判するに、一隅を擧して三隅を知るを隔身の句と云ふと。糞ッ、ソノなりかばねであらうぞならば「碧巖」は措いて貰はう。雪峯、雲門の出合、潙山、劉鐵磨の出合の如き、洞山下は語定位ぢやが、臨濟下はサウでない。意さへ通ずれば位は定めない。第一句を第二句に用ひ、第三句を第一句にも用ふるぢや。「這裏に到つて須らく是れ左撥右轉して、方に是れ作家なるべし」と、カウなれば自由自在ぢや。ソレ、ソコと云へば、コヽと聞く奴、實に作家ぢや。

曾騎鐵馬入重城　○慣戰作家○塞外將軍○七事隨身　**勅下傳聞六國清**　○狗銜赦書○寰中天子○爭奈海晏河清　**猶握金鞭問歸客**　○是什麼消息○一條拄杖兩人扶○相招同往又同來　**夜深誰共御街行**　○君向瀟湘我向秦○**且道行作什麼**

【和訓】曾つて鐵馬に騎つて重城に入る。（○戰に慣ふ作家。○塞外は將軍。○七事、身に隨ふ。）勅下つて傳へ聞く六國の淸きことを。（○狗、赦書を銜む。○寰中は天子。○爭奈せん海晏河淸なることを。）猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふ。（○是れ什麼の消息ぞ。○一條の拄杖、兩人扶かる。○相ひ招いて同じく往き又た同じく來る。）夜深けて誰れと共にか御街に行かん。（○君は瀟湘に向ひ、我は秦に向ふ。○且らく道へ、行いて什麼か作さん。）

【提唱】

頌 コレから雪竇の頌ぢや。

「曾つて鐵馬に騎つて重城に入る」と、鋭い名馬に打ち乘つて、敵陣指して切り込み、ふか〳〵と嚴重な城廓へ踏ん込んだ。コレは劉鐵磨が潙山の城廓へ踏ん込んだ處を頌したのぢや。

「勅下つて傳へ聞く六國の清きことを」と、「老牸牛、汝來也」と云はれたが、磨が山やら、山が磨やら、兩鏡相ひ照すやうに、コヽに賓主はない、波風も立たぬ、四海皆な是れ太平ぢや。靜まれ靜まれと天子より扱ひが入つた。サー此處は各々手前で骨折つて、些子の力を得て、サウして始めて太平ぢやぞ。コレデ頌は濟んだのぢやが、更にサ、

「猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふ」と、「來日臺山の大慈院に大會齋あり」と云ふたのはサ、婆サン、戰はずして兵を屈せられたものぢやから、機鋒猶ほ止まず、我と思はん者と戰ひたさに、丁度太平の將軍が、雄心未だ止まず、戰場から歸つた者に不平を云ふやうなものぢや。

「夜深けて誰れと共にか御街に行かん」と、九重の內は往來なければ便宜は知れぬ、佛祖も伺ひ知らぬ。サー潙山がゴロッと臥、婆々は相手が無きにスゴ〳〵と出て行つた後、太平になつたか、ナンだか知れたものではない。

著語 コレから圜悟の著語ぢや。

「曾騎鐵馬入重城」――「戰に慣ふ作家」、「塞外は將軍」、鐵磨は元來戰爭には慣れて居るから名將ぢや。關外では將軍ぢや。「七事、身に隨ふ」、七ッ道具が揃ふて居るから、實に智仁勇兼備ぢやナンでも事は缺かぬ。

「勅下傳聞六國清」――「狗、赦書を銜む」、年貢三年作り取り。今はコンナとはない、天下は太平ぢや。コノ語は方語で、「狗、赦書を銜む有れば、諸侯路を避く」と云ふことぢや。お觸書が出ると、大名も路傍へ寄るものぢや。「寰中は天子」、大なる哉潙山、流石は天子の貫祿がある。幾內も能く治つて居る。「爭奈せん海晏河清なることを」、今の中骨折つて置くと海晏河清ぢや。波風はない、ドコもカシコも悟り返つた波濤ぢや。

「猶握金鞭問歸客」――「是れ什麼の消息ぞ」、いらざることをする。惜けば好いに。歸客に何を尋ねたぞ。「一條の拄杖、兩人扶かる」、佛も衆生も只だ拄杖一本、智音同士で取つて居る。兩人が扶つた位ぢや役に立たぬ、ヘシ折つて了へ。「相ひ招いて同じく往き又た同じく來る」、潙山と鐵磨と二つはない。雪竇と、三人は三人とも知音ぢや。

「夜深誰共御街行」――「君は瀟湘に向ひ、我は秦に向ふ」、潙山は轉る、鐵磨は出て行く。箇々轉處に立在して居る。鄭谷の詩に、「揚子江頭楊柳の春、楊花渡江の人を愁殺す。一聲の羌笛離亭の晩、君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ」とある。「且らく道へ、行いて什麼か作さん」、コノ太平に、御

街に行つて何をするつもりぢや。

雪竇頌諸方以爲極則一百頌中這一頌最具理路就中極妙貼體分明頌出曾騎鐵馬入重城頌劉鐵磨恁麼來勅下傳聞六國清頌潙山恁麼問猶握金鞭問歸客頌磨云來日臺山大會齊和尚還去麼夜深誰共御街行頌潙山放身便臥磨便出去雪竇有這般才調急切處向急切處頌緩緩處向緩緩處頌風穴亦曾拈同雪竇意此頌諸方皆美之高高峰頂立魔外莫能知「深深海底行佛眼覷不見着他一箇放身臥一箇便出去若更周遮一時求路不見雪竇頌意最好是曾騎鐵馬入重城若不是同得同證焉能恁麼且道得箇什麼意不見僧問風穴潙山道老牸牛汝來也意旨如何穴云白雲深處金龍躍僧云只如劉鐵磨道來日臺山大會齋和尚還去麼意旨如何穴云碧波心裏玉兎驚僧云潙山便作臥勢意旨如何穴云老倒疎慵無事日閑眠高臥對青山此意亦與雪竇同也

【和調】雪竇の頌、諸方以て極則と爲す。一百頌の中、這の一頌、最も理路を具す。中に就いて極妙貼體、分明に頌出す。曾つて鐵馬に騎つて重城に入るとは、劉鐵磨恁麼に來ることを頌す。勅下つて傳へ聞く六國の清きことをとは、潙山恁麼に問ふことを頌す。猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふとは、磨、來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去る麼と云ふを頌す。夜深けて誰れと共にか御街に行かんとは、潙山、身を放つて便ち臥し、磨便ち出で去るを頌す。雪竇這般の才調有り、急切の處をば、急切の處に向つて頌し、緩緩の處をば、緩緩の處に向つて頌す。風穴亦た曾つて拈ず、雪竇の意に同じ。此の頌諸方皆な之れを美む。高高たる峯頂に立つて、魔外も能く知ること莫し。深深たる海底に行つて、佛眼覷れども見えず。看よ、他一箇は身を放つて臥し、一箇は便ち出で去る。若し更に周遮せば、一時に路を求むるとも見えず。雪竇の頌意最も好し。是れ曾つて鐵馬に騎つて重城に入る。若し是れ同得同證にあらずんば、焉んぞ能く恁麼ならん。且らく箇の什麼の意をか得たる。見ずや、僧、風穴に問ふ、潙山道く、老牸牛、汝來也と、意旨如何。穴云く、白雲深き處金龍躍る。僧云く、只だ劉鐵磨、來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去る麼と道ふが如きんば、意旨如何。穴云く、碧波心裏玉兎驚く。僧云く、潙山便ち臥す勢を作す意旨如何。穴云く、老倒疎慵無事の日、閑眠高臥青山に對すと。此の意亦た雪竇と同じ。

【提唱】コレから圜悟の評ぢや。「雪竇の頌、諸方以つて極則と爲す。一百頌の中、這の一頌、最も理路を具す」と、雪竇の頌、一百則の中では、コノ頌が筋道が立つて一番好いと。併し圜悟、筋道が立つてさへ居たら好いと云ふのか、馬鹿を云へ。まだコレより勝れたのが有る。「中に就いて極妙貼體、分明に頌出す」と、「貼體」と云ふことはサ、ヒッタラと身に付いて居ると云ふのぢや。つまり形體ぢや、體裁ぢや。人が衣服を着て、美しう威儀を取るを云ふ。併しサ、頌を面白く案じて作つては散々ぢや。案じて作つたらば頌ではあるまいぞ。頌と云ふものは、我が腹中をソノ儘に吐き出さいでは。「曾つて鐵馬に騎つて重城に入るとは、劉鐵磨恁麼に來ることを頌す」と、鐵磨が、佛魔も伺ふことのならぬ潙山居城の奥深い處まで、ヅン〳〵押寄せて來た。「勅下つて傳へ聞く六國の清きことをとは、潙山恁麼に問ふことを頌す」と、併し天下は太平ぢやない、「老牸牛、汝來也」とは不平

ではないか。「猶ほ金鞭を握つて歸客に問ふとは、磨、來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去る麼と云ふを頌す。夜深けて誰れと共にか御街に行かんとは、潙山、身を放つて便ち臥し、磨便ち出で去るを頌す」と、コレは此の通りで、別に云ふともない。「雪竇這般の才調有り、急切の處をば、急切の處に向つて頌し、緩緩の處をば、緩緩の處に向つて頌す」と、急切に「老牸牛」と出た處は急切にサ、緩緩にゴロリッと寢た處は緩緩とサ、實に天晴れな頌ぢや。能くコノやうに頌せられた。「風穴亦た曾つて拈ず。雪竇の意に同じ」と、コノ九字はいらぬことぢや、削るが好い。風穴の評は語錄中に出て居ない。或は云ふ、次き下の「高高たる峰頂」等の四句を指したのぢやと。然れども是れ又た風穴の傳中に見えない。コノ四句は垂示の中より引いて來たのぢや、必らず是れ評の語ぢやらう。ソレから又た或者は次き下の問答を指したのぢやとも云ふが、コリャ拈語ではないから、別に拈語が無くちやならぬ。「此の頌諸方皆な之れを美む。高高たる峯頂に立つて、魔外も能く知ること莫し。深深たる海底に行つて、佛眼覷れども見えず」と、コレから已下、「求路不見」までは、諸方の邪解を擧げて來たのぢや。サー高々たる本分の家山、深々たる本分の家鄉は、天魔でも佛祖でも見られるものぢやないぞ。「看よ、他一箇は身を放つて臥し、一箇は便ち出で去る。若し更に周遮せば、一時に路を求むるとも見えず」と、若し此處でトジクジと戸迷ひしたら、方角を失ふぞ。ソレはソノ筈よ、おとづれがないもの。「雪竇の頌意最も好し」と、ソレから下の「是れ曾つて鐵馬に騎つて重城に入る」と、コノ八字もいらぬ。削るが好い。「若し是れ同得同證にあらずんば、焉んぞ能く恁麼ならん。且らく道へ、箇の什麼の意をか得たる」と、コノ奥深くまで切り込んだ端的は、サーどうぢや。師弟とは云つても、至極の處まで行き着いて見ると、師弟の沙汰はないぞ。「見ずや、僧、風穴に問ふ。潙山道く、老牸牛、汝來也と、意旨如何」と、或坊サマが、風穴に潙山と婆サンとの問答を試みた。「穴云く、白雲深き處金龍躍る」と、金龍は日に譬ふ、或は龍をも指すぢや。是れ美なりと雖も、親しく見ることは出來ぬ。鐵磨が潙山の處へ到つた處は、丁度ソレぢや。「僧云く、只だ劉鐵磨、來日臺山に大會齋あり、和尚還つて去る麼と道ふが如きんば、意旨如何」と、ソレに對して風穴は、「穴云く、碧波心裏玉兎驚く」と、有るかとすれば有るにもあらず、無いかと見れば又た澄み湛へて見える。月影の動くのが、實にハヤ見事ぢや。水中の月ぢや、取らんと擬すれども取ることはならぬ。「僧云く、潙山便ち臥す勢を作す、意旨如何」と。穴はサ、「穴云く、老倒疎慵無事の日。閑眠高臥青山に對す」と、世間の暇のあいた人は、コノ通りぢや。さなきだに年寄れば無精なのに、況してや大暇のあいた人なら、一層のことぢやわい。ウト〳〵寢ながら青山を眺めて居る。「此の意亦た雪竇と同じ」と、是れ雪竇と同意ぢや。

注釋〔石礎〕石の引臼のこと。〔陰界〕五蘊界。〔身三口四意三〕身の三業、口の四業、意の三業と云ふ意を示す簡語。即ち十惡の中、殺生、偸盜、邪淫の三は身業、妄語、惡口、綺語、兩舌の四は口業、貪、瞋、癡の三は意業に屬す。〔片フタ〕少しもと云ふこと。〔普請〕衆を集めて作務すること。〔九十六種の圓相〕九十六種の外道に對して云ふ。

第二十五則　蓮華庵主不住　【蓮華庵主不住】

垂示云、機不離位、墮在毒海、語不驚群、陷於流俗、忽若擊石火裏、別緇素、閃電光中、辨殺活、可以坐斷十方、壁立千仞、還知有恁麼時節、麼試擧看。

【和訓】垂示に云く、機、位を離れずんば、毒海に墮在す。語、群を驚かさざれば、流俗に陷る。忽ち若し擊石火裏に緇素を別ち、閃電光中に殺活を辨ぜば、以て十方を坐斷して、壁立千仞なる可し。還つて恁麼の時節有ることを知る麼。試に擧す、看よ。

【提唱】コレは第二十五則、「蓮華庵主不住」の則ぢや。コノ則は蓮華峯庵主、專ら雲門の機鋒を須ひ、隱々の中に、兼ねて法眼宗の語要に似たることを明すのぢや。

「垂示に云く、機、位を離れずんば、毒海に墮在す」と、垂示は總て本則を見掛けて云ふものぢや。サー一回徹了すると、上、諸佛無く、下、衆生無い境界に到る。「機」は未だ言句に出ない先に現るゝものぢや、「位」は悟りの穴ぢや。ぢやから正位を離れねば役に立たぬ、邪見に落ちるぞ。「語、群を驚かさざれば、流俗に陷る」と、釋迦でも達磨でも冷え上る程の語ぢやないと　知解、情識の間に挾まれて了ふぞ。「忽ち若し擊石火裏に緇素を別ち、閃電光中に殺活を辨せば」と、難透の話を透過すれば、學者の手元を見分けることは、朝の間の茶の子ぢや。「以つて十方を坐斷して、壁立千仞なる可し、還つて恁麼の時節有ることを知る麼」と、たとへ唐、天竺へ渡つたとて、いかなこと、寄り付くことは叶はぬぞ。「試に擧す、看よ」と、サー本則を看よ。

擧蓮華峯庵主拈杖示衆云、○看頂門上具一隻眼○也是時人窠窟古人到這裏爲什麼不肯住、○不可向虛空裏釘橛○權立化城、衆無語、○千箇萬箇如麻似粟○却較些子○可惜許○一棚俊鶻自代云爲他途路不得力○若向途中辨猶爭半月程○設使得力堪作什麼○豈可全無一箇復云畢竟

如何　○千人萬人只向箇裏坐却○千人萬人中一箇兩箇會　又自代云、柳樑横擔不顧人直入千峯萬峯去　○也好與三十棒○只爲他擔板○腦後見腮莫與往來

【和訓】舉す。蓮華峯庵主、拄杖を拈じて衆に示して云く。（○看よ頂門上に一隻眼を具す。○也た是れ時の人の窠窟。）古人這裏に到つて什麼と爲てか肯て住せざる。（○虚空裏に向つて釘橛す可からず。○樞に化城を立す。）衆、無語。（○千箇萬箇麻の如く粟に似たり。○却つて些子に較れり。○可惜許。○一棚の俊鶻。）自ら代つて云く、他の途路に力を得ざるが爲めなり。（○若し途中に向つて辨ぜば、猶ほ半月程を爭せん。○設使ひ力を得るも、什麼を作すにか堪へん。○豈に全く一箇無かる可けんや。）復た云く、畢竟如何。（○千人萬人只だ箇の裏に向つて坐却す。○千人萬人の中一箇兩箇會す。）又た自ら代つて云く、柳樑横に擔つて人を顧みず、直に千峯萬峯に入り去る。（○也た好し三十棒を與ふるに。○只だ他の擔板なるが爲めなり。○腦後に腮を見ば與に往來すること莫れ。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「舉す、蓮華峯庵主、拄杖を拈じて衆に示して云く」と、蓮華峯庵主は奉先道琛の法嗣で、雲門の孫ぢや。コノ示衆は、實に三根器を貫く底の示衆ぢや。向上に調ぶる者には點滴も施さない、只だ中、下の義を以つて、且らく汝等が爲めに說かん。コノ則は季咸が曾つて壺丘子を相するが如く、見定められぬ、九尾の野狐ぢや。

「古人這裏に到つて什麼と爲てか肯て住せざる」と、コリヤ雲門宗の骨髓ぢや。地紋精密なる一張の錦衣、誠に奇怪ぢや。庵主、何の死にタワゴトぞ。サー住すれば何んとするぞ。佛界にも魔界にも、天堂にも地獄にも、瀨戸にも海道にも入り渡らぬ處はないぞ。

「衆、無語」と、拄杖に鼻を突いて、默言るとは情けない奴輩ぢやな。老衲ならば、何をタワゴトを吐くか、默言り居れと云はん。

「自ら代つて云く、他の途路に力を得ざるが爲めなり」と、コレには邪解が多い。途中受用ぢや、埒が明かぬなぞと云ふは笑ふべしぢや。「力を得」と云ふが、庵主が力を得たかサ、拄杖が力を得たかサ。サー差別に滿ち、不調法ぢやから、いかないぞ。四智圓明に至らんと進み行け、花も紅葉も鳴呼見事々々。

「復た云く、畢竟如何」と、ソレでも未だ濟まぬ、ギリ〳〵の處はドウぢや。

「又た自ら代つて云く、柳樑横に擔つて人を顧みず、直に千峯萬峯に入り去る」と、何んと代つたか、山形の拄杖子か。エー叩き殺されるナ、死人め。南天棒云く、コノ語極つて龍の水を得る如き極段の處に至れば、差別に打つて出るとは邪解ぞ。コノ庵主、恐しい人相ぢや。老僧も往日錯つて

會した。山に登らば須らく山の頂を究むべく、海に入つたなら須らく底を盡すべしぢや。コノ上、諸佛無く、下、衆生無き處の本分の拄杖を、後ろ楯に取つて、四弘の誓願に依つて、四智圓明の大日辛に進んで行くぢやと見たがサ、後になつて見れば、庵主の手元には、未だ一段向上な處があるぞ。ソノ向上の處はドウぢや。サーそれは安賣はならぬ、銘々骨を折れ〳〵〳〵。

著語　コレから圜悟の着語ぢや。

「擧蓮華峯庵主拈拄杖示衆云」――「看よ頂門上に一隻眼を具す」、ナニ、庵主の頂上、一隻眼を具したなぞト。コノ坊主、本分は守らず、人但の惡い奴ぢや。ソンナ眼は叩き潰せ。「也た是れ時の人の窠窟」、拄杖子なぞと、大きな落し穴ぢや、多くは正位に尻を据えたがるぞ。

「古人到這裏爲什麼不肯住」――「虛空裏に向つて釘橛す可からず」、ソンナとは豆腐に鎹ぢや。默目々々。全體コノ下語は未審しい。コノ通りなればサ、狗も喰はぬぞ。「權に化城を立す」、コリヤ不可ぬ。「化城」は「法華」の故事ぢや。本場所ぢやない、一寸の休み場ぢや。

「衆無語」――「千箇萬箇、麻の如く粟に似たり」、大勢ごろッちや〳〵して居るが、ドレもコレもヅヽなし者めが、役に立たぬ。「却つて些子に較れり」、コリヤ「無語」を扶けて云ふたぢや。シタガ此の坊主共、默言つたも增しかサ。「可惜許」、併し惜しいことぢや。「一棚の俊鶻」、つながれたぢやないか。棚ざらしの達磨、身動きもならぬ奴共めと。コリヤ羈を被つて、用を發すると能はざるを云ふ。

「自代云爲他途路不得力」――「若し途中に向つて辨ぜば、猶ほ半月程を爭せん」、途中受用のこと〻見ばサ、正位は半分路でもない。都は中々遠い〳〵。「設使ひ力を得るも、什麼を作すにか堪へん」、よしや達者になつた處が、ヨロケものぢや。「豈に全く一箇無かる可けんや」、イヤ此の圜悟が無いでもないサと、圜悟の自點胸ぢや。

「復云畢竟如何」――「千人萬人只だ箇の裏に向つて坐却す」、多くはソコに居るサ、皆な拄杖子に住するぞ。「三十餘り我れも狐の穴に住む」ぢや。誰れでもコノ拄杖子には迷はさるゝぞ。「千人萬人の中一箇兩箇會す」、一人や二人は會する者もあらうがサ、衲も見損つたぞ。

「又自代云柳標橫擔不顧人直入千峯萬峯去」――「也た好し三十棒を與ふるに」、喰らはされぬやうにしろ。ドウセ打つくぞなれば、一方向きの奴故ぢや。「只だ他の擔板なるが爲めなり」、サー誰れが擔板ぢや、庵主は何方へ向いて擔板ぢや。「腦後に腮を見ば與に往來すると莫れ」、サバさりながら、エヅイ奴ぢや。人相の惡い曲者ぢや、道連にもイヤぢや、付合ひせぬやうにするが好い。實に上來の下語怪しむ可し。只だコノ一句、佛恩を報ずるに足るぢや。

諸人還裁辨得蓮華峯庵主麼脚跟也未點地在國初時在廬山蓮華峯卓庵古人既得道之後茅茨石室中折脚鐺兒內煑野菜根喫過日且不求名利放曠隨緣垂一轉語且要報佛祖恩傳佛心印纔見僧來便拈拄杖云古人到這裏爲什麼不肯住前後二十餘年終無一人答得只這一問也有權有實有照有用若也知他圈績不消一揑爾且道因什麼二十年如此問既是宗師爲何故只守一橛若向箇裏見得自然不向情塵上走凡二十年中有多少人與他平展下語呈見解做盡伎倆設有箇道得也不到他極則處況此事雖不在言句中非言句即不能辨不見道道本無言因言顯道所以驗人端的處下口便知音古人垂一言半句亦無他只要見爾知有不知有他見人不會所以自代云爲他途路不得力看他道得自然契理契機幾曾失却宗旨古人云承言須會宗勿自立規矩如今只管撞將去便了得則得爭奈顢頇儱侗若到作家漢將三要語印空印泥印水驗他便見方木逗圓孔無下落處到這裏討一箇同得同證臨時向什麼處求若是知有底人開懷通箇消息有何不可若不遇人且卷而懷之且問爾諸人拄杖子是衲僧尋常用底因什麼却道途路不得力古人到此不肯住其實金屑雖貴落眼成翳石室善道和尚當時遭沙汰常以拄杖示衆云過去諸佛也恁麼未來諸佛也恁麼現前諸佛也恁麼雪峯一日僧堂前拈拄杖示衆云這箇只爲中下根人時有僧出問云忽遇上上人來時如何峯拈拄杖便去雲門云我即不似雪峯打破狼籍僧問未審和尚如何

雲門便打大凡參問也無許多事爲爾外見有山河大地內見有見聞覺知上見有諸佛可求下見有衆生可度直須一時吐却然後十二時中行住坐臥打成一片雖在一毛頭上寬若大千沙界雖居鑊湯爐炭中如在安樂國土雖居七珍八寶中如在茅茨蓬蒿下這般事若是通方作者到古人實處自然不費力他見無人搆得他底復自徵云畢竟如何又奈何不得自云柳標橫擔不顧人直入千峯萬峯去這箇意又作麼生且道指什麼處爲地頭不妨句中有眼言外有意自起自倒自放自收豈不見嚴陽尊者路逢一僧拈起拄杖云是什麼僧云不識嚴云一條拄杖也不識嚴復以拄杖地上劃一下云還識麼僧云不識嚴云土窟子也不識嚴復以拄杖擔云會麼僧云不會嚴云柳標橫擔不顧人直入千峯萬峯去古人到這裏爲什麼不肯住雪竇有頌云誰當機舉不賺亦還希摧殘峭峻銷鑠玄微重關曾巨闢作者未同歸玉兎乍圓乍缺金烏似飛不飛盧老不知何處去白雲流水共依依因什麼山僧道腦後見腮莫與往來纔作計較便是黑山鬼窟裏作活計若見得徹信得及千人萬人自然羅籠不住奈何不得動着拶着自然有殺有活雪竇會他意道直入千峯萬峯去方始成頌要知落處看取雪竇頌云

【和訓】諸人還つて蓮華峯庵主を裁辨得す麼、脚跟未だ地に點せざること在り。國初の時、廬山の蓮華峯に在つて庵を卓つ。古

人既に得道の後、茅茨石室の中にして、折脚鐺兒の內に、野菜根を煮て、喫して日を過し、且つ名利を求めず。放曠として緣に隨つて一轉語を垂れて、且つ佛祖の恩を報じ、佛心印を傳へんことを要す。纔に僧の來るを見れば、便ち拄杖を拈じて云く、古人這裏に到つて、什麼と爲てか肯て住せざると。前後二十餘年、終に一人も答へ得る無し。只だ這の一問、也た權有り實有り、照有り用有り。若し也た他の圈繢を知らば、一擔を消せじ。儞且らく道へ、什麼に因つてか、二十年此の如く問ふ。既に是れ宗師の爲す處、何が故ぞ只だ一橛を守る。若し箇の裏に向つて見得せば、自然に情塵の上に向つて走らず。凡そ二十年中、多少の人有つてか、他の與めに平展し下語して、見解を呈して伎倆を做し盡す。設ひ箇の道ひ得る有るも、也た他の極則の處に到らず。況んや此の事は言句の中に在らずと雖も、言句に非れば即ち辨ずること能はず。道ふことを見ずや、道、本と言無し、言に因つて道を顯すと。所以に人を驗する端的の處、口を下せば便ち知音。古人、一言半句を垂るること亦た他無し、只だ儞が有ることを知るか、有ることを知らざるかを見んと要す。他、人の會せざるを見て、所以に自ら代つて云く、他の途路に力を得ざるが爲めなりと。看よ、他の道ひ得て、自然に理に契ひ機に契ふことを。幾くか曾つて宗旨を失却せん。古人云く言を承けんには、須らく宗を會すべし、自ら規矩を立すること勿れと。如今只管に撞將し去つて、便ち了す。得ることは即ち得たり、爭奈せん、顢頇儱侗なることを。若し作家の漢に到つては、三要の語を將つて、空に印し、泥に印し、水に印して他を驗せば、便ち方木、圓孔に逗して、下落の處無きことを見ん。這裏に到つて一箇の同得同證を訪ぬるに、時に臨んで什麼の處に向つてか求めん。若し是れ有ることを知る底の人ならば、懷を開いて箇の消息を通ぜんに、何の不可か有らん。若し人に遇ばずんば、且らく卷いて之れを懷にせん。且らく儞諸人に問はん、拄杖子は是れ衲僧尋常用ふる底なり。什麼に因つてか却つて道ふ、途路に力を得ずと。古人、此に到つて肯て住せず。其の實は、金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る。石室の善道和尙、當時沙汰に遭ふ。常に拄杖を以て衆に示して云く、過去の諸佛も也た恁麼、未來の諸佛も也た恁麼、現在の諸佛も也た恁麼と。雪峯一日僧堂前に拄杖を拈じて衆に示して云く、這箇只だ中下根の人の爲めにす。時に僧有り、出でゝ問ふて云く、忽〻上上人の來るに遇はん時如何。峯、拄杖を拈じて便ち去る。雲門云く、我は即ち雪峯の打破して狼藉なるに似ずと。僧問ふ、未審、和尙如何。雲門便ち打つ。大凡そ參問は也た許多の事無し。儞、外に山河大地有ることを見、內に見聞覺知有ることを見、上に諸佛の求む可き有ることを見、下に衆生の度す可き有ることを見るが爲めなり。直に須らく一時に吐却して、然る後十二時中、行住坐臥、打成一片なるべし。一毛頭上に在りと雖も、寛きこと大千沙界の如く、鑊湯爐炭の中に居ると雖も、安樂國土に在るが如く、七珍八寶の中に居ると雖も、茅茨蓬蒿の下に在るが如し。這般の事、若し是れ通方の作者ならば、古人の實處に到つて、自然に力を費さず。他、人の他底に搆得すること無きを見て、復た自ら徵して云く、畢竟して如何。又た奈何ともすること得じ。自ら云く、楖栗橫に擔つて人を顧みず、直に千峯萬峯に入り去ると。這箇の意、又た作麼生。且らく道へ、什麼の處を指してか地頭と爲さん。妨げず、句中に眼有り、言外に意有つて、自ら起き自ら倒れ、自ら放ち自ら收むることを。豈に見ずや、巖陽尊者、路に一僧に逢ふ。拄杖を拈起して云く、是れ什麼ぞ。僧云く、不識。巖云く、一條の拄杖も亦た識らず。巖、復た拄杖を以て、地上に劄一下して云く、還つて識る麼。僧云く、不識。巖云く、土窟子も也た識らず。巖、復た拄杖を以て擔つて云く、會す麼。僧云く、不會。巖云く、楖栗橫に擔つて人を顧みず、直に千峯萬峯に入り去ると。古人這裏に到つて、什麼と爲てか肯て住せざる。雪竇頌有り、云く、誰ぞ、機に當る。擧するに嫌らざれば、亦た還つて希なり。峭峻を摧殘し、玄微を銷鑠す。重關曾つて巨いに闢く、作者歸を同じうせず。玉兎乍ち圓かに乍ち缺く、金烏飛ぶに似て飛ばず。盧老は知らず何れの處にか去る、白雲流水共に依依と。什麼に因つてか山僧は道ふ、腦後に腮を見ば與に往來すること莫れと。纔かに計較を作さば、便ち是れ黑山の鬼窟裏に活計を作さん。若し見得徹し、信得及せば、千人萬人、自然に羅籠するとも住らず、奈何ともすること得じ。動著搒著、自然に殺有り活有り。雪竇、他の意に、直に千峯萬峯に入り去ると道ふことを會して、方に始めて頌を成す。落處を知らんと要せば、雪竇の頌を看取せよ。云く。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢや。「諸人還つて蓮華峯庵主を裁辨得す麼」と、サー諸人、蓮華峯庵主を識得したか、サーどんな面ぢや、猫の面か猿の面か、ハッキと見分けたか。「方輿勝覽」と云ふ本に、「南康郡蓮華峯は盧山に在り」とある。又た「會元」では天臺と作す。「勝覽」を按ずるに、臺州天臺山には蓮華峯はない。マアこんな穿鑿は措いて、庵主の面を見たかサ。「脚跟未だ地に點せざること

在り」と、コリヤ今時と那邊と、正偏、平等不二に至らぬと、落ち付かぬと云ふやうなことなれども、サウでないぞ。是れ佛界にも止らず、魔界にも止らず、天堂にも地獄にも止らざる處、全く無住處の通人ぢや。圜悟のコノ語は、貴む可く愼むべきことぢや、實にハヤ贊歎も及ばぬぞ。「途路に力み得ざる」處で、一つ諸人見得せよ。活潑々、無住處の庵主と見ると、茶の給仕もならぬ。「國初の時、廬山の蓮華峯に在つて庵を卓つ。古人既に得道の後、茅茨石室の中にして、折脚鐺兒の內に野菜根を煮て、喫して日を過し、且つ名利を求めず」と、コレは宋の太祖卽位の年ぢや。ソノ頃行脚の事了つて、埴生の岩窟に入つて、聖胎長養して居つたと見える。丁度二十年來、五條橋下に淡泊を旨んじたやうにサ。「放曠として緣に隨つて一轉語を垂れて、且つ佛祖の恩を報じ、佛心印を傳へんことを要す」と、自得してサ、「緣に隨ふ」などとは賤しいぞ。ナゼそんなことを云ふのか。一轉語を垂れるなら、乞食禪法の根元を切るやうな言句を吐け。「纔かに僧の來るを見れば、更ち拄杖を拈じて云く、古人這裏に到つて、什麼と爲てか肯て住せざると。前後二十餘年、終に一人も答へ得る無し」と、コノ語は萬丈の鐵板嶂ぢや。二十年來誰れ一人答へるものはなかつた處の一問ぢや。併しサ、コノ拄杖子を識得すれば、一生參學の事畢んぬと云ふて、無佛、無衆生の處に止ると、二乘小果の穴ぢやぞ。「只だ這の一問、也た權有り實有り、照有り用有り」と、庵主の拄杖の語には、權實、照用有り、萬物悉く備ふるぞ。「若し也た他の圈纉を知らば、一揑を消せじ」と、ナニも面倒

くことはない、罠の掛け處、分廻しの中を知りや、コンナことは一揑がものもない。イヤハヤ、朝の間の茶の子ぢや。「儞且らく道へ、什麼に因つてか、二十年此の如く問ふ。既に是れ宗師の爲す處、何が故ぞ只だ一橛を守る」と、大善知識の爲人垂手とは云ひながら、ナンデ二十年もコンナ問をして、何時も拄杖にばかり喰い付いて居つたかサ。何程も仕方は有りさうなものぢやのに。「若し箇の裏に向つて見得せば、自然に情塵の上に向つて走らず」と、コノ處が解ればサ、悟を以つて差配はせぬぞ。「凡そ二十年中、多少の人有つてか、他の興めに平展し下語して、見解を呈して伎倆を做し盡す」と、二十年の間にや、チットは眼の明いた者もあつてからに、テッピラに、下語で所見を打開したものもあらうし、又た飛んだり跳ねたり働いて工夫した者もあらう。「設ひ箇の道ひ得る有るも、也た他の極則の處に到らず」と、庵主の奥座敷へは中々往けぬ。「況んや此の事は言句の中に在らずと雖も、言句に非れば卽ち辨ずること能はず。道ふことを見ずや、道、本と言無し、言に因つて道を顯す」と、コノ二十七字は不可ぬ、削つた方が好い。大燈國師も不可ぬと嫌ふたが、納もいやぢや。コノ大事は句中に無いと云ふが、イカニ敎外別傳、不立文字でもサ、ウンとでもスンとでも云はせて見なきや、學者の透不透を辨ずることはならぬぞと。コンナことは云はん方が好い。「所以に人を驗する端的の處」と、人を見るには一見便見、ハッキと見分けなきやならぬ。儒者にも、「一言は以つて智と爲し、二言は以つて不智と爲す」と云ふことがある。ぢやから、「口を下せば便ち知音。

古人、一言半句を垂るゝこと亦た他無し」と、一言で人の肚裏を見抜くぢや。「只だ爾が有るとを知るか、有るとを知らざるかを見んと要す」と、末後の大事、向上の一路を手に入れて居るかどうかを試さうとするぢや。「他、人の會せざるを見て、所以に自ら代つて云く、他の途路に力を得ざるが爲めなり」と、實にハヤ土根性の惡い、腦後の腮が顯はれたぞ。「看よ、他の道ひ得て、自然に理に契ひ機に契ふとを。幾くか當つて宗旨を失却せん」と、サー理や機に當てゝは見えぬが、評判するには先づカウ云ふ外はあるまい。ぢやから向上の宗旨を失却しないぢや。「古人道く、言を承けんには、須らく宗を會すべし、自ら規矩を立すると勿れ」と、コレは石頭和尚の言葉ぢや、「參同契」にある。サー言を承けんには、一言下で直に見て取つて、宗旨の大事を會するが好い。サウなくてからに、立枯共の只だ御座れ〳〵ぢや役に立たぬ。「如今只管に撞將し去つて、便ち了す」と、檢定がないと、ソラ、手前悟りへ押し付けて見て、計較し、揑合するぢや。「得ることは則ち得たり、爭奈せん、顧預儘侗なるとを」と、皆な空を以つて濟ますものぢやから、宗旨の分ちが知れぬぞ。「若し作家の漢に到つては、三要の語を將つて、空に印し、泥に印し、水に印して」と、學者を捻ぢ廻すにや、「三要の語」を以てするぢや。三要とは三印ぢや。「銀椀裏に雪を盛る」又は「白馬蘆花に入る」、全く沒蹤跡ぢや、跡はないぞ。先に本則を理會したは、早や泥に印したのぢや。「空」は上で、「泥」は中、「水」は下ぢや。空には迹もなく影もない、泥には迹を生じても漸く泯ぶ、又た水には迹はないが影は明かぢや。古刻の「人天眼目」の六には、宗門三印を出して居る、法眼宗の語ぢや。又た、石門の聰禪師、因に僧問ふ、一印、空に印す、是れ什麼の道理ぞと。門は答へて、舌、上齶を拄ふと。又た僧問ふ、一印、水に印す、是れ什麼の道理ぞ。門曰く、說話、聾人に對す。又た僧問ふ、一印、泥に印す、是れ何んの義ぞ。門云く、頭上棒を喫し、口裡喃々と。コノ三印の商量を見るが好い。「他を驗せば」と、三印計りぢやない、ソノ外に微妙の機を以て他を驗せよ。「便ち方木、圓孔に逗して、下落の處なきとを見ん」と、入頭の處はなく、實に落ち付き處はあるまい。「這裏に到つて、一箇の同得同證を討ぬるに、時に臨んで什麼の處に向つてか求めん」と、庵主と同腹中の者を討ぬるに、ナカ〳〵今時四海を一掃してもありはせぬ。「若し是れ有るとを知る底の人ならば、懷を開いて箇の消息を通ぜんに、何の不可か有らん」と、サー厨庫入の些子の大事を知り合つた者ならばサ、奥座敷で打明けて話し居らう。「若し人に遇はずんば、且く卷いて之れを懷にせん」と、知音に出合はなけりや仕方がない。雖則は三印ぢやから、知らぬ者は肯はぬ。「卷いて之れを懷にせん」とは「論語」にある語ぢや。「且らく儞諸人に問はん、拄杖子は是れ衲僧尋常用ふる底なり。什麼に因つてか却つて道ふ、途路に力を得ず」と、サー拄杖子を識得すれば、一生參學の事畢んぬと云ふがサ、拄杖とはナンぢや、本來の面目ぢや。ソレぢやのに、差別の途中の用に立たなんだト。ナゼ庵主はカウ云ふたぞ。「古人、此に到つて肯て住せず、其の實は、金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る」と、古人は拄杖子に尻を据え

ぬぞ。サハさりながら取り除けるともない、コレには仔細あるぞ。コレぢや拄杖が丸出しになる。カウ云はれては庵主も迷惑ぢやらう、コリャ恐らく圜悟の語ではあるまい。「其實」から已下の十字は削つた方が好い。「石室の善道和尚、當時沙汰に遭ふ」と、コリャ唐の武宗帝の會昌年中、佛法を沙汰せし時を云ふ。「常に拄杖を以つて衆に示して云く、過去の諸佛も也た恁麼、未來の諸佛も也た恁麼、現前の諸佛も也た恁麼」と、コノ和尚も又た拄杖を立てゝ爲人した。ヤレ過去の未來の現在のと、是れ何んの道理ぢや。各々それ〴〵見たかドウぢや。コリャ佛祖的々相承底を云ふたものぢや。「雪峯一日僧堂前に拄杖を拈じて衆に示して云く、這箇只だ中下根の人の爲めにす」と、是れ又た大いに錯るぞ。雪峯門下の秘曲を知らずんば、及びもないとぢや。「時に僧有り、出でゝ問ふて云く、忽に上上人の來るに遇はん時如何。峯拄杖を拈じて便ち去る」と、語尾に隨て廻つて解を生ずる馬鹿坊主がサ、私のやうな强い人が出て來たら、ドウしますかと問ふた。スルト雪峯は拄杖を拈じて這入つて了つたが、コリャ見事と云ふたのぢやと解つて置くまいぞ。「雲門云く、我は卽ち雪峯の打破して狼籍なるに似ずと。僧問ふ、未審、和尚如何。雲門便ち打つ」と、サー雪峯は何を打破したぞ、何を取り散したぞ。コリャ雪峯と雲門と、父子相ひ投ずる處ぢや。併し僧には解らなんだ。「大凡そ參問は也た許多の事無し。倆、外に山河大地有るとを見、內に見聞覺知有るとを見、上に諸佛の求む可き有るとを見、下に衆生の度す可き有るとを見るが爲めなり。直に須らく一時に吐却して、然る後十二時中、行住坐臥、打成一片なるべし」と、コノ一段は甚だ怪しい。コノ五十九字は削るが好い。コレでは圜悟も無佛の處に止つたナ。「一毛頭上に在りと雖も、寬きこと大千沙界の如く、鑊湯爐炭の中に居ると雖も、安樂國土に在るが如く、七珍八寶の中に居ると雖も、茅茨蓬蒿の下に在るが如し」と、コリャ且らく庵主の自在の義を明したのぢや。コノことはサ、三夜ばかり骨折ると合點するぞ。「這般の事、若し是れ通方の作者ならば、古人の實處に到つて、自然に力を費さず」と、コノ示衆も小悧巧な者ならば、一見便見ぢやがサ、イヤ〳〵、一時に吐却のナンのと云ふナリカバネでは合點行かぬぞ。「他、人の他底に搆得すると無きを見て、復た自ら徵して云く、畢竟して如何。又た奈何ともすると得じ」と、庵主の意が落付かぬから、自ら徵詰して、如何と云ふたとて、どうするとも出來ぬト。コノ評は面白くない。「自ら代つて云く、柳樑橫に擔つて人を顧みず、直に千峯萬峯に入り去る」と、コノ語を以つて、脚跟未點地と見たらば駄目ぢや。「這箇の意又た作麼生。且らく道へ、什麼の處を指してか地頭と爲さん」と、サー庵主の居らぬ場はドコぢや、ドコが隱坐地ぢや。「妨げず、句中に眼有り、言外に意有つて、自ら起き自ら倒れ、自ら放ち自ら收むるとを」と、コノ十八字も心元ない。庵主の自問自答か、擴げたり收めたり、獨りで勝手なことをする。「豈に見ずや、嚴陽尊者、路に一僧に逢ふ。拄杖を拈起して云く、是れ什麼ぞ、僧云く、不識。嚴云く、一條の拄杖も亦た識らず。嚴、復た拄杖を以つて、地上に劃一下して云く、還つて識る麼。僧云く、不識」と

嚴陽善信和尚は趙州の法嗣ぢや。コレは嚴陽和尚と一人の僧との商量ぢや。「嚴云く、土窟子も也た識らず」と、コリヤ祖師門下の大事を突き出した。各々コノ自由底を看よ。「嚴復た拄杖を以つて擔つて云く、會す麼。僧云く、不會。嚴云く、柳樔横に擔つて人を顧みず、直に千峯萬峯に入り去ると。古人這裏に到つて、什麼と爲てか肯て住せざる」と、ドコからドコまでも人に關はぬぞ。「雪竇頌有り、云く」と、コノ頌は至人不器と云ふ題ぢや。「誰ぞ」と、コリヤ何ぢや。是れ凡か是れ聖か、奇異の曲者ぢや。コノ一字、全體提示ぞ。「機に當る」と、ソレ〳〵に縁に應じ物に隨つて、十二時中、行住坐臥、教へざれども働く不器の的ぢや。サー上、諸佛無く、下、衆生無き處から向けて、一言半句を擧するに賺らざるものは是れぢや。「擧するに賺らざれば」と、コヽから擧するに錯らぬ者はない。「亦た還つて希なり」と、實に知音なしぢや。「峭峻を摧殘し」と、祖師の大事は峭峻でもない玄妙でもない。向上を削り、向下を削り、チットモ止まぬ。「峭峻」とは機鋒のことぢや。「玄微を銷鑠す」と、見知を打き潰すぢや。「重關曾つて巨いに闢く」と、サー袋の口を開けたぞ。「作者歸を同じうせず」と、佛祖の尻には付かぬ、如來の行く處に向つては行かぬぞ。雪峯は雪峯、巖頭は巖頭とテン〳〵コウぢや。「玉兎乍ち圓かに乍ち缺く」と、陰窮る處、直に陽爻を生ずるぞ。定つた途轍と云ふものはない。コレは位の定らざる貌ぢや。「金烏飛ぶに似て飛ばず」と、毎日々々日は西の方へ方へと行くやうぢやがサ、チットモ飛ばぬぢやテ。「盧老は知らず何れの處にか去る」と、カウ云ふ

雪竇汝もドコに生きて居るか。「白雲流水共に依依」と、總てソノ儘ぢやト。コノ頌は一字より七字に至る、コノ句法は玉屑の句法ぢや。コリヤ打成一片の境界ぢや。コレに就いては、色々な評判もあるがサ、コノ頌を以つて、本則に當て比べて見んと掛ると、大いに違ふぞ。全體コノ評は餘り事重くなつたから心元ない。「什麼に因つてか山僧は道ふ、腦後に腮を見ば與に往來すると莫れ」と、コリヤ好い評ぢや、コレには庵主も雪竇も取り挫かれる。圜悟の自負も道理ぢや。「纔かに計較を作さば、便ち是れ黑山の鬼窟裏に活計を爲さん」と、計較分別で庵主を見ば、悟の穴に落ち込むぞ。「若し見得徹し、信得及せば、千人萬人、自然に羅籠するとも住らず、奈何ともすること得じ」と、併し一つグッと見屆けてあらうぞならば、網にも翥にも掛つたものぢやない。「動着拶着、自然に殺有り活有り」と、動くも觸るも、一切衆生を利益せうとせまいと、殺すも活すも自由ぢや。「雪竇、他の意に、直に千峯萬峯に入り去ると道ふとを會して、方に始めて頌を成す。落處を知らんと要せば、雪竇の頌を看取せよ。云く」と、サー諸人シッカリ雪竇の頌を看取るが好い。頌には庵主を丸出しにしてあるぞ。

眼裏塵沙耳裏土　○懞憧三百檐○鶻鶻突突有什麼限○更有恁麼漢　千峯萬峯不肯住　○倆向什麼處去○且道是什麼消息　落花流水太茫茫　○好

箇消息○閃電之機徒勞佇思○左顧千生右顧萬劫　別起眉毛何處去○脚跟下更贈一對眼○元來只在這裏○還截得庵主脚跟麽○雖然如是也須到這田地始得○打云爲什麽只在這裏

【和訓】眼裏の塵沙耳裏の土。（○慄憧三百檐。○憁憁突突什麽の限りか有らん。○更に恁麽の漢有り。）千峯萬峯背て住せず。（○爾什麽の處に向ってか去る。○且らく道へ、是れ什麽の消息ぞ。）落花流水太だ茫茫。（○好箇の消息。○閃電の機徒に佇思するに勞す。○左顧千生、右顧萬劫。）眉毛を剔起すれば何れの處にか去る。（○脚跟下更に一對の眼を贈らん。○元來只だ這裏に在り。○還って庵主の脚跟を截得す麽。○然も是の如くなりと雖も、也た須らく這の田地に到って始めて得べし。○打って云く、什麽と爲てか只だ這裏に在る。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「眼裏の塵沙耳裏の土」と、コノ語はサ、文殊でも富樓那でも說き盡さぬ絕唱ぢや。諸の解は取らぬが好い。實に蓮華峯庵主は眼有つて曾つて見ず、耳有つて曾つて聞かざるスサマジイ怪者ぢや。

「千峯萬峯背て住せず」と、滅多矢鱈に行くがサ、ドコまで行くか。降つても照つても、脇目も振らずに行くか。サー其の行き處を見よ。コレを佛界魔界に止まらぬと見ると大違ひぞ。

「落花流水太だ茫茫」と、落花の處に居るか、流水の處に居るか。そこはかとなく知れぬ庵主ぢや。

「眉毛を剔起すれば何れの處にか去る」と、上の境界は蟲眼鏡でも見えぬ。サー庵主の行き先はドコぢや。「剔起」とはサ、少しでも目離しならと云ふと、又た眉を擧げるとも、或は世間で能く云ふツミキル（抓ねる）とも云ふことぢや。

着語　コレから圜悟の着語ぢや。

「眼裏塵沙耳裏土」――「慄憧三百檐」、幾重にも貼つた古わんぼうが、三百荷も有るか、ムサムサしい。「憁憁突突什麽の限りか有らん」、眼が潰れ、鼻が潰れ、モチヤクチヤして、まるで癩病患者のやうな、何んだか知れぬ、ムサクサしい庵主ぢやぞ。コレは混濁の意で、無分曉のことぢや。

「更に恁麽の漢有り」、コノやうなケチな者もあるか。

「千峯萬峯不肯住」――「爾什麽の處に向ってか去る」、エー此の坊主、ドコへ行せた。四弘の願輪に鞭打つて、盆にも正月にも關はずにサ、唐天竺へでも行かうとするのか。「且らく道へ、是れ什麽の消息ぞ」、全體コレは何んのよぢや、三度飛脚のやうにサ。

「落花流水太茫茫」――「好箇の消息」、圜悟も耐へ兼ねてカウ云ふた。落花やら流水やら知れたものぢやない。好い音信ぢやが怖い〳〵。「閃電の機徒に佇思するに勞す」、向はんと擬すれば卽ち背くぢや。僅に斯うと思ふたら白雲萬里ぢや。佛祖でも徒に佇思するぞ。「左顧千生、右顧萬劫」、

何程眺めても盡きぬ。たとひ虛空は盡くるとも、我が願は盡きぬ。

「剔起眉毛何處去」――「脚跟下更に一對の眼を贈らん」、雪竇お主の眼はドコへ遺つた。足の踵で見よ、三十三天から兎の毛の先まで見えるぞ。「元來只だ這裏に在り」、おゝ出來した〳〵。サー何處ぢや、鼻先を見よ。「還つて庵主の脚跟を截得す麼」、サー庵主を見たかドウぢや。庵主のホダゴシを打ち折る手並でなければ見えぬぞ。「然も是の如くなりと雖も、也た須らく這の田地に到つて始めて得べし」、併しサ、實際のとは、庵主の隱れ處まで來て見よ。「打して云く、什麼と爲てか只だ這裏に在る」、拂子で禪床を打してから云ふ。佛界にも魔界にも居らぬ庵主が、ナンとして此處に居たぞ。一眼和尚も云ふた、庵主の境界、什麼としてか只だ這裏に在ると。圓悟、一機を出してからに、老僧が手裡に在りと。イヤ〳〵違つた。

雪竇頌得甚好有轉身處不守一隅便道眼裏塵沙耳裏土此一句頌蓮花峯庵主衲僧家到這裏上無攀仰下絶己躬於一切時中如癡似兀不見南泉道學道之人如癡鈍者也難得禪月詩云常憶南泉好言語如斯癡鈍者還希法燈云誰人知此意令我憶南泉南泉又道七百高僧盡是會佛法底人唯有盧行者不會佛法只會道所以得他衣鉢且道佛法與道相去多少雪竇拈云眼裏着沙不得耳裏着水不得或若有箇漢信得及把得住不受人瞞祖佛言敎是什麼熱碗鳴聲便請高掛鉢囊拗折拄杖管取一員無事道人又云眼裏着得須彌山耳裏着得大海水有一般漢受人商量祖佛言敎如龍得水似虎靠山却須挑起鉢囊橫擔拄杖亦是一員無事道人復云恁麼也得不恁麼也得然後沒交涉三員無事道人中要選一人爲師正是這般生鐵鑄就底漢何故或遇惡境界或遇奇特境界到他面前悉皆如夢相似不知有六根亦不知有且暮直饒到這般田地切忌守寒灰死火打入黑漫漫處去也須是有轉身一路始得不見古人道莫守寒巖異草青坐却白雲宗不妙所以蓮花峯庵主道爲他途路不得力直須是千峯萬峯去始得且道喚什麼作千峯萬峯雪竇只愛他道柳標橫擔不顧人直入千峯萬峯去所以頌出且道向什麼處去還有知得去處者麼落花流水太茫茫落花紛紛流水茫茫閃電之機眼前是什麼剔起眉毛何處去雪竇爲什麼也不知他去處只如山僧道適來舉拂子且道卽今在什麼處爾諸人若見得與蓮花峯庵主同參其或未然三條椽下七尺單前試去參詳看

【和訓】雪竇頌し得て甚だ好し。轉身の處有つて、一隅を守らず。便ち道ふ、眼裏の塵沙耳裏の土と。此の一句、蓮華峯庵主を頌す。衲僧家這裏に到つて、上、攀仰無く、下、己躬を絶す。一切時中に於て、癡の如く、兀に似たり。見ずや、南泉道く、學道の人、癡鈍の如くなる者の也た得難しと。禪月の詩に云く、常に憶ふ南泉の好言語、斯の如く癡鈍なる者の還つて希なりと。法燈云く、誰人か此の意を知る、我をして南泉を憶はしむと。南泉又た道く、七百の高僧、盡く是れ佛法を會する底の人なり。

唯だ盧行者のみ有つて、佛法を會せず、只だ道を會す。所以に他の衣鉢を得と。且らく道へ、佛法と道と、相ひ去ること 多少ぞ。雪竇拈じて云く、眼裏に砂を着くること得じ、耳裏に水を着くること得じ。或は若し箇の漢有つて、信得及し、把得住して、人の瞬を受けずんば、祖佛の言教、是れ什麼の熱碗鳴聲ぞ。便ち請ふ、高く鉢囊を掛け、拄杖を拗折して、一員無事の道人なることを管取せよ。又た云く、眼裏に須彌山を着得し、耳裏に大海水を着得す。一般の漢有つて、人の商量を受く。祖佛の言教、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり、却つて須らく鉢囊を挑起し、横に拄杖を撥ふべし。亦た是れ一員無事の道人なり。復た云く、恁麼も也た得、不恁麼も也た得、然る後浸交渉。三員の無事道人の中、一人を選んで、師と爲さんことを要すと。正に是れ這般の生鐵鑄就す底の漢ならば、何が故ぞ、或は惡境界に遇ひ、或は奇特境界に遇ふ。他の面前に到つて、悉く皆な夢の如くに相ひ似たり。六根有ることを知らず、亦た且暮有るを知らず。直饒ひ這般の田地に到るも、切に忌む、寒灰死火を守つて、黑漫漫の處に打入し去ることを。也た須らく是れ轉身の一路有つて、始めて得べし。見ずや、古人道く、寒巖異草の青を守ること莫れ。白雲を坐却するも、宗、妙ならずと。所以に蓮華峯庵主道く、他の途路に力を得ざるが爲めなりと。直に須らく是れ千峯萬峯に去つて、始めて得べし。且らく道へ、什麼を喚んでか千峯萬峯と作さん。雪竇只だ、他の、柳絮横に撩つて人を顧みず、直に千峯萬峯に入り去ると道ふを愛して、所以に頌出す。且らく道へ、什麼の處に向つてか去る。却つて去處を知得する有り麼。落花流水太だ茫茫と。落花紛紛、流水茫茫。閃電の機、眼前是れ什麼ぞ。眉毛を剔起すれば何れの處にか去ると。雪竇什麼と爲てか也た他の去處を知らざる。只だ山僧が道ふ、適來拂子を擧するが如きんば、且らく道へ、即今什麼の處にかある。儞諸人、若し見得せば、蓮華峯庵主と同參。其れ或は未だ然らずんば、三條椽下、七尺單前に、試に去つて參詳して看よ。

【提唱】 コレから又た圜悟の評ぢや。「雪竇頌し得て甚だ好し。轉身の處有つて」と、轉身自在ぢや。「一隅を守らず」と、コリヤ向上でもないが、向下でもない。「便ち道ふ、眼裏の塵沙耳裏の土と。此の一句、蓮華峯庵主を頌す」と、好く蓮華峯庵主を頌したが、「納僧家這裏に到つて、上、攀仰無く下、己躬を絶す」と、諸聖を慕はず、一法の求む可き無く、又た貧窮の衆生らしいとはない。併し斯う云つては雪竇の氣には入るまい。「一切時中に於て、癡の如く、兀に似たり」と、四大五蘊碎けて了つて、「愚の如く魯の如し、唯だ能く相續するを、名けて主中の主と云ふ」と、コレデ無きや不可ぬ。「見ずや、南泉道く、學道の人、癡鈍の如くなる者の也た得難しと」、コレには思慮分別はないぢや。「禪月の詩に云く、常に憶ふ南泉の好言語、斯の如く癡鈍なる者の還つて希なり」と、禪月の山居七律二十首の中に、「閑行放意流水を尋ね、靜座隕を支へ落暉に到る。常に憶ふ南泉の好言語、斯の如く癡鈍なる者の還つて希なり」とある。禪月も見性の處もあり自負もあらうが、南泉とは月と鼈程の相違ぢや。「癡鈍」とはサ、コリヤへんてつもない肋骨か。「法燈云く、誰人か此の意を知る我をして南泉を憶はしむ」と、コレは法燈泰欽和尚と云ふて法眼の嗣ぢや。誠に有り難い人で、生れながらに佛法を會した人ぢや。コノ法燈は南泉の知音ぢやから、虛空は盡くるとも、我が願は盡きるとなき處を知る者は少いぞと云ふた。「南泉又た道く、七百の高僧、盡く是れ佛法を會する底の人なり。唯だ盧行者のみ有つて、佛法を會せず、只だ道を會す」と、六祖は佛法は會せなかつたが道を會した。コノ「只會道」の三字は實に塗毒鼓ぢや、南泉ぢやからこそ斯う云ふた。サー「道」とは這箇の境界ぢや。法と道とは全く別にして而も同じく、同じにして而も別ぢや。「所以に他の衣鉢を得と。且らく道へ、佛法と道と相ひ去ること多少ぞ」と、ぢやから五祖弘忍の衣鉢を嗣いだのぢやが、サ

ー佛法と道との間隔はドウぢや。「雪竇拈じて云く」と、コノ示衆は雪竇の守り刀ぢや。文によつて義を解してみやうぞならば、大凡そ三段に分れるぢや。第一段は入道實証底を明したのぢや。「眼裏に沙を着くると得じ、耳裏に水を着くると得じ」と、コレは一塵一法をも立せざる道人ぢや、佛を見ず衆生を見ず、一絲を掛けざる境界を云ふ。「或は若し箇の漢有つて、信得及し、把得住して、人の瞞を受けずんば、祖佛の言教、是れ什麼の熱碗鳴聲ぞ」と、コヽが大事な處と聞き受けてサ、釋迦が出ても達磨が出ても、振り向いても見ぬ。サウあらうぞならば、佛祖の言教も無用ぢや、グヅ〳〵ぢや。「便ち請ふ、高く鉢囊を掛け、拄杖を拗折して」と、萬事休罷して、行脚もいらぬ。「一員無事の道人なるとを管取せよ」と、瑠璃壜で餅を搗くやうな禪ぢや。併しコレにはマギレ者があるぞ。「又た云く」と、コレは第二段ぢや、差別自在底を明したぢや「眼裏に須彌山を着得し、耳裏に大海水を着得す」と、コリヤどうぢや。大修行底の人ならばサ、能見所見はない。卽ち庵主の境界ぢや。「一般の漢有つて、人の商量を受く。祖佛の言教、龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。却つて須らく鉢囊を挑起し、横に拄杖を擔ふべし」と、上件の神通妙用を具した人ならばサ、ソレ〳〵穿鑿してからに、祖師禪も來い、如來禪も來いと、實にハヤ嫌ふ底の法なく、ナンと出て來ても、オット心得たりと、七十二斤を自由自在に振り廻し、佛祖の言教を自由三昧に使ひ、行く段には鉢も拄杖を引つからげてサ、唐でも天竺でもサッサと行くぢや。「亦た是れ一員無事の道人なり」と、コリヤ見事なものぢや。「復た云く」と、コレは第三段ぢや、向上越格底を明したぢや。而も與麼なりと雖も、雪竇の這裏、錦に毒石を包むぞ。「恁麼も也た得、不恁麼も也た得、然る後沒交渉」と、上二員の途轍に于らず、サーどちらでも來い。誰れが好いか惡いかは問はぬ。コノ人の境界は佛魔都來沒交渉ぢや。ナンでも寄り付くものはない。「三員の無事道人の中、一人を選んで、師と爲さんとを要す」と、コノ三人の中で、誰れを師とするか、サー選んだが好いか、ソレとも選ばずに、三人おつくるめて行くか。コリヤ全く錦上に毒石を包むやうな語ぢや、怪我すな。「正に是れ這般の生鐵鑄就す底の漢ならば、何が故ぞ、或は惡境界に遇ひ、或は奇特境界に遇ふ。他の面前に到つて、悉く皆な夢の如くに相ひ似たり」と、已下は圜悟の評ぢや。コノやうな大丈夫の漢ならばサ、どうして氣に入らぬともあり、奇特のともあるぢや。上の道人の面前に到つてはサ、佛が出ても祖が出ても魔が出ても、目に止らぬ、皆な夢ぢや。「六根有るとを知らず、亦た旦暮有るとを知らず」と、頭が有るとも思はぬ、月の大小が有るとも思はぬ、盆も正月も思はぬ。學者は須らく一回はコノ田地に到らにや嘘ぢや。「直饒ひ這般の田地に到るも、切に忌む、寒灰死火を守つて、黑漫漫の處に打入し去るとを。也た須らく是れ轉身の一路有つて、始めて得べし」と、悟つた後も、コレが佛法ぢや、コレが悟りぢやのト構へるな。今時の立枯禪の古則公案に縋るな。然るに今時の禪學人は、寂寞無人相を守つてからに、八識田中の黑暗の中に居つて、棺木裡に瞳眼するぞ。實にハヤ哀れむべしぢや。

ソンナ處に居らずと、精出して骨折つて上求菩提、下化衆生と、千峯萬峯に去れ。「古人道く、寒巖異草の青を守ると莫れ。白雲を坐却するも、宗、妙ならず」と、大陽警玄の頌に、「叶路風に當る無中の道、寒巖異草の青を守ると莫れ。白雲を坐却するも、宗、妙ならず」とある。「寒巖」とはサ、人跡不到の處ぢや、鋸ヶ嶽か。ソンナ處にケツかつて、「異草の青」と、よい坊主の振りをするとサ。併し宗旨の妙は未だ〳〵〳〵。「所以に蓮華峯庵主道く、他の途路に力を得ざるが爲めなり」と、コノ意を以つて庵主を見やうとしても見えぬぞ。尻に目藥ぢや。「直に須らく是れ千峯萬峯に去つて、始めて得べし」と、上求菩提、下化衆生と同じく種智を圓にするぢや。「且らく道へ、什麼を喚んでか千峯萬峯と作さん」と、千峯萬峯は、吉野の奥や、飛彈の山中ばかりぢやない。東京の日本橋の眞只中ぢやぞ。サー見よ。「雪竇只だ、他の、柳樑横に擔つて人を顧みず、直に千峯萬峯に入り去ると道ふを愛して、所以に頌出す。且らく道へ、什麼の處に向つてか去る。却つて去處を知得する有り麼」と、「柳樑」の語と「途路」の語と緇素を分けて見ると、コノ庵主はスツキリ見える。庵主はドコへ行つたか、傳吉が脊戸に居るか、知つて居る者があるか。「落花流水太だ茫茫と。落花紛紛、流水茫茫」と、間髪を容れず、向はんと擬すれば卽ち背く。見やうとすれば見えぬぞ。「閃電の機、眼前是れ什麼ぞ。眉毛を剔起すれば、何れの處にか去る」と、サー是れ閃電か、是れ落花か。「雪竇什麼と爲てか也た他の去處を知らざる」と、雪竇はドウして庵主の居り處を知らぬ。「只だ山僧が道ふ」と、コノ五字は福本にはない。今ま コノ「道」の一字を削つて見よ。「適來拂子を擧するが如きんば、旦らく道へ、卽今什麼の處にかある」と、評唱して棄る處の拂子ぢや。サー此の南天棒が今ま一指を立てると、三千世界皆な一指ぢや。「儞諸人、若し見得せば、蓮華峯庵主と同參」と、サー此の一指を分明に會したならば、庵主と棒組ぢや。「其れ或は未だ然らずんば、三條椽下、七尺單前に、試に去つて參詳して看よ」と、三千世界を一顆の明珠と見ても、コノ庵主は見えぬぞ。諸人、サー參詳して看よ。

主語〔四智〕四種の無漏の智惠。大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、是れなり。〔化城〕方便門なり。法華七喩の一法華化城喩品に出づ。衆人、寶處に行かんとして、旅途の險惡に疲る。先達、之れを見て一計を立て、神通力を以つて假りに一の大城を化作して曰く、是れ寶處なりと。衆人乃ち喜び入りて休息す。先達、衆人の疲勞の去りたるを見て、今の化城を滅し、再び眞の寶處に至らしむとあり。是れ化城を方便教の悟りに、寶處を眞實教の悟りに喩ふ。〔ヅヽなし者〕やくざ者と云ふ意。〔三十餘り云々〕「三十餘り我れも狐の穴に住む、今ばかさるゝ人もことはり」と、大燈國師の歌。〔打つくぞなれば〕打ち破らうとする。〔折脚鐺兒〕破れ鍋のこと。〔聖胎長養〕悟後の修行を積むこと。〔廚庫人〕大入道卽ち僧のこと。〔石室の道善〕仮縣長髭の曠禪師の法嗣。仰山と同時代の人なり。後ち沙汰に遭ひ、行者となりて、潭州の石室に隱る。〔土窟子〕ムグラモチのこと。〔不器の的〕拘子定規に依らず、束縛せらるゝことなくして、自在な働きをするものを云ふ。〔富樓那〕富樓那彌多羅尼子と云ふ。佛十大弟子の一、說法第一と稱せらる。〔鶻鶻突突〕不二日く、「鶻は淵に作り、突は潭に作る。淵は胡骨の切、潭は徒骨の切、渾なり亂なり。潭は陀骨の切、渾濁なり」と。〔愚の如く魯の如し云々〕「寶鏡三昧」に出づ。〔種智〕四智を云ふ。〔三條椽下〕僧堂の單位の別稱。僧堂の坐位は、一人、竪六尺横三尺なり。故に横より見れば、頭上は棟三本の廣さに當る。依つて

僧堂各箇人の單位を、三條椽下と云ふ。〔七尺單前〕三條椽下と同意。寮位の竪は、六尺に單板の長さ一尺を加へて七尺となる故に七尺單前と云ふ。

第二十六則　百丈奇特事　【百丈奇特事】

舉僧問百丈如何是奇特事　○言中有響○句裏呈機○驚殺人○有眼不曾見丈云獨坐大雄峯　○凛凛威風四百州○坐者立者二俱敗缺　僧禮拜　○伶利衲僧　○也有恁麼人○要見恁麼事　丈便打　○作家宗師○何故來言不豐○令不虛行

【和訓】舉す。僧、百丈に問ふ、如何なるか是れ奇特事。（○言中に響有り、○句裏に機を呈す。○人を驚殺す。○眼有れども曾つて見ず。）丈曰く、獨坐大雄峯。（○凛凛たる威風四百州。○坐者立者二人俱に敗缺。）僧禮拜す。（○伶利の衲僧。○也た恁麼の人有り。○恁麼の事を見んことを要す。）丈便ち打つ。（○作家の宗師。○何が故ぞ來言豐かならざる。○令虛りに行せず。）

【提唱】コノ第二十六則、「百丈奇特事」の則は、百丈底、是れ五家の端的底の處を明すのぢや。コレには垂示がない。直に本則ぢや。

本則

「舉す。僧、百丈に問ふ、如何なるか是れ奇特事」と、コリャ驗主問ぢや。コノ僧只の奴でない、キモワタに毛の生えた奴ぢや。宗旨の生粹、コノ上もない有難い、貴いとはドウぢやと問ふて來た。併しサ、お主佛に代つて化を舉げたとて、什麼の奇特かあらんや。ソコデ此の僧、佛と答へても、祖と答へても、跳ね返す積りぢや。實にハヤいやな所問ぢや。

「丈云く、獨坐大雄峯」と、汝が眼には見えぬか、己が此處に坐つて居るは有難いとぢやと。サテサテしたゝかな傍若無人ぢや。百丈はコノ通り獨坐するが、即今諸人はドコに獨坐するぞ。南天棒云く、若し百丈にあらずんば、手忙脚亂せん。「大雄峯」とは百丈山のとぢや。

「僧禮拜す」と、一喝もせずサ、一掌もせずサ、禮拜したは曲者ぢや。恐る可き底ぢや。百丈を尻に敷いたぞ。

「丈便ち打つ」と、祖々傳來の些子、賞か罰か。打たいでは濟まぬ、お手柄〳〵。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「舉僧問百丈如何是奇特事」――「言中に響有り」、跳ね飛ばして呉れうと、奇特事と僅かな三字

ぢやが、意味は深い。自然と言中に響があるぢや。「句裏に機を呈す」、師家の膽を潰すつもりぞ。「人を驚殺す」、奇特ありさうに、「如何なるか是れ奇特事」と問ふて、天下の人を驚した。「眼有れども曾つて見ず」、コノ僧、曾つて師家有るを見ないぢや。師家ばかりぢやない、上、諸佛を見ず、下、衆生をも見ないぞ。

「丈云獨坐大雄峯」――「凛凛たる威風四百州」、佛でも祖でも寄り付かれぬ天晴な樣子ぢや。「坐者立者二り俱に敗缺」、危ない〳〵。ソノ儘ぢやッたら、一箇の棺材、兩箇の死漢ぢや。ドチラも地獄へ逆飛ぢや。

「僧禮拜」――「伶利の衲僧」、コノ僧のやうな伶利でなければ、獨坐大雄峯の語は引き出されぬ。「也た恁麼の人有り」、コノやうな坊樣があつてこそ、百丈の大機大用が知れる。「恁麼の事を見んとを要す」、目端の利く者ぢやないと、百丈の寸尺は見えぬぞ。

「丈便打」――「作家の宗師」、流石百丈ぢや、好く打つた。コリャ打つた處を讃歎したぢや。「何が故ぞ來言豐かならざる」、オヽ、左樣〳〵。初問から一癖ある奴ぢや。打たるゝがイヤならば、ナゼ奇特の事と問ふたぞ。「豐かならず」とは大ならずの義ぢや。「令虛りに行せず」、サスガ百丈は百丈ぢや。ムダ打ちはせぬ。

臨機具眼不顧危亡所以道不入虎穴爭得虎子百丈尋常如虎挿翅相似這僧也不避死生敢捋虎鬚便問如何是奇特事這僧也具眼百丈便與他擔荷云獨坐大雄峯其僧便禮拜衲僧家須是別未問已前意始得這僧禮拜與尋常不同也須是具眼始得莫教平生心膽向人傾相識還如不相識只這僧問如何是奇特事百丈云獨坐大雄峯僧禮拜丈便打看他放去則一時俱是收來則掃蹤滅跡且道他便禮拜意旨如何若道是好因甚百丈便打他作什麼若道是不好他禮拜有什麼不得處到這裏須是識休咎別緇素立向千峯頂上始得這僧便禮拜似捋虎鬚相似只爭轉身處賴值百丈頂門有眼肘後有符照破四天下深辨來風所以便打若是別人無奈他何這僧以機投機以意遣意他所以禮拜如南泉云文殊普賢昨夜三更起佛見法見各與二十棒貶向二鐵圍山去也時趙州出衆云和尚棒教誰喫泉云王老師有什麼過州禮拜宗師家等閑不見他受用處纔到當機拈弄處自然活鱍鱍地五祖先師常說如馬前相撲相似爾但常教見聞聲色一時坐斷把得定作得主始見他百丈且道放過時作麼生看取雪竇頌出云

【和訓】機に臨んで眼を具して、危亡を顧みず。所以に道ふ、虎穴に入らずんば爭でか虎子を得んと。百丈尋常、虎の翅を挿むが如くに相似たり。這の僧也た死生を避けず、敢て虎鬚を捋ぜて、便ち問ふ、如何なるか是れ奇特事と。這の僧也た眼を具す。百丈便ち他の與めに擔荷して云く、獨坐大雄峯と。其の僧便ち禮拜す。衲僧家、須らく是れ未問已前の意を別ちて、始

めて得べし。這の僧の禮拜、尋常と同じからず、也た須らく是れ具眼にして始めて得べし。平生の心膽をして、人に向つて傾け盡しむること莫れ。相識は還つて不相識の如し。只だ這の僧問ふ、如何なるか是れ奇特事と。百丈云く、獨坐大雄峯と。僧禮拜す。丈便ち打つ。看よ、他、放去する則んば、蹤を掃ひ跡を滅す。且らく道へ、他便ち禮拜する意旨如何。若し是れ好なりと道はゞ、甚に因つてか百丈便ち他を打つて、什麼か作さん。若し是れ不好なりと道はゝ、他禮拜す、什麼の不得の處か有らん。這裏に到つて、須らく是れ休咎を識り、緇素を別ちて、千峯頂上に立向して、始めて得べし。這の僧便ち禮拜す。虎鬚を持ずるに似て相似たり。只だ轉身の處を爭んせん。瓶ひに百丈の、頂門に眼有り、肘後に符有つて、四天下を照破し、深く來風を辨ずるに値ふ。所以に便ち打つ。若し是れ別人ならば、他を奈何ともすること無けん。這の僧機を以て機に投じ、意を以て意を造る。他、所以に禮拜す。南泉の云ふが如きんば、文殊普賢、昨夜三更、彌見法見を起して、各々二十棒を與へて、二鐵圍山に貶向し去らしめりと。時に趙州、衆を出でゝ云く、和尚の棒、誰をしてか喫せしめん。泉云く、王老師、什麼の過か有る。州、禮拜す。宗師家、等閑に他の受用の處を見ずんば、纔かに當機拈弄の處に到つて、自然に活鱍鱍地なり。五祖先師常に說く、馬前の相撲の如くに相似たり。儞但だ常に見聞聲色をして、一時に坐斷せしめて、把得定、作得主せば、始めて他の百丈を見んと。且らく道へ、放過する時作麼生。雪竇の頌出するを看取せよ。云く。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢや。「機に臨んで眼を具して、危亡を顧みず」と、眼のサヤのはづれた奴は、機に臨んで危みはない。ぢやから無暗矢鱈に尻込はせぬぢや。コノ句は「具眼の漢、機に臨んで危亡を顧みず」と直して見よ。「所以に道ふ、虎穴に入らずんば爭でか虎子を得ん」と、全く惡辣の手を經なければ宗旨は知れぬぞ。「百丈尋常、虎の翅を捕ひが如くに相ひ似たり。這の僧又た死生を避けず、敢て虎鬚を捋ぜて、便ち問ふ、如何なるか是れ奇特事と。這の僧也た眼を具す」と、百丈の峭峻なること、マルデ虎に翅のあるやうぢや。實に世界に類のない百丈ぢや。然るにサ、コノ坊主は、又た百丈のホテッ腹を見越してからに、命懸けで出て來て問ふた。實にハヤ命知らずぢや。あゝ恐ろしい奴ぢや。「百丈便ち他の與めに擔荷して云く、獨坐大雄峯と。其の僧便ち禮拜す。納僧家、須らく是れ未問已前の意を別ちて、始めて得べし」と、百丈、未問已前の意を知つてサ、僧の來問に背かぬぢや。兩手に分付して、グット勢を出した。吾れ爾に隱す無しぢや。「這の僧の禮拜、尋常と同しからず、也た須らく是れ具眼にして始めて得べし」と、コノ坊主が禮拜したのも、又た普通の者のやる仕事ぢやない。師學共に具眼の者ぢやないと、カウは行かぬぢや。「平生の心膽をして、人に向つて傾けしむると莫れ。相識は還つて不相識の如し」と、互に氣は許されぬ、中々帶紐は解くものではない。併しサ、又た隔てた處に不二の處があるぞ。百丈はトックに此の僧を見拔いてサ、默言つて禮拜を受けたは好いではないか。「眞の心は打ち解け置いて知らぬ顏すりや猶ほ可愛し」ぢや。「只だ這の僧問ふ、如何なるか是れ奇特事と。百丈云く、獨坐大雄峯と。僧禮拜す。丈便ち打つ。看よ、他、放去する則んば、一時に俱に是。收來する則んば、蹤を掃ひ跡を滅す」と、サヽ此の坊樣の問、百丈の答、坊樣の禮拜、百丈の打ち處を篤と看よ。實にハヤ、賓主双方、獨坐大雄峯と放去し、又た打つて收來する。花壇やぶりぢや、一向に痕を見せぬ。「且らく道へ、他便ち禮拜する意志如何。若し是れ好なりと道はゞ、甚に因つてか百丈便ち他を打つて、什麼か作さん。若し是れ不好なりと

道はゞ、他禮拜す、什麼の不得の處か有らん。這裏に到つて、須らく是れ休咎を識り、緇素を別ちて、千峯頂上に立向して、始めて得べし」と、サー何んでコノ僧が禮拜した。諸人ドウぢや。コノ禮拜、是か不是か。サー此の好し惡しが解つてこそ、向上の行履を得るぢや。佛祖も眼の及ばぬ處を百丈もコノ僧も眼下に見たぢや。「這の僧便ち禮拜す。虎鬚を捋づるに似て相ひ似たり。只だ轉身の處を爭んせん。賴ひに百丈の、項門に眼有り、肘後に符有つて、四天下を照破し、深く來風を辨ずるに値ふ。所以に便ち打つ。若し是れ別人ならば、他を奈何ともすると無けん」と、コノ坊樣の禮拜したは轉身自在ぢや、危ない處を好く働いたがサ、百丈の眼は奪命の神符を有つて居るから、コノ坊主の土根性の惡い樣子を見て取るや、直に打つたぢや。コリャ百丈なりやこそ、虎頭に騎つて虎尾を收めたのぢや。「這の僧、機を以つて機に投じ、意を以つて意を遣る。他、所以に禮拜す」と、コノ僧は機一杯、機澤山な奴ぢやが、機で機を隱くして一向に見せぬ。又た意一杯にやつたが、言句に出さず、意中で意中を知らせるぢや。コヽに語り盡されぬ譯がある。ぢやから禮拜したのぢや。實にコノ禮拜した處は意に云ひ盡されぬ處があるぞ。「南泉の云ふが如きんば、文殊普賢、昨夜三更佛見法見を起して、各々二十棒を與へて、二鐵圍山に貶向し去らしめり」と、コリャ南泉の語ぢや、コヽには用事はないが、「打つ」と云ふとがあるから引き出したのぢや。「佛見法見」と、悟りを取り出し、關鎖を取り出したからサ、ソコデ二十棒を喰はして、事理の處を明めさせた。南天棒云くぢや、コノ則には些子の仔細が有る、雪峯猶ほ悚然の氣があるぢや。「時に趙州、衆を出でゝ云く、和尙の棒、誰をしてか喫せしめん。泉云く、王老師、什麼の過か有る。州、禮拜す」と、文殊普賢に二十棒喰はせた處はサ、穿鑿せいでは叶はぬぞと趙州が問ふた。和尙、コナタの喫すべき底の棒、誰を賴んで喰はせるぞ。ソンナ喰ひ糟、誰が喰ふものでござる。南泉は、オヽ老僧が矢錯の落處を知るかドウぢやと。コノ語を錯つて會するな。ソコデ趙州は禮拜したが、コノ禮拜は、前の坊主が百丈に向つてした禮拜とは違ふかサ。コリャ好心ぢやない、又た南泉も好心を以て受けちや居ないぢや。「宗師家、等閑に他の受用の處を見ずんば、纔かに當機拈弄の處に到つて、自然に活鱍鱍地なり」と、總じて宗匠と云ふものはサ、滅多に鋒先は見せぬものぢや。父は子の爲めに隱し、子は父の爲めに隱すぢや、中々見えるものでない。併し少しでも機に觸れると當機覿面で、大活動をするがサ、少しもサシサハリはないぢや。「五祖先師常に說く、馬前の相撲の如くに相ひ似たり」と、コノ事は馬前の相撲のやうなもので、勝つか負けるか、一手合せぢや。一見便見、擬議すれば卽ち失すで、ウジ〳〵すると、踏み殺されるぞ、手早くなければならぬ。「爾但だ常に見聞聲色をして、一時に坐斷せしめて、把得定、作得主せば、姑めて他の百丈を見ん」と、今日事の上に於てサ、內、見聞覺知なく、外、山河大地を見ず。一切の物に就いて、ソレを打つ碎いて手に入れてからに、各々手前のものにするであらうぞならば、聲色裡に安眠高臥するぢや。ソノ時始めて百丈を見るとが出

來るぞ。「且らく道へ。放過する時作麼生。雪竇の頌出するを看取せよ。云く」と、五祖の云ふ處は皆な把住ぢやから、サウ行かずにサ、取りハダケたら、サーどうするか、雪竇の頌を看よ。

祖域交馳天馬駒　○五百年一間生○千人萬人中有一箇半箇○子承父業化門舒卷不同途○已在言前○渠儂得自由○還他作家手段電光石火存機變○劈面來也○左轉右轉○還見百丈爲人處也無堪笑人來捋虎鬚○好與三十棒○重賞之下必有勇夫○不免喪身失命○放過閻黎一着

【和訓】祖域交馳す天馬駒。（○五百年に一たび間生す。○千人萬人の中一箇半箇有り。○子は父の業を受く。）化門の舒卷途を同じらせず。（○已に言前に在り。○渠儂自由を得たり。○他の作家の手段に還す。）電光石火機變を存ず。（○劈面來也。○左轉右轉。○還つて百丈爲人の處を見るや也た無や。）笑ふに堪へたり人の來つて虎鬚を捋づることを。（○好し三十棒を與ふるに。○重賞の下には必ず勇夫有り。○喪身失命を免れず。○閻黎に一着を放過す。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「祖域交馳す天馬駒」と、コリヤ法戰場の働き、千變萬化、縱横自在なるを云ふ。「天馬駒」のとは「漢書」の西域傳に出て居るが、コヽでは百丈に比す。百丈も法戰場に身を投げ出してからに、悟の底を拔いて、逐ひつ捲ッつ、研り磨くは、只だ好い者が得たさぢや。

「化門の舒卷途を同じらせず」と、サー建化門中へ躍り出て、締めつ緩めつ、學者を逐ひつ捲ッつ佛道を建立するぢや。併しコレは歷代の祖師孰れも手段が違ふ、佛祖の途轍に隨はない。人眞似では役に立たぬぞ。

「電光石火機變を存ず」と、コノ僧天晴れぢやがサ、百丈面前では可笑しいぞ。併しコノ句は僧の方でなく、百丈に掛けて見るも好い。卽ち百丈の頓機頓發の働きを云ふたものぢや。

「笑ふに堪へたり人の來つて虎鬚を捋づることを」と、百丈面前に至つては、笑ふに堪へたものぢやが、コノ僧、虎穴に入るとは、天晴れ愛い奴ぢや。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「祖域交馳天馬駒」――「五百年に一たび間生す」、眞の池月、磨墨は、五百年でなくては出ない。黃河が五百年に一度澄む時は賢人世に出で、千年に一度澄む時は聖人出世すと云ふ。生れながらに知るは聖人ぢや、學んで知るは賢人ぢや。コヽでは百丈を以て賢人に喩へたぢや。コノ語は「孟子」から出て居る。「千人萬人の中一箇半箇有り」、ソレもソノ筈サ、百丈のやうな者は稀れぢやから。

「子は父の業を承く」、百丈、佛祖不傳の妙を繼いだ。

「化門舒卷不同途」――「已に言前に在り」、云ふにや及ぶと、一言未だ發せざる以前に立つて働く。「渠濃自在を得たり」、コノ和朗は流石手者ぢや。「他の作家の手段に還す」、ソレは百丈、ソナタ次第ぢや。已はならぬぞ。

「電光石火存機變」――「劈面來也」、青龍刀を按ずるの機ぢや。間、髪を容れず、出でて禮拜したは見事な働きぢや。「左轉右轉」、師家が師家なら、學者も學者ぞ。「還つて白丈爲人の處を知るや也た無や」、サリながら、百丈の打つた處を知るかドウか。己れ達せんと欲せば、先づ人を達せしめよぢや。

「堪笑人來捋虎鬚」――「好し三十棒を與ふるに」、百丈、面が憎い程にサ。「重賞の下には必らず勇夫有り」、流石百丈下程有つて、コノ僧の如き者が出たぢや。コレは「三略」の語ぢや。衲僧門下の「重賞」は拄杖ぢや。「喪身失命を免れず」、併しズダ〳〵になるのも關はぬか。「闍黎に一着を放過す」、コノ僧ばかりか、雪竇お主にも喫はせたい。ナゼならば、眼の切れ上つた頌ぢやからサ。

雪竇見得透方乃頌出天馬駒日行千里横行竪走奔驟如飛方名天馬駒雪竇頌百丈於祖域之中東走向西西走向東一來一往七縱八横殊無少礙如天馬駒相似善能交馳方見自由處這箇自是得他馬祖大機大用不見僧問馬祖如何是佛法大意祖便打云我若不打爾天下人笑我去在又問如何是祖師西來意祖云近前來向爾道僧近前祖劈耳便掌云六耳不同謀看他恁麼得大自在於建化門中或卷或舒有時舒不在卷處有時卷不在舒處有時卷舒俱不在所以道同塗不同轍此頌百丈有這般手脚雪竇道電光石火存機變頌這僧如擊石火似閃電光只在些子機變處巖頭道却物爲上逐物爲下若論戰也箇箇立在轉處雪竇道機輪曾未轉轉必兩頭走若轉不得有什麼用處大丈夫漢也須是識些子機變始得如今人只管供他欺被他穿却鼻孔有什麼了期這僧於電光石火中能存機變便禮拜雪竇道堪笑人來捋虎鬚百丈似一箇大蟲相似堪笑這僧去捋虎鬚

【和訓】雪竇見得透して方に乃ち頌出す。天馬駒は日に行くこと千里、横行竪走、奔驟すること、飛ぶが如くなるを、方に天馬駒と名く。雪竇、百丈の、祖域の中に於て、東に走つて西に向ひ、西に走つて東に向ひ、一來一往、七縱八横、殊に少礙無きこと、天馬駒の如くに相似たり。善能く交馳して、方に自由の處を見ることを頌す。這箇、自ら是れ、馬祖の大機大用を得たり。見ずや、僧、馬祖に問ふ、如何なるか是れ佛法の大意。祖、便ち打つて云く、我れ若し爾を打たずんば、天下の人、我を笑ひ去ること在らん。又た問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。祖云く、近前來、爾に向つて道はん。僧、近前す。祖、劈耳に便ち掌して云く、六耳、謀を同じうせずと。看よ、他恁麼に大自在を得ることを。建化門中に於て、或は卷、或は舒、有る時は舒べて卷處に在らず、有る時は卷いて舒處に在らず。有る時は卷舒俱に在らず。所以に道ふ、塗を同じうして轍を同じうせずと。此れは百丈、這般の手脚有ることを頌す。雪竇道く、電光石火機變を存ずと。這の僧、擊石火の如く、閃電光に似て、

只だ些子の機變の處在ることを頌す。巌頭道く、物を却くるを上と爲し、物を逐ふを下と爲す。若し戯を論ぜば、箇箇、轉處に立在すと。雪竇道く、機輪曾つて未だ轉ぜず、轉ずれば必ず兩頭に走ると。若し轉不得ならば、什麼の用處か有らん。大丈夫の漢、也た須らく是れ些子の機變を識つて、始めて得べし。如今の人、只管に他に欺を俱して、他に鼻孔を穿却せらる。什麼の了期か有らん。這の僧、電光石火の中に於て、能く機變を存して、便ち禮拜す。雪竇道く、笑ふに堪へたり人の來つて虎鬚を捋づることをと。百丈、一箇の大蟲に似て相ひ似たり。笑ふに堪へたり、這の僧去つて虎鬚を捋づるとを。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢや。「雪竇見得透して、方に乃ち頌出す。天馬駒は日に行くと千里、横行竪走、奔驟すると、飛ぶが如くなるを、方に天馬駒と名く。雪竇、百丈の、祖域の中に於て、東に走つて西に向ひ、西に走つて東に向ひ、一來一往、七縱八横、殊に少礙無きと、天馬駒の如くに相ひ似たり。善能く交馳して、方に自由の處を見るとを頌す。這箇、自ら是れ、馬祖の大機大用を得たり」と、上來、件の問答を見るに、百丈は天馬駒のやうに、走らうと飛ばうと、實に自由自在ぢや。サナガラ馬祖のやうぢや。「見ずや、僧、馬祖に問ふ、如何なるか是れ佛法の大意。祖、便ち打つて」と、只だ這の些子、西天の四七、東土の二三の傳來底ぢや。「云く、我れ若し倆を打たずんば、天下の人、我を笑ひ去ると在らん」と、是れ佛祖傳來の秘曲。打ちさへすれば好いナ。「又た問ふ、如何なるか是れ西來意。祖云く、近前來、倆に向つて道はん。僧、近前す。祖、劈耳に便ち掌して云く、六耳、謀を同じうせずと。看よ、他、恁麼に大自在を得るとを」と、馬祖が、モット近くへ來いと云ふて來るや否や、耳へ掛けて横面をビッシャリ、了簡が皆な違ふぞト。斯う云ふ大自在な働きはドウぢや。「建化門中に於て、或は卷、或は舒。有る時は舒べて卷處に在らず、有る時は卷いて舒處に在らず。有る時は卷舒俱に在らず」と、大衆を接得する上に於ては、譽める中にも謗るあり、謗る中にも譽めるとがある。中には又た、ウンだでもッンだでもない默の儘もある。道ひ得るも南天棒、道ひ得ざるも南天棒ぢや。茲の「不在卷處」と、「不在舒處」の「不」は双方削るが好い。「所以に道ふ、塗を同じうして轍を同じうせずと。此れは百丈、這般の手脚有るとを頌す」と、ぢやから如來の行く處に向つては行かぬ。卷舒は古來よりの大法ぢやが、用ふる處はソレ〳〵違ふぞ。「雪竇道く、電光石火機變を存ずと。這の僧、擊石火の如く、閃電光に似て、只だ些子の機變の處在るとを頌す」と、コノ僧、「奇特事」と問ふ處素早い、一機を含んだ。コリヤ大體の者ではない。「巌頭道く、物を却くるを上と爲し、物を逐ふを下と爲す」と、「却くる」は轉却ぢや、取つて廻すぢや。「逐ふ」は付き廻はされるぢや。コノ次へ「又曰」の二字を加へて見るが好い。「若し戰を論せば、箇箇、轉處に立在す」と、サー戰ひでも、逃げる時には逃げるに勝があるぞ。敵の働きに依つて謀を下すぢや。「雪竇道く、機輪曾つて未だ轉ぜず、轉ずれば必らず兩頭に走ると。若し轉不得ならば、什麼の用處か有らん。大丈夫の漢、也た須らく是れ些子の機變を識つて、始めて得べし」と、ビクともせぬ處から、右手に來れば弓手に受け、弓手に來れば右手に受くぢや。ナンでも悟りを大事に抱へて居たでは役に立つ

ものぢやない。大丈夫の者は悟りを放下し、脱洒自在を得るでなくちやならぬぞ。「如今の人、只管に他に欺を供して、他に鼻孔を穿却せらる。什麼の了期か有らん」と、今時の人は、只だ白狀をマケ出すに依つて、飛んでもない目に逢ふて、何時までも悟の穴から這ひ出すことが出來ないのぢや。「這の僧、電光石火の中に於て、能く機變を存して、便ち禮拜す」と、コリヤ機變自在を得て居るから、禮拜して勝を取つたぢや。「雪竇道く、笑ふに堪へたり人の來つて虎鬚を捋づるとをと。百丈、一箇の大蟲に似て相ひ似たり。笑ふに堪へたり、這の僧去つて虎鬚を捋づるとを」と、百丈と云ふ蟲は、ナマで佛を嚙み、祖を嚙み、悟を嚙む奴ぢやわい。

【注釋】〔一掌〕一打なり。〔天馬駒〕「漢書」西域傳に云く、「大宛國に高山有り、其の上に馬有り、得る可からず。因に五色の母馬を取りて其の下に置き、與に集めて駒を生ましむ。皆な汗血、因つて天馬子と號す。馬の二歳を駒と曰ふ。」

第二十七則　雲門體露金風

【雲門體露金風】

垂示云、問一答十、舉一明三、見兎放鷹、因風吹火、不惜眉毛、則且置、只如入虎穴時如何試舉看。

【和訓】垂示に云く、一を問へば十を答へ、一を擧ぐれば三を明らむ。兎を見て鷹を放ち、風に因つて火を吹く。眉毛を惜まざることは則ち且らく置く。虎穴に入る時の如きんば如何。試に擧す、看よ。

【提唱】コレは第二十七則、「雲門體露金風」ぢや。コノ則は、百丈獨坐底、是れ雲門の言句にて、彌よ明了なることを明すのぢや。雲門がナゼ合頭の語を吐いたぞ。コヽが百則の正味ぢや。

「垂示に云く、一を問へば十を答へ、一を擧ぐれば三を明らむ」と、コリヤ作家と作家との相見ぢや。眼の明いた宗匠なら、無量の法財を貯へてからに、人を竢つ。ぢやから學人の來機を見て取つて、山雲滿目の情一杯に悟り盡すぢや。「兎を見て鷹を放ち」と、雲雀に鶴を取る鷹は放さぬ。相手を見てソレ〳〵に働く、根機相應に接得するぞ。「風に因つて火を吹く」と、得手に帆を上けて、力をも用ひず、方便して自由自在に接得する。「眉毛を惜まざるとは則ち且らく置く」と、下化衆生の師家の手前は且らく置く。餘り說き過ぎると、八則の翠巖のやうに眉毛がなくなるぞ。ぢやから師家のとはお預りぢや。「只だ虎穴に入る時の如きんば如何。試に擧す、看よ」と、サー師家の虎穴に

入つて、虎兒を求むる時はドウぢや。ソレを見たきや、サー次ぎ下の本則を看よ。

舉僧問雲門樹凋葉落時如何 ○是什麼時節 ○家破人亡 ○人亡家破 雲門云體露金風 ○撐天拄地 ○斬釘截鐵 ○淨躶躶赤洒洒 ○平步青霄

【和訓】舉す。僧、雲門に問ふ、樹凋み葉落つる時如何。（○是れ什麼の時節ぞ。○家破れて人亡し。○人亡して家破る。）雲門云く、體露金風。（○天を撐へ地を拄ふ。○斬釘截鐵。○淨躶躶赤洒洒。○青霄を平歩す。）

【提唱】

本則 コレから本則ぢや。

「舉す。僧、雲門に問ふ、樹凋み葉落つる時如何」と、佛を問はず、祖を問はず、コリヤ全體ナンのとぢや。コノ坊主、雲門宗をトックに呑み込んでサ、目潰を打つて、雲門を取つて伏せんと掛つた。煩惱の葉、無明の根などは、此の方には一トッパもないが、コレは何んでえすナ。「雲も無く月も桂も木も枯れて拂ひ果てたるうはの空かな」ぢや。是れコノ句面は學海の波瀾、一夜に乾く處ぢや。併し別に陷虎の機があるぞ。コレをサ、能見所見をボッ越えて、皮膚脱落の處と、天下一統に見るぢやが、べらぼうナ。

「雲門云く、體露金風」と、コレを秋の景色と見たら、雲門の飯は喰はれぬ。勝負の知れぬ處を雪賓も頭した。コレが如何讀まるゝものかサ。老僧も三度蹉過した、恐ろしい。ドコもカシコもすき透つた、花も紅葉も丸裸體。是れ脱體現成ぢや。實にハヤ、龍吟じて雲起り、虎嘯いて風生ずで、勝負の知れぬ處をやつた。明中蹤を見ず、徧界曾つて藏さず。サー是れ合頭の句にして、而も妙處が有る。大應國師の入唐したも、只だ此の些子を傳へ來つたぢや。

著語 コレから圜悟の著語ぢや。

「舉僧問雲門樹凋葉落時如何」――「是れ什麼の時節ぞ」、コリヤ何時のとか。コノ下語は總て好くない。コレでは拂ひ果てたる上の空と見るぞ。「家破れて人亡し」、皮膚脱落して、髑髏前と見ては、コノ坊主の茶の給仕も出來ぬぞ。併しサウ云ふやうに見られたがつて、コノ僧は問ふて來たのぢや。「人亡して家破る」と、ナンとも物が云はれぬ、憐れな奴ぢや。

「雲門云體露金風」――「天を撐へ地を拄ふ」、「體露金風」の當位、太虛充滿、皆な合頭ぢや。コノ下語も拙い。「斬釘截鐵」、切れ〳〵、切つて〳〵切り拂へ。イヤ〳〵、併しサウ計りでもない。「淨躶躶赤洒洒」、コリヤ合頭ぢや。圜悟の語にあらずとの古人の評ぢや。「青霄に平歩す」、佛眼も及ばざる處、續く者はあるまい。體露金風に當つては、面出しもならぬぞ。

若向箇裏薦得始見雲門爲人處其或未然依舊只是指鹿爲馬眼瞎耳聾誰人到這境界且道雲門爲復是答他話爲復是與他酬唱若道答他話錯認定盤星若道與他唱和且得沒交涉既不恁麼畢竟作麼生儞若見得透衲僧鼻孔不消一揑其或未然依舊打入鬼窟裏去大凡扶豎宗乘也須是全身擔荷不惜眉毛向虎口橫身任他橫拖倒拽若不如此爭能爲得人這僧致箇問端也不妨嶮峻若以尋常事看他只似箇管閑事底僧若據衲僧門下去命脈裏覷時不妨有妙處且道樹凋葉落是什麼人境界十八問中此謂之辨主問亦謂之借事問雲門不移易一絲毫只向他道體露金風答得甚妙亦不敢辜負他問頭蓋爲他問處有眼答處亦端的古人道欲得親切莫將問來問若是知音底舉着便知落處儞若向雲門語脈裏討便錯了也只是雲門句中多愛惹人情解若作情解會末免喪我兒孫雲門愛恁麼騎賊馬趣賊不見僧問如何是非思量處門云識情難測這僧問樹凋葉落時如何門云體露金風句中不妨把斷要津不通凡聖須會他舉一明三舉三明一儞若去他三句中求則腦後拔箭他一句中須具三句函蓋乾坤句隨波逐浪句截斷衆流句自然恰好雲門三句中且道用那句接人試辨看頌曰

【和讃】若し箇裏に向つて薦得せば、始めて雲門爲人の處を見ん。其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて、只だ是れ鹿を指して馬と爲さん。眼瞎し、耳聾す。誰人か這の境界に到らん。且らく道へ、雲門、復た是れ他の話に答ふとや爲さん、復た是れ他と酬唱すとや爲さん。若し他の話に答ふと道はゞ、錯つて定盤星を認む。若し他と唱和すと道はゞ、且得沒交涉。既に恁麼ならずんば、畢竟して作麼生。儞若し見得透せば、衲僧の鼻孔、一揑を消せじ。其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて鬼窟裏に打入し去らん。大凡そ宗乘を扶豎せんには、也た須らく是れ全身擔荷して、眉毛を惜まず、虎口に向つて身を横へて、他の横に拖き倒に拽くに任すべし。若し此の如くならずんば、爭でか能く人の爲めにし得ん。這の僧、箇の問端を致す、也た妨げず嶮峻なることを。若し尋常の事を以て他を看ば、只だ箇の閑事を管する底の僧に似ん。若し衲僧門下に據らば、命脈裏に去つて覷る時は、妨げず妙處有ることを、且らく道へ、樹凋み葉落つ、是れ什麼人の境界ぞ。十八問の中、此れ之れを辨主問と謂ふ、亦た之れを借事問と謂ふ。雲門、一絲毫を移易せず、只だ他に向つて道ふ、體露金風と。答へ得て甚だ妙、亦た敢て他の問頭に辜負せず。蓋し他の問處に眼有るが爲めに、答處も亦た端的なり。古人道く、親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふこと莫れ。若し是れ知音底ならば、舉着せば便ち落處を知らん。儞若し雲門の語脈裏に向つて尋ねば、便ち錯り了れり。只だ是れ雲門の句中に、多く人の情解を惹くことを愛す。若し情解の會を作さば、未だ免れず、我が兒孫を喪することを。雲門恁麼に賊馬に騎つて賊を趣ふことを愛す。見ずや、僧問ふ、如何なるか是れ非思量の處。門云く、識情測り難しと。這の僧問ふ、樹凋み葉落つる時如何。門云く、體露金風と。句中妨げず、要津を把斷して、凡聖を通ぜざることを。須らく、他の一を舉ぐれば三を明め、三を舉ぐれば一を明むることを會すべし。儞若し他の三句の中に去つて求めば、腦後に箭を拔かん。他の一句の中、須らく三句を具すべし。函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句、截斷衆流の句、自然に恰好なり。雲門三句の中、且らく道へ、那句を用ひてか人を接せん。試に辨じて看よ。頌に曰く。

【提唱】コレから圜悟の評ぢや。「若し箇裏に向つて薦得せば、始めて雲門爲人の處を見ん」と、「體露金風」と、コリヤ恐ろしい、すさまじい。「其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて、只だ是れ鹿を指して馬と爲さん」と、「史記」にある趙高が秦王二世に向つてサ、鹿を指して馬と云ふたやうに、

取り違へてケッカル。「眼瞎し、耳聾す」と、ッノ及ぶべきでない雲門の答處を指したぢやがサ、コノ評ぢや見えぬぞ。「誰人が這の境界に到らん」と、誰れが「體露金風」の當體に到らうぞ。「且らく道へ、雲門、復た是れ他の話に答ふとや爲さん、復た是れ他と酬唱すとや爲さん」と、他と組んづ轉んづしたと云ふのか。「若し他の話に答ふと道はゞ、錯つて定盤星を認む。若し他と唱和すと道はゞ、且得沒交渉。既に恁麼ならずんば、畢竟して作麼生」と、合頭の語と見たら錯るぞ。安悟りせまいぞ。「爾若し見得透せば、衲僧の鼻孔、一揑を消せじ」と、全く雲門宗を見得透したならばサ、一ト揑りがものもない。鬼が煎餅を嚙むやうぢや。「其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて鬼窟裏に打入し去らん」と、若しサウでないならばサ、鬼窟裏の眞暗闇に陷ち込むぞ。「大凡そ宗乘を扶豎せんには、也た須らく是れ全身擔荷して、眉毛を惜まず、虎口に向つて身を横へて、他の横に拖き、倒に拽くに任すべし」と、宗乘を扶豎するには、只は擔はれぬ。肩身に引ッ掛けて、我れ獨り引ッ擔がんと、難透を透過せよ。サウして師家は身を野へ捨てゝ、死人になつて學者の喰ひ物にするぞ。ぢやから學者も喪身失命を顧みず、室内へ踏ん込んで骨を折らねばならぬ。「若し此ゝ如くならずんば、爭でか能く人の爲めにし得ん。這の僧、箇の問端を致す、也た妨げず嶮峻なるとを」と、腫れものに觸るやうに、ビク〳〵して居つては、ドウしてコノ坊主のやうに、氷のやうな九寸五分を以つて、雲門の胸元に突き當てられうか。「若し尋常の事を以つて他を看ば、只だ箇の閑事を管する底の僧に似ん」と、サー本則を、秋のととばかり思ひ、知見が盡きたと見たならば、願人坊主も同じとぢや。役に立たぬぞ。「若し衲僧門下に據らば、命脈裏に去つて覷る時は、妨げず妙處有るとを」と、併しサ、祖師門下の大事な處から見れば、コノ問處に妙があるぞ。「且らく道へ、樹凋み葉落つ、是れ什麼人の境界ぞ」と、身心脱落、脱落身心と解いたら、ドウかサ。「十八問の中、此れ之れを辨主問と謂ふ、又た之れを借事問と謂ふ」と、コレを辨主問と云ふは、圜悟無理ぢや。コノ南天棒は呈解問とするぞ。「雲門、一絲毫を移易せず、只だ他に向つて道ふ、體露金風と。答へ得て甚だ妙、亦た敢て他の問頭に辜負せず」と、コノ僧の化けた處に、少しも品を變へずに、「體露金風」と。向上にあらず、向下にあらず、サテ〳〵怒ろしい答ぢや。「蓋し他の問處に眼あるが爲めに、答處も亦た端的なり」と、コノ「眼」はサ、今時を見ず那邊を見ず、眞ッ黑い。答處も亦た一粒金丹ぢや。答處が何時も一つやうでは面白うない。「古人道く」と、コレは首山省念禪師ぢや。「親切を得んと欲せば、問を將ち來つて問ふと莫れ。若し是れ知音底ならば、擧着せば便ち落處を知らん」と、コレは前にも云ふたとがある。「爾若し雲門の語脈裏に向つて尋ねば、便ち錯り了れり」と、ヤレ〳〵猫のヘドぢやもの。「只だ是れ雲門の句中に、多く人の情解を惹くとを愛す。若し情解の會を作さば、未だ免れず、我が兒孫を喪するとを」と、サー愛したでもなけれども、情解を引かせる樣にしたが毒氣と云ふのぢや。コリヤ人を驗さん爲めぢや。「雲門恁麼に賊馬に騎つて賊を趣ふとを愛す」と、雲門と云ふ奴

は手に負へぬ、相手の尻馬に乘つてからに、ソノ鎗を奪つて、突き落すやうなことをする、實に怒ろしい。「見ずや、僧問ふ、如何なるか是れ非思量の處」と、コノ坊主もサ、ハメ手を打つて來た。「非思量」とはキツィ思量ぢや。「門云く、識情測り難し」と、サテ〳〵魂膽を知らねばサ。コリヤ雲門宗の妙處、人の情解を惹く處ぢや。「這の僧問ふ、樹凋み葉落つる時如何、門云く、體露金風と。句中妨げず、要津を把斷して、凡聖を通ぜざるとを」と、雲門の答處、知解を用ひず、實に佛祖でも齒も立たぬ。「須らく他の、一を擧ぐれば三を明め、三を擧くれば一を明むるとを會すべし」と、サ一一句に三句を具すぢや。コリヤ雲門の宗旨を會すると分明ぢや。「倆若し、他の三句の中に去つて求めば、腦後に箭を拔かん」と、コノ已下は好くない、南天棒は嫌ひぢや、大方火後の錯亂ぢやらう。併し有るから讀んで置かう。急處に射られた矢を拔いて、雲門を一箭に射當てんとは、つかもない。却て雲門に眞只中を射拔かれん。「他の一句の中、須らく三句を具すべし。函蓋乾坤の句、隨波逐浪の句、截斷衆流の句、自然に恰好なり」と、コノやうに當てつ比べつしてサ、コノ「體露金風」が見えるものか、あゝコレなら削つた方が好いぞ。「雲門三句の中、且らく道へ、那句を用ひてか人を接せん。試に辨じて看よ。頌に云く」と、サーどの句で人を接するか。次ぎ下の頌を看よ。

問既有宗　○深辨來風　○箭不虛發　**答亦攸同**　○豈有兩般　○如鐘待扣　○功不浪施　**三句可辨**　○上中下　○如今是第幾句　○須是向三句外薦取始得　**一鏃遼空**　○中過也　○墜着嗑着　○箭過新羅　**大野兮涼颼颯**　○普天匝地　○還覺骨毛卓豎麼　○放行去也　**長天兮疎雨濛濛**　○風浩浩水漫漫　○頭上漫漫脚下漫漫　**君不見少林久坐未歸客**　○更有不唧噜漢　○帶累殺人　○黃河頭上瀉將過來　**靜依熊耳一叢叢**　○開眼也着合眼也着　○鬼窟裏作活計　○眼瞎耳聾　○誰到這境界　○不免打折倆版齒

【和訓】　門既に宗有り。（○深く來風を辨ず。○箭虛りに發せず。）答も亦た同じき攸なり。（○豈に兩般有らんや。○鐘の扣つを待つが如し。○功浪りに施さず。）三句辨ず可し。（○上中下。○如今是れ第幾句ぞ。○須らく是れ三句の外に向つて薦取して始めて得べし。）一鏃空に遼る。（○中れり、過也。○墜着。○箭、新羅を過ぐ。）大野兮涼颼颯。（○普天匝地。○還つて骨毛卓豎することを覺ゆ麼。○放行し去れり。）長天兮疎雨濛濛。（○風浩浩、水漫漫。○頭上漫漫、脚下漫漫。）君見ずや、少林久坐未歸の客。（○更に不唧噜の漢有り。○人を帶累殺す。○黃河、頭上より瀉き將ち過ぎ來る。）靜に熊耳の一叢叢に依る。（○開眼も也た着、合眼も也た着。○鬼窟裏に活計を作す。○眼瞎し耳聾す。○誰れか這の境界に到らん。○免れず倆が版齒を打折することを。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「問既に宗有り」と、コノ僧、ド根性の惡い奴ぢやに依つてサ、雲門の取ッ置を以つて來た。實にハヤ、金剛王寶劍を劈面に振ふて來たぢや。問た宗旨があるから。

「答も亦た同しき攸なり」と、答も亦たサウぢや。鐘も撞木の當りがら、小く當れば小く鳴る、大きく當れば大きく鳴るぞ。

「三句辨ず可し」と、コレと次きの句との二句、雪竇屋裏の事ぢや。雲門常に、一句に三句を含む。サー何の句に當るか辨じて見よ。

「一鏃空に遼る」と、「體露金風」の只だ一矢で射透した。實に上は霄漢に透り、下は黃泉に徹するぞ。コレが雪竇の辨じやうかサ。

「大野兮涼颼颯颯」と、花も紅葉も引ッからげて、人天の衆前へ擲り出した。秋の野原と云ふものは寂しいものぢや、「涼颼颯颯」ぢや。コノ語は絶妙好辭ぢや、南天棒も大の氣に入りぢや。サー諸人、何故南天棒はコノ語を好くかサ、云ふて看よ。

「長天兮疎雨濛濛」と、時雨の行く頃、今日も時雨れ、明日も時雨れぢや。

「君見ずや、少林久坐未歸の客」と、「向ふ通るは清十郎ぢやないか、笠が能う似た管笠が」、是れ、君見ずや少林の客か。サー是れよりも毒氣が殊に多い。見れば見るに隨つて身の毛も竪つぢや。コノ語を何故コヽへ引き出したナ。コリヤ雲門の肝腸にケチリンも違はぬ、恐しいぞ。

「靜に熊耳の一叢叢に依る」と、何んとコレが濁つたかナ。サー如上の境界、誰れ人か能く到り得るぞ。祖師、少林に面壁した當體、直に樹凋み葉落つる時節境界か。コレは九年坐つた爺に限るか。サー何故達磨だけを云ふたぞ、佛も祖も無いと云ふつもりか。コヽに「體露金風」があるぞ。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「問既有宗」――「深く來風を辨ず」、雪竇能くコノ僧を辨じたト、コノ句は福本には無い、無い方が好いぞ。「箭虛りに發せず」、コノ僧も無駄矢は捨てぬぢや。

「答亦攸仝」――「豈に兩般有らんや」、師家も學人も同一般の眼ぢや。「鐘の扣つを待つが如し」、福本にはコノ句も無い。「功浪りに施さず」、三十年辛勤の功ぢや。雲門仇矢は放さぬ。

「三句可辨」――「上中下」、上は函蓋乾坤、中は隨波逐浪、下は截斷衆流の三句に當てた。「如今是れ第幾句ぞ」、サー此の「體露金風」は三句の中何に當るぞ。「須らく是れ三句の外に向つて薦取して始めて得べし」、御叮嚀過ぎる、實に迷惑千萬ぢや。

「一鏃遼空」――「中れり、過也」、當つたかサ、あゝ、はづれた。コノ三字も福本には無い。

「箟着嗑着」、ホシノヘヽ、ポッン〳〵と仇矢はない。「箭、新羅を過ぐ」、コノ矢はドコへ飛んだ。

落ち處が知れぬ、ハルピンにでも落ちたのか。

「大野兮涼颯颯」――「普天匝地」、コリヤ好下語ぢや。「還つて骨毛卓竪するとを覺ゆ麼」、さびしい大野の秋風が身に浸みたかドウぢや。「放行し去れり」、おッ擴げたナ。サー何を放行し去つた。雪竇餘り落草ぢや。

「長天兮疎雨濛濛」――「風浩浩、水漫漫」、風も吹く、浪も立つ。「頭上漫漫、脚下漫漫」、とゞかぬ〳〵。大屋の鑵子も空鑵子、隱居の鑵子も空鑵子ぢや。コノ下語は好くない、削る方が好い。

「君不見少林久坐未歸客」――「更に不唧嘈の漢有り」、又た例の馬鹿達磨を引き出したナ。達磨ばかりぢやない、ソレ〳〵、ソノ外に、雪竇の馬鹿も居るぢや。「人を帶累殺す」、科のない達磨さんまで引き出して退義させる。「黃河頭上より瀉き將ち過ぎ來る」、元と先祖が好くなし者ぢやから道理々々。コリヤ今時かと見れば那邊、那邊かと見れば今時、分ちにくい。コノ「瀉將過來」の四字が、福本には「濁り流る」の二字となつて居る。

「靜依熊耳一叢叢」――「開眼も也た着、合眼も也た着」、眼を開ても達磨、眼を閉つても達磨、どちらも達磨ぢや。コヽの下語は總體に好くない、南天棒は取らぬ。「鬼窟裏に活計を作す」、「眼瞎し耳聾す」、「靜に熊耳の一叢叢に依る」とは、ソリヤ暗闇の暮しぢや、ソレが面壁かサ。「誰れか這の境界に到らん」、コリヤ人々具足ぢや。サハさりながら、コノ「體露金風」の處に到つたは、少林の客よと見た。ソレでは雪竇の脚下へも屆かぬ、夢にも雪竇を見るとはならぬ。コノ下語は全く合點が行かぬ。「免れず儞が脚齒を打折するとを」、雪竇、お主が達磨よと、梵天まで托上した。

古人道承言須會宗勿自立規矩古人言不虛設所以道大凡問箇事也須識些子好惡不識尊卑去就不識淨觸信口亂道有什麼利濟凡出言吐氣須是如鉗如鋏有鈎有鏁須是相續不斷始得這僧問處有宗旨雲門答處亦然雲門尋常以三句接人此是極則也雪竇頌這公案與頌大龍公案相類三句可辨一句中具三句若辨得則透出三句外一鏃遼空鏃乃箭鏃也射得太遠須是急着眼看始得若也見得分明可以一句之下開展大千沙界到此頌了雪竇有餘才所以展開頌出道大野兮涼颯颯長天兮疎雨濛濛且道是心是境是玄是妙古人道法法不隱藏古今常顯露他問樹凋葉落時如何雲門道體露金風雪竇意只作一境如今眼前風拂拂地不是東南風便是西北風直須便恁麼會始得儞若更作禪道會便沒交涉君不見少林久坐未歸客達磨未歸西天時九年面壁靜悄悄地且道是樹凋葉落且道是體露金風若向這裏盡古今凡聖乾坤大地打成一片方見雲門雪竇的的爲人處靜依熊耳一叢叢熊耳卽西京嵩山少林也前山也千叢萬叢後山也千叢萬叢諸人向什麼處見還見雪竇爲人處麼也是靈龜曳尾

【和訓】　古人道く、言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立つること勿れと。古人言虚りに設けず。所以に道ふ、大凡そ箇の事を問はんには、也た須らく些子の好悪を識るべし。若し尊卑去就を識らず、淨觸を識らずして、口に信せて亂道せば、什麼の利濟か有らん。凡そ言を出し、氣を吐かんには、須らく是れ鉗の如く鋏の如く、鈎有り鎖有るべし。須らく是れ相續不斷にして始めて得べしと。這の僧の問處、宗旨有り。雲門の答處も亦た然り。雲門尋常、三句を以て人を接す。此れは是れ極則なり。雪竇、這の公案を頌すると、大龍の公案を頌すると相ひ類す、三句辨ず可しと。一句の中、三句を具す。若し辨得せば、三句の外に透出せん。一鏃空に遊ると。鏃は乃ち箭鏃なり、射得て太だ遠し。須らく是れ急に眼を着けて看て始めて得べし。若し也た口得分明ならば、以て一句の下に、大千沙界を展開す可し。此に到つて頌し了る。雪竇餘才有り。所に展開し、頌出して道く、大野今涼颼颼、長天今疎雨濛濛と。且らく道へ、是れ心か是れ境か、是れ玄か是れ妙か。古人道く、法法、隱藏せず、古今常に顯露すと。他問ふ、樹凋み葉落つる時如何。雲門道く、體露金風と。雪竇の意は、只だ一境と作す。如今眼前に風拂拂地。是れ東南の風にあらずんば、便ち是れ西北の風ならん。直に須らく恁麼に會して始めて得べし。儞若し更に禪道の會を作さば、便ち沒交渉。君見ずや、少林久坐未歸の客と。達磨未だ西天に歸らざる時、九年面壁、靜悄悄地。且らく道へ、是れ樹凋み葉落つるか。且らく道へ、是れ體露金風か。若し這裏に向つて、古今の凡聖を盡して、乾坤大地、打成一片ならば、方に雲門、雪竇、的的爲人の處を見ん。諦に熊耳の一叢叢に依ると。熊耳は即ち、西京嵩山の少林なり。前山も也た千叢萬叢。諸人、什麼の處に向つてか見ん。還つて雪竇爲人の處を見る麼。也た是れ鱉龜、尾を曳く。

【提唱】　コレから圜悟の評ぢや。「古人道く、言を承けては須らく宗を會すべし、自ら規矩を立つると勿れ」と、コリャ石頭の「參同契」の句ぢや。此方が的になつて問はるゝ時を云ふぢや。無心無念の法度を、己が一流に造へてからに、お定りの、佛祖も識らずとサ。「古人、言、虚りに設けず。所以に道ふ」と、古人は假初のとは云はぬ。「大凡そ箇の事を問はんには、須らく些子の好悪を識るべし」と、先づ第一に僧の有機か無機かを知らなくてはならぬ。コノ已下「不斷始得」までの五十字は、雲居弘覺禪師の語ぢや。「若し尊卑去就を識らず、淨觸を識らずして、口に信せて亂道せば、什麼の利濟か有らん」と、コリャ駈け引きの作用ぢや。即ち、向上、向下を知らず、又た超出の語、合頭の語を知らずしてサ、文字言句に用はないなどと云はゞ、坊主共皆な喰ひ拔けになるぞ。「凡そ言を出し氣を吐かんには、須らく是れ鉗の如く鋏の如く、鈎有り鎖有るべし。須らく是れ相續不斷にして始めて得べし」と、サー言を出し氣を吐くには、道具立が揃はねばならぬ、戰爭でも陣立が出來なけりゃ戰ひは始められぬ。道具が揃はぬと、道ふに向つて道ふ處を得ず。轉ずるに向つて轉ずる處を知らぬ。道具さへ揃へば、弓手から來ても右手から來ても、自由自在に働くぞ。「鉗」と云ふのは、鐵を以つて物を束ねる、即ち把捉の具ぢや。「鋏」と云ふは、劍を把つて案ずる貌、即ち截り割る具ぢや。「這の僧の問處、宗旨有り、雲門の答處も亦た然り。雲門尋常、三句を以つて人を接す。此れは是れ極則なり」と、僧の問も雲門の答も共に宗旨ぢや。ナル程、函蓋乾坤、隨波逐浪、截斷衆流と切つて出た雲門の底意は、八十餘人の尊宿有りと雖も、其の旨に通ずる者は、恐らくは兩三人に過ぎないぢやらう。コレを透過すればサ、今日雨の降るのも是れ極則なるとを知るぢや。「雪竇、這の公案を頌すると、大龍の公案を頌すると相ひ類す」と、コリャ八十二則の「大龍堅固法身」の頌と同じやうぢや。ソノ頌は「問會つて知らず、答還つて會せず。云々」と云ふのぢや。「三句辨ず可しと。

一句の中、三句を具す。若し辨得せば、三句の外に透出せん」と、コノ評は拙い。コレぢや賣藥の效能書を見るやうぢや。「一鏃空に遼ると。鏃は乃ち箭鏃なり。射得て太だ遠し、須らく是れ急に眼を着けて看て始めて得べし」と、山河大地皆な射拔いた。能登殿の强弓でもナンでも射るぢや。「鏃」とは矢尻のことぢや。「若し也た見得分明ならば、以つて一句の下に、大千沙界を展開す可し」と、サーどうした一句ぢやナ。ソナタ云やれ。サー云ふべいか。おゝよ〳〵〳〵、サー上は雲漢に透り、下は奈落を突き拔く底を道へ〳〵〳〵。「此に到つて頌し了る」と、頌はコレで了つた。「雪竇餘才有り。所以に展開し、頌出して道く、大野兮涼颼颯颯、長天兮疎雨濛濛と。且らく道へ、是れ心か是れ境か、是れ玄か是れ妙か」と、コノ頌は實にハヤ、象王の鼻のやうぢや。「古人道く、法法、隱藏せず」と、威音王已前より、地獄の釜の底までも、柳は綠、花は紅、茄子は青くサヽギは黑い、一點も泄すものはない。コノ語は錯つて會し去るぞ。佛前佛後關はぬ、地獄の底までサラケ出せ。「古今常に顯露す」と、コレを現成公案と見ては、「體露金風」には叶はぞ。夢にも見られぬ。「他問ふ、樹凋み葉落つる時如何。雲門道く、體露金風と。雪竇の意は、只だ一境と作す」と、圜悟、一境と見なさつたか。ハヽア、是れ又た間違ひぢや。「雪竇の意」はと云ふより已下は好くない。「如今眼前に風拂拂地」と、果然として境の會を作すぢや。「是れ東南の風にあらずんば、便ち是れ西北の風ならん」と、コレデ現成底と見たぢや、ツカもない。「直に須らく恁麼に會して始めて得べし」と、イヤ

イヤ大きな違ひぢやぞ。保福、長慶がコノ評を聞いたら、さぞ大笑ひするぢやらう。「爾若し更に禪道の會を作さば、便ち沒交涉」と、サー作さいで何んとせう。「君見ずや、少林久坐未歸の客と。達磨未だ西天に歸らざる時、九年面壁、靜悄悄地」と、コリヤ、ヒツソリすご〳〵と物寂び渡つた底ぢや。「且らく道へ、是れ樹凋み葉落つるか」と、ドウも持ちあつかつた。「且らく道へ、是れ體露金風か」と、達磨の面壁、靜悄悄地の處が、「體露金風」と見て頌したと見たら、ツカもないとぢや。「若し這裏に向つて、古今の凡聖を盡して、乾坤大地、打成一片ならば、方に雲門、雪竇、的的爲人の處を見ん」と、中々ツンナ打成一片と云ふとではいけぬ。見ては見えぬぞ。コノ評はとゞかぬ。「靜に熊耳の一叢叢に依ると」、おゝ大違ひぢや。「熊耳は卽ち、西京嵩山の少林なり」と、コレは誤りぢや。熊耳山と少林とは凡そ三百里を隔てゝ居る。「智漢集」と云ふ書にも、「達磨少林に到る。山神三崩を持せず。山人其の故を問ふ。神曰く、此の山に大人あり、之れを持するに堪へずと。達磨、潙山に移つて面壁す。少林に二年、潙山に七年、合せて九年。兩山相ひ去ると五百里（日本の里程にて八十三里十二町）、魏に岳山有り、山中に熊耳山有り。熊耳山中に定林寺有り。彼の兩處に二祖を接す」と云ふてある。「前山も也た千叢萬叢。後山も也た千叢萬叢。諸人、什麼の處に向つてか見ん。還つて雪竇爲人の處を見る麼」と、コリヤ圜悟の腕力ぢや。サー何處に雪竇爲人の處があるぞ。「也た是れ靈龜、尾を曳く」と、面白うない評ぢや。眼有るものは知らん、衲が斯う云ふのが無

理か。衲も身は可愛いもの。コノ頃はサ、天國の寶劍、千把丸なぞの名作の地合を見るやうな、ドウも〳〵見事なものぢやが、許は一向にとゞかぬテ。

注釈　〔腦後に箭を拔く〕　急處なる腦後に射込まれたる箭を拔いたと云ふ意。支那五代の時に、王殷と云ふ人あり、杜重威なる者と戰つて、腦後を射らる。彼れ直に其の箭を拔き取つて、敵に射返したりと云ふ故事に基く。〔ケチリン〕　少しも。〔何んとコレが濁つたかナ〕　濁るは、けがす、觸ると云ふ意。〔ホシノヘト〕　的の黑星を云ふ。〔販齋を打折する〕　達磨、光統律師等と論議し、鐵の香爐を投げ付けられ、前齒を缺きしと云ふ言傳を用ひたるなり。〔佛前佛後〕　七佛已前、已後を云ふ。

第二十八則　涅槃和尚諸聖　【涅槃和尚諸聖】

擧南泉參百丈涅槃和尚丈問從上諸聖還有不爲人說底法麼　○和尚合知○壁立萬仞○還覺齒落麼　泉云有　○落草了也○孟八郎作什麼○便有恁麼事　丈云作麼生是不爲人說底法　○看他作麼生○看他手忙脚亂○將錯就錯○但試問看　泉云不是心不是佛不是物　○果然納敗闕○果然漏逗不少　丈云說了也　○莫與他說破○從他錯一平生○不合與他恁麼道　泉云某甲只恁麼和尚作麼生　○賴有轉身處○與長卽長○與短卽短○理長則就　丈云我又不是大善知識爭知有說不說　○看他手忙脚亂○藏身露影○去死十分○爛泥裏有刺○恁麼那賺我　泉云某甲不會　○乍可恁麼○賴値不會○會卽打倒頭破○賴値這漢只恁麼　丈云我太煞爲倒說了　○雪上加霜○龍頭蛇尾作什麼

【和訓】　擧す。南泉、百丈の涅槃和尚に參す。丈問ふ、從上の諸聖、還つて人の爲めに說かざる底の法有り麼。（○和尚知る可し。○壁の萬仞。○還つて齒の落つるを覺ゆ也。）泉云く、有り。（○落草し了れり。○孟八郎にして什麼か作さん。○便ち恁麼の事有り。）丈云く、作麼生か是れ人の爲めに說かざる底の法。（○看よ他、作麼生。○看よ他、手忙しく脚亂るゝことを。○錯を將つて錯に就く。○但だ試に問ふて看よ。）泉云く、不是心、不是佛、不是物。（○果然として敗闕を納る。○果然として漏逗少なからず。）丈云く、說了也。（○他の與めに說破すること莫れ。○從他れ平生を錯ることを。○他の與めに恁麼に道ふ可からず。）泉云く、某甲は只だ恁麼、和尚作麼生。（○賴に轉身の處有り。○長に與すれば卽ち長。○短に與すれば卽ち短。○理長ずれば則ち就く。）丈云く、我れ又た是れ大善知識にあらず。爭でか說、不說有ることを知らん。（○看よ他、手忙しく脚亂るゝことを。○身を藏し影を露す。○去死十分。○爛泥裏に刺有り。○恁麼那、我れを賺す。）泉云く、某甲不會。（○乍に恁麼なる可し。○賴に不會に値ふ。○會せば卽ち倒頭を打破せん。○賴に這の漢の只だ

恁麼なるに値ふ。）丈云く、我れ太煞だ儞が爲めに說き了れり。（○雪上に霜を加ふ。○龍頭蛇尾にして什麼か作さん）

【提唱】第二十八則、「涅槃和尚諸聖」と、コノ則は、百丈獨坐底の大機、能く大用を發するとを明すのぢや。コノ問はサ、淮南王の一百二十斤の鐵鎚を眞向に振り翳したやうな、甚だ狠毒ぢやぞ。サー能く看よ。コレも垂示がない、直に本則ぢや。

本則

「擧す。南泉、百丈の涅槃和尚に參す」と、コノ則は容易に看たでは看えぬぞ。評や下語は甚だ諦當でない。「涅槃和尚」と云ふは、惟政禪師の誤ぢや。「會元」にも、「南泉と問答する者、卽ち馬祖の法嗣、洪州百丈惟政禪師なり」とある。コノとは悉しく評の處で云はう。「丈問ふ、從上の諸聖、還つて人の爲めに說かざる底の法有り麼」と、恰も是れ一百二十斤の鐵鎚を、驀頭に拈じ將ち來るやうぢや。「從上の諸聖」と、袖裏の金鎚を劈面に拈じ來つてからに、サー毘婆尸佛を始めとして、歷代の諸聖も人に說くとならぬ底の法があるかドウぢやと。コリヤ塗毒鼓ぢや。實にハヤ睾丸のひどき、振ひ渡るぞ。

「泉云く、有り」と、ビクともせず、南泉の「有り」と答へたはスサマジイ。生鐵の面目ぢや。胸中に百萬の軍馬を貯へて居るぞ。又た後の語を云ふ爲めに、弓を張つて箭を調へたぢや。欺は囚人の

口より出づか、

「丈云く、作麼生か是れ人の爲めに說かざる底の法」と、百丈が、ハヽア有るかナと。この一拶は實にハヤ山鳴り谷響く底ぢや。

「泉云く、不是心、不是佛、不是物」と、サリとは好くも斬つて放つた、一大藏經も說き了つたぞ、百千の鐵の楯ぢや、イカなる大矢でも透らぬ、天下の衲僧も命を乞ふぢや。併しサ、コリヤ南泉のとよ、コノ南天棒はサウでない。我は常に玆に住して、方便して涅槃を現ずと云うか。又た華嚴、阿含、方等、般若と云はんか

「丈云く、說了也」と、ソレ〳〵既に說いたぢやないかト、トヾメを差してみた。人を殺しては須らく血を見るべしぢや。

「泉云く、某甲は只だ恁麼、和尚作麼生」と、こりやサ、恰も盃を盡して人に進めるやうなものぢや。ナンのとはない、呑んで指したぢや。相手の大鏑矢を取つて射返した。山も河も鳴り渡つて、ズン〳〵と響くぢや。

「丈云く、我れ又た是れ大善知識にあらず。爭でか說、不說有るとを知らん」と、少しも騷がぬ、誠に天國の名劍を見るやうナ。併し皆な泥棒の寄り合ひぢや。說底の法、不說底の法のと、コリヤ人を咬む獅子の利牙ぢや。佛祖も不見不識ぢやぞ。

「泉云く、某甲不會」と、ドチラも手取りの寄り合ひぢや、切り込ませはせぬ。全體ソリャ私は知らぬと、ハメ手を食はせて來た。

「丈云く、我れ太煞だ爾が爲めに說き了れり」と、馬鹿女が、主の爲めに肝膽心腸を吐き盡したわト。誠に奇妙不思議の問答、就中コノ末後の句、見事々々。南天棒曰く、コノ句と、趙州の「事を問ふとは卽ち得たり」の句と、雪峯の「老僧住持事繁し」の句と、ソノ優劣はドウぢや。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「擧南泉參百丈涅槃和尚丈問從上諸聖還有不爲人說底法麼」――「和尚知る合し」、百丈、コナタこそ知りなされう。「壁立萬仞」、コノ問端は實に壁立萬仞で、寄り付かれるものおやない。「還つて齒の落つるとを覺ゆ麼」、百丈却つて說き過ぎると　云ふものぢや。齒が落ちそうでヒヤ〳〵する、

「泉云有」――「落草し了れり」、「有り」と云ふたは安賣ぢや、ハヤ落草ぢや。コノ下語は托上か抑下か、能く看よ々々。「孟八郎にして什麼か作さん」、出放題が何んになるぞ、コノ埒明かずめ。「孟八郎」とは晉の時の勇者ぢや。姓は孟、名は八郎と云ふ。暴烈にして道理に依らず事を行つた者ぢや。「便ち恁麼の事有り」、「有り」と云ふたは珍らしい。有らば、サー聞きたい〳〵。人の爲めに說かざる底の法はない筈ぢや。サー有るか。

「丈云作麼生是不爲人說底法」――「看よ他、作麼生」、サー南泉、斯う問はれてはドウぢや。「看よ、他手忙しく脚亂るゝとを」、臺處がもめべいぞ。コヽに至つては流石の南泉も七顚八倒ぢや。實に手忙しく脚亂るゝぢや。「錯を將つて錯に就く」、泉が「有り」と云ふ錯に、百丈が馬鹿になつて見て問ふたぢや。

「泉云不是心不是佛不是物」――「果然として敗闕を納る」、コリャ大きな仕損じぢや。アッタラ正銘の正宗に水を差した、コレぢや地獄も天堂もラリ骨灰ぢや。「果然として漏逗少なからず」、コノ下語では、コノ則は夢にも見えぬぞ。サー何處が漏逗か云ふてみよ。

「丈云說了也」――「他の與めに說破すると莫れ」、アッタラいらぬとを云はうより、打ち捨てゝ置け。「從他れ一平生を錯るとを」、儘の皮よ、南泉の一生を錯るも。「他の與めに恁麼に道ふ合からず」、南泉の爲めに云ふがものはない。コヽは左樣云ふ處でないぞ。

「泉云某甲只恁麼和尚作麼生」――「賴に轉身の處有り」、コリャ味をやりをる。行き詰るかと思ひの外、手を變へたは好い働きぢや。南泉出來した〳〵。併しコノ下語は未審しいぞ。「長に與すれば卽ち長」、「短に與すれば卽ち短」、好い方へ付けば好くなる、惡い方へ付けば惡くなる。サー好い方へなり惡い方へなり取り付ける、自由無碍ぢやから。「理長ずれば卽ち就く」、ドッチへでも好い方へ取つてかゝる。見性の妙用は合點ぢやわい。

「丈云我又不是大善知識爭知有說不說」――「看よ他、手忙しく脚亂るゝとを」、サー取り散した。

唱和相ひ隨ふと云ふに、コリヤ何んぢや。「身を藏し影を露す」、コレぢや蚤のかくれんぼで、頭隠して尻隠さずぢや。百丈も尤もなれども、サウ云ふ處が曲者よ。「去死」十分、コレではドンナ者でも冷え切つた、危ない〳〵。「爛泥裏に刺有り」、ウカとは乗られぬぞ。「我れ又た是れ大善知識にあらず」と云ふ處は、一筋縄ぢやいかぬ。「恁麼那、我を嫌す」、總體能く人を馬鹿にした、ソンナ手は喫はぬ、人のおだてには乗らぬぞ。

「泉云某甲不會」――――「乍に恁麼なる可し」、「乍に」と、サウもあるまい。南泉もカウでなければならぬ。「賴に不會に値ふ」、不會ではない、南泉はおくり狼ぢや。「會せば儞が頭を打破せん」、ゆるされぬぞ。「賴に這の漢の只だ恁麼なるに値ふ」、危ない處を仕合好くやつた。コノ下語は好くない、削る方が好い。

「丈云我太煞爲儞說了也」――――「雪上に霜を加ふ」、先に「說了也」と云ふてからに、コヽで又た「儞が爲めに說き了れり」とあるからぢやト。併しコノ下語は本則の心と違つた。但し又た別に仔細あるか。「龍頭蛇尾にして什麼か作さん」、コノ下語も屆かぬ、コレぢや死に去るぢや。下語は總體本則の意に稱ふて居らぬ。

到這裏也不消卽心不卽心不消非心不非心直下從頂至足眉毛一莖也無猶較些子卽心非心壽禪師謂之表詮遮詮此是涅槃和尚惟政禪師也昔時在百丈作西堂開田說大義者是時南泉已見馬祖了只是往諸方決擇百丈致箇一問也大難酬從上諸聖還有不爲人說底法麼若是山僧掩耳而出看這老漢一場懵懵若是作家見他恁麼問便識破得他南泉只據他所見便道有也是孟八郎百丈便將錯就錯隨後道作麼生是不爲人說底法泉云不是心不是佛不是物這漢貪觀天上月失却掌中珠丈云說了也可惜許與他注破當時但劈脊便棒教他知痛痒雖然如是儞且道什麼處是說處據南泉見處不是心不是佛不是物不曾說着且問儞諸人因什麼却道說了也他語下又無蹤迹若道他不說百丈爲什麼却恁麼道南泉是變通底人便隨後一拶云某甲只恁麼和尚又作麼生若是別人未免分疎不下爭奈百丈是作家答處不妨奇特便道我又不是大善知識爭知有說不說南泉便道箇不會是渠果會來道不會莫是眞箇不會百丈云我太煞爲儞說了也且道什麼處是說處若是弄泥團漢時兩箇漉漉漉若是二俱作家時如明鏡當臺其實前頭二俱作家後頭二俱放過若是具眼漢分明驗取且道作麼生驗他看雪竇頌出云

【和訓】這裏に到つて、也た卽心、不卽心を消ひず。非心、不非心を消ひず。直下に頂從り足に到るまで、眉毛一莖も也た無くんば、猶ほ些子に較れり。卽心非心。壽禪師、之れを表詮遮詮と謂ふ。此れは是れ涅槃和尚は惟政禪師なり。昔時、百丈に在つて西堂と作つて、田を開いて、大義を說きし者なり。是の時南泉已に馬祖に見え了る。只だ是れ諸方に往いて決擇す。百丈

鶏の一咀を致す、也た大いに酬ひ難し。從上の諸聖、還つて人の爲めに說かざる底の法有り麼と。若し是れ山僧ならば、耳を掩ふて出でゝ、這の老漢、一場の懊惱を看ん。若し是れ作家ならば、他の恁麼に問ふを見て、便ち他を識破得せん。南泉只だ他の所見に據つて便ち有りと道ふ。也た是れ孟八郎なり。百丈便ち錯を將つて錯に就き、後に隨つて道ふ、作麼生か是れ人の爲めに說かざる底の法と。泉云く、不是心、不是佛、不是物と。這の漢、天上の月を貪り觀て、掌中の珠を失却す。丈云く、說了也と。可惜許、他の與めに注破す。當時但だ殃脊に便ち棒して、他をして痛徹を知らしめん。然も是の如くなりと雖も、儞且らく道へ、什麼の處か是れ說處。南泉の見處に據らば、不是心、不是佛、不是物、曾つて說着せず。且らく儞諸人に問はん。什麼に因つてか却つて道ふ、說了也と。他の語下に、又た蹤迹無し。若し他、不說と道はゞ、百丈什麼と爲てか、却つて恁麼に道ふ。南泉は是れ變通底の人、便ち後に隨つて一拶して云く、某甲は只だ恁麼、和尚又た作麼生と。若し是れ別人ならば未だ免れず分疎不下なることを。爭奈せん百丈は是れ作家。答處、妨げず奇特なることを。便ち道ふ、我れ又た、是れ大義知識にあらず、爭でか說、不說有ることを知らんと。南泉便ち鶏の不會と道ふ、是れ、彼れ果して會し來つて不會と道ふか。是れ眞箇不會なること莫しや。百丈云く、我れ太煞だ儞が爲めに說き了れりと。且らく道へ、什麼の處か是れ說處。若し是れ泥團を弄する漢ならん時は、兩箇、漉漉洒洒。若し是れ、二り共に作家ならん時は、明鏡の臺に當るが如し。其の實は前頭は二り俱に作家、後頭は二り俱に放過。若し是れ具眼の漢ならば、分明に論取せん。且らく道へ、作麼生か他を驗せん。雪竇の頌出するを看よ。云く。

【提唱】 コレから圜悟の評ぢやがサ、コノ評も下語と同じやうに、本則の意とは違つて居る、取らぬ方が好い位ぢや。「這裏に到つて」と、サーこりや何處ぢや、本分の家山ぢやかサ。「也た卽心、不卽心を消ひず、非心、不非心を消ひず」と、卽心不卽心、非心不非心ではないわサと。コリヤ南泉の「不是心、不是佛、不是物」を咎めたのか。「頂從り足に至るまで、眉毛一莖も也た無くんば、猶ほ些子に較れり」と、頭の素天邊から足の爪先まで、毛拔で拔いても些子には當らぬぞ。「卽心非心」と、卽佛と見りや、心と認むるものもないぞ。「壽禪師、之れを表詮遮詮と謂ふ」と、壽禪師と云ふは、杭州延壽の祖疊禪師のことぢや、天臺の韶國師の法嗣ぢや。コノ和尚が卽心卽佛「を表詮遮詮」と云ふた。表詮は卽心卽佛を指したぢや。表事で今日現れた處、卽ち放行ぢや、建立ぢや。又た遮詮とはサ、非心非佛ぢや。遮非で拂ひ退けたる處、卽ち把住ぢや、掃蕩ぢや。併しコンナとを云ふては、達磨の一宗は盡きるぞ、とろくさい。「此れは是れ、涅槃和尚は惟政禪師なり」と、コレから緣起を擧げたのぢやが、コレは誤りぢや。「林間錄」と云ふ書に、「百丈の法正禪師は大智に嗣ぐ。常に涅槃經を誦するが故に、時の人、其の姓名を云はずして、呼んで涅槃和尚と爲す。住して法席と成る、師の功最も多し。衆をして田を開かしめて、方に大義を說く者は乃ち師なり」とあるから、涅槃和尚と云へば、法正禪師のことぢや。然るに、「花抄」を見ると斯うある。「南泉は乃ち馬祖の法嗣なり。叔、姪に參すと道ふ義當らず。今南泉の見える者は、卽ち馬祖の法嗣、百丈惟政禪師なり。玆に涅槃和尚と云ふは誤る已而」と。又た古本の「傳燈」などにも、二人の百丈を合して一人としてあるが、コレも亦た誤りぢや。今圜悟は古本の「傳燈」に依つてしたからコノ誤を再びしたのぢや。「昔時百丈に在つて西堂と作つて、田を開いて、大義を說きし者なり」と、是れ亦た圜悟の誤りぢや。コレは前にも云ふた通り、法正禪師のことぢや、「會元」の四に悉しく云ふてある。曰く、「百丈懷海の

法嗣、百丈山涅槃和尚、一日衆に謂つて曰く、汝等と我と田を開き、我と汝等と大義を說かんと。衆、田を開き了つて歸つて、大義を說かんとを請ふ。師乃ち兩手を展す、衆、措く無し」とある。コリヤ圜悟の手脫りぢや。「是の時南泉已に馬祖に見え了る。只だ是れ諸方に往いて決擇す」と、コレは宗旨を決擇するぢや。「百丈、箇の一問を致す、也た大いに酬ひ難し。從上の諸聖、還つて人の爲めに說かざる底の法有り麼」と、サー如何出身の路があるか。「若し是れ山僧ならば、耳を掩ふて出でゝ、這の老漢、一場の憋羅を見ん」と、若し恁麼ならば、百丈の圈續を出づるとはなるまい。履を戴いて去るか。イヤ〳〵、耳を掩ふても疊の下をくゞつても、遁さぬ場があるぞ。「若し是れ作家ならば、他の恁麼に問ふを見て、便ち他を識破得せん」と、若し眞正は眼の明いた奴ならばサ、彼のホラツ腹を見拔け。「南泉只だ他の所見に據つて便ち有りと道ふ。也た是れ孟八郎なり」と、イヽヤア、おじやると云ひ放したは、したゝかな腹中ぢや、中々大膽ぢや。「百丈便ち錯を將つて錯に就き後に隨つて道ふ、作麼生か是れ人の爲めに說かざる底の法」と、尻にのみ付いて廻つてケツカル。併しサ、今は他を試んが爲めに、己を晦す底ぢや。「泉云く、不是心、不是佛、不是物と。這の漢、天上の月を貪り觀て、掌中の珠を失却す」と、百丈の手元ばかり見て、己の脚元に氣が付かぬト。コレでは中々「不是心、不是佛、不是物」の句は見えぬぞ。コノ評は未審しいぞ。「丈云く、說了也と。可惜許、他の與めに注破す」と、コリヤ不可ぬ、とゞかぬ〳〵。「當時但だ劈脊に便ち棒して、他をして痛痒を知らしめん。然も是の如くなりと雖も、爾且らく道へ、什麼の處か是れ說處」と、圜悟ならば當時只だ劈脊に棒を喫はさう、屈棒々々〳〵。サハ去乍ら、南泉の說處はドウぢや。「南泉の見處に據らば、不是心、不是佛、不是物」と、コリヤ何んのとぢや。「曾つて說着せず」と、コンナ見解では百丈の矢面には立たれぬぞ。「且らく儞諸人に問はん。什麼に因つてか却つて道ふ、說了也と。他の語下に、又た蹤迹無し」と、サー諸人、百丈はナゼ斯う云ふたぞ。南泉の語下に說いた樣子はないにサ。「若し他、不說と道はゞ、百丈什麼と爲てか、却つて恁麼に道ふ」と、南泉がいよ〳〵說かぬと云ふものならば、ナンデ百丈は「說了也」と吐したぞ。「南泉は是れ變通底の人、便ち後に隨つて一拶して云く、某甲は只だ恁麼、和尚又た作麼生」と、自由自在ぢやとサ。コレでは南泉はチマキぢや。今まで惡く云ふたが又た褒めるのか。コノ評は一切合點が行かぬ。「若し是れ別人ならば、未だ免れず分疎不下なるとを」と、後へも前へもなるまい。トチメン棒カハクな。「爭奈せん百丈は是れ作家、答處、妨げず奇特なるとを。便ち道ふ、我れ又た、是れ大善知識にあらず、爭でか說、不說有るとを知らんと。南泉便ち箇の不會と道ふ、是れ、彼れ果して會し來つて不會と道ふか、是れ眞箇不會なると莫しや」と、皆な違つて居る、可笑しな評ぢや。「百丈云く、我れ太煞だ儞が爲めに說き了れりと。且らく道へ、什麼の處か是れ說處」と、幻人が幻人に向つて問答するやうナ。既にサ、「是れ大善知識にあらず」と云ふ處に說き了つたぢや。「若し是れ泥團を弄する漢ならん時は、兩箇、淅淅淅淅」

と、エー、ドジクジ〳〵と埒なし者め。マルデ泥タン棒で打つたやうナ。「淈淈淈淈」とは混濁と云ふとぢや。「若し是れ、二り共に作家ならん時は、明鏡の臺に當るが如し」と、歴々分明であらう。「其の實は前頭は二り俱に作家、後頭は二一俱に放過。若し是れ具眼の漢ならば、分明に驗取せん」と、前には古風の眞只中を捉へてサ、又た後には帶紐も解き擴げた、具眼の者ならば解らう。「且らく道へ、作麼生か他を驗せん。雪竇の頌出するを看よ」と、サー百丈と南泉とを驗定せんとするならば、先づ雪竇の頌を看よ。

祖佛從來不爲人、○各自守疆界○有條攀條○記得箇元字脚在心入地獄如箭、**衲僧今古競頭走**○踏破草鞋拗折拄杖高掛鉢囊**明鏡當臺列像殊**○墮也破也○打破鏡來與爾相見**一一面南看北斗**○還見老僧騎佛殿出山門麼○新羅國裏曾上堂大唐國裏未打鼓**斗柄垂**○落處也不知○在什麼處無**處討**○瞎○可惜許○椀子落地楪子成七八片**拈得鼻孔失却口**○那裏得這消息來○果然恁麼○便打

【和訓】祖佛從來人の爲めにせず。（○各自に疆界を守る。○條有れば條を攀づ。○箇の元字脚を記得して心に在かば、地獄に入ると箭の如くならん。）衲僧今古頭を競ふて走る。（○草鞋を踏破し、拄杖を拗折して、高く鉢囊を掛けよ。）明鏡臺に當つて列像殊なり。（○墮也破也。○鏡を打破し來れ、爾と與に相見せん。）一一南に面つて北斗を看る。（○還つて老僧が佛殿に騎つて山門を出るを見る麼。○新羅國裏曾つて上堂、大唐國裏未だ鼓を打たず。）斗柄垂る。（○落處も也た知らず。○什麼の處にか在る、）討ぬるに處無し。（○瞎。○可惜許。○椀子地に落ちて楪子七八片と成る。）鼻孔を拈得して口を失却す。（○那裏よりか這の消息を得來る。○果然として恁麼。○便ち打たん。）

【提唱】

頌　コレから雪竇の頌ぢや。

「祖佛從來人の爲めにせず」と、能化の佛、所化の衆生無い故ぢやとはッカもない。西天の四七、東土の二三、皆な爲人度生を表とするにサ、「人の爲めにせず」とは何事ぞ。百丈と南泉との一大事の問答、初めのコノ一句に頌し盡した。「從上の諸聖、還つて人の爲めに說かざる底の法有り麼」と、コノ恐ろしい所問に、「有り」と答へたはフテ〳〵しい。コノ味を一句に頌し盡したぞ。終日說いて曾つて說かず、終日行いて曾つて行かずとは、ソリャ老婆ぢや。

「衲僧今古頭を競ふて走る」と、「人の爲めに說かざる底の法」と、コノ難處には身の毛も絕やす。コレには天下の衲僧も、狼狽へ廻つて「頭を競ふて走る」ぞ。サー走るだけは走つて置かねば走り止らぬぢや。

「明鏡臺に當つて列像殊なり」と、衲僧面前、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ずと、二人を贊歎も及ばぬぢや。コノ出合、山は山、川は川、差別かと見れば平等、平等かと見れば差別、互換變通ぢや。サー如上の些子を筋骨拔いた百丈、南泉ぢやから、圓融無碍、受用自在ぞ。

「一一南に面つて北斗を看る」と、見性するとサ、コノやうに自由ぢや。コリャ師學共に三昧自在、先手を見越すぞ。

「斗柄垂る」と、路頭分明ぢや。斯くの如き魂膽、人々鼻の先につかえた。尻尾がさがつたぞ。

「討ぬるに處無し」と、二人の極處、卽ち百丈と南泉との働きは、「一一南に面つて北斗を看る」ぢやがサ、併し手元は見えぬぞ。ソノ筈〳〵。

「鼻孔を拈得して口を失却す」と、雪竇の塗毒鼓ぢや。百丈、南泉二人の出合はサ、鼻を捉へりや口が無くなる、口を捉へりや鼻が無くなる。サーこれはドコから出るぞ、骨折れ〳〵。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。コノ下語も、次ぎ下の評も好くない、南天棒は取らぬぞ。

「祖佛從來不爲人」――「各自に疆界を守る」、銘々ソノ境界を守ると。サー何處にヘッキリがあるぞ。糞々、汚ない、教者法師が聞いたら喜ばう。コリャ說いて說かざる處があるからぢや。菩薩乘では喰らはれぬぞ。「條有れば條を攀づ」と、「人の爲めにせず」ぢやから、箇條書や掟に依れ。

「元字脚を記得して心に在かば、地獄に入ると箭の如くならん」、コレは今時には大毒ぢや。ナゼ佛は五千四十八卷、總論八萬四千字を置いた、コリャ如何ぢや。とは云へサ、全體いろはのいの字でも心に置けば、地獄へ眞逆樣に墮ちるぞ。

「衲僧今古競頭走」――「草鞋を踏破し、拄杖を拗折して、高く鉢囊を掛けよ」、何も彼も仕舞つて、澄し切つて、只だ御座れとのとか。

「明鏡當臺列像殊」――「墮也破也」、明鏡と云ふたもハヤ墮ぢや。コリャ面白くないぞ。「鏡を打破し來れ、爾と與に相見せん」、エー、ナンの碎くとがいらうかい。元より無い鏡ぢや。

「一一面南看北斗」――「還つて老僧が佛殿に騎つて山門を出るを見る麼」、オヽ〳〵、能く乘り召さつたナ。サー夜着の袖から、八百八町のお江戸を一目に見る。「華嚴」の法界に入つて見よ、大唐も新羅も一目ぢや。「新羅國裏曾つて上堂、大唐國裏未だ鼓を打たず」、新羅では上堂はすんだのに、大唐では未だ始らぬ。コレ等は隻手の聲を聞くと、朝の間の茶の子ぢや。

「斗柄垂」――「落處も也た知らず」、「什麼の處にか在る」、斗柄はサ、何處へ落ちたか、落ち場所も知らぬ。併し見性すりや、見性の妙用で、蒲團の上で知れるぢやがサ。

「無處討」――「瞎」、「可惜許」、煩惱を見ず、菩提を見ずぢや。「椀子地に落ちて楪子七八片と成る」、ナニ、椀子ばかりぢやない。茶壺まで打ち碎けたぞ。コリャ散々に云ひ散したものぢや。

「拈得鼻孔失却口」――「那裏よりか這の消息を得來る」、こんなケチなものを、ドコの隅から脊

負ひ出したぞ。コノ下語は衲は氣に入らぬ。「果然として恁麼」、「便ち打ん」、性惡ると思ふたが、果してサウであつた。エー、やかましいと云つて、ドサリッと打つたぢや。打つた上に見ると、明かに見えるぞ。

釋迦老子出世四十九年未曾說一字始從光耀土終至跋提河於是二中間未嘗說一字恁麼道且道是說是不說如今滿龍宮盈海藏且作麼生是不說豈不見修山主道諸佛不出世亦無一法與人但能觀衆生心隨機應病與藥施方遂有三乘十二分教其實祖佛自古至今不曾爲人說只這不爲人正好參詳山僧常說若是添一句甜密密地好好觀來正是毒藥若是劈脊便棒驀口便摑推將出去方始親切爲人衲僧今古競頭走到處是也問不是也問問佛問祖問向上問向下雖然如此若未到這田地也少不得如明鏡當臺列像殊只消一句可辨明白古人道萬象及森羅一法之所印又道森羅及萬象總在箇中圓神秀大師云身是菩提樹心如明鏡臺時時勤拂拭勿使惹塵埃大滿云他只在門外雪竇恁麼道且道在門內在門外儞等諸人各有一面古鏡森羅萬象長短方圓一一於中顯現儞若去長短處會卒摸索不着所以雪竇道明鏡當臺列像殊却須是一一而南看北斗既是面南爲什麼却看北斗若恁麼會得方見百丈南泉相見處

此兩句頭百丈挨拶處丈云我又不是大善知識爭知有說不說雪竇到此頭得落在死水裏恐人錯會却自提起云卽今目前斗柄垂儞更去什麼處討儞纔拈得鼻孔失却口拈得口失却鼻孔了也

【和讀】釋迦老子、出世四十九年、未だ曾て一字を說かず。始め光耀土從り、終り拔提河に至るまで、是の二中間に於て、未だ嘗て一字をも說かずと。恁麼に道ふ、且らく道へ、是れ說か、是れ不說か。如今龍宮に滿ち、滄溟に盈つ。且らく作麼生か是れ不說。豈に見ずや。修山主道く、諸佛出世せず、四十九年の說。達磨西來せず、少林に妙訣有りと。又た道く、諸佛曾つて出世せず、亦た一法の人に與ふる無し。但だ能く衆生の心を觀て、機に隨ひ病に應じて、藥を與へ方を施す。遂に三乘十二分教有り。其の實は祖佛、古より今に至るまで、曾つて人の爲めに說かず。只だ這の不爲人、正に好し參詳するに。山僧常に說く、若し是れ一句を添へて、甜密密地なるも、好々に觀來れば、正に是れ毒藥なりと。若し是れ劈脊便ち棒し、驀口に便ち摑して、推し將ち出で去らば、正に始めて親切の爲人ならん。衲僧今古、頭を競ふて走る。到る處、是も也た問ひ、不是も也た問ひ、佛を問ひ祖を問ひ、向上を問ひ向下を問ふ。然も此の如くなりと雖も、若し未だ這の田地に到らずんば、也た少くことを得じ。明鏡の臺に當つて列像殊なりと云ふが如きんば、只だ一句を消して明白を辨ず可し。古人道く、萬象及び森羅、一法の所印なりと。又た道く、森羅及び萬象、總に箇の中に在つて圓かなりと。神秀大師云く、身は是れ菩提樹、心は明鏡の臺の如し。時時勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむること勿れと。大滿云く、他只だ門外に在りと。雪竇、恁麼に道ふ、且らく道へ、門內に在るか、門外に在るか。儞等諸人、各々一面の古鏡有り、森羅萬象、長短方圓、一一、中に於て顯現す。儞若し長短の處に去つて會せば、卒に摸索不着ならん。所以に雪竇道く、明鏡臺に當つて列像殊なりと。却つて須らく是れ一一、南に面つて北斗を看る。既に是れ南に面つて、什麼と爲てか却つて北斗を看る。若し恁麼に會得せば、方に百丈、南泉相見の處を見ん。此の兩句は、百丈挨拶の處を頌す。丈云く、我れ又た是れ大善知識にあらず、爭でか說、不說有ることを知らんと。雪竇此に到つて頌し得て、死水裏に落在す。人の錯つて會せんことを恐れて、却つて自ら提起して云く、卽今目

前、斗柄垂る、倆更に什麼の處に去つてか討ねんと。倆纔かに鼻孔を拈得せは口を失却し、口を拈得せば鼻孔を失却し了らん。

【提唱】　コレから圜悟の評ぢやが、前にも云ふたやうに、コノ評も隨分ともに怪しいぞ。「釋迦老子出世四十九年、未だ曾つて一字を說かず」と、コリヤ楞伽經の文ぢや。サー說かぬが定〻一字不說と說いてある。「始め光耀土從り、終り拔提河に至るまで、是の二中間に於て、未だ嘗つて一字をも說かずと」、「光耀土」とは鹿野苑ぢや、「華嚴」を說いた處ぢや。佛、光耀土より鶴林に至るまで一字を說かず、汝亦た一字を聞かぬ。サー是れを我空法空なぞと、當てつ比べつしては不可ぬぞ。「恁麼に道ふ、且らく道へ、是れ說か、是れ不說か。如今龍宮に滿ち、海藏に盈つ。且らく作麼生か是れ不說」と、蒲團の上で骨折ると、一字不說の處は、掌上を見るやうぢや。「豈に見ずや、修山主道く」と、コノ人は地藏深の法嗣の龍濟紹修禪師ぢや。「諸佛出世せず」と、コリヤ平等の正位ぢや。迦葉佛も然燈佛も出世したとはないト。コレを引き當てゝは不可ぬぞ。「四十九年の說」と、コリヤ差別の遍位ぢや。頓漸秘密、整然と具備して居る。「達磨西來せず、少林に妙訣有りと」、達磨は西來しないでもサ、些子は二祖に傳へたぞ。「又た道く、諸佛曾つて出世せず、亦た一法の人に與ふる無し」と、コリヤ汾陽の無業禪師の語ぢや。是れ人々具足ぢや、誰れが出世するぞ。達磨が偉らそうに、十萬里の波濤を凌いで、法を傳へる爲めに來たなぞと、ナンの法を傳へたぞ、傳へる法とてはないぢや。ソレ〳〵人々具足ぢや、達磨も慧可も同一に具足して居る、皆な一杯々々ぢや、權助もお三も具足して居るぢや。併しサ、コレが容易に見えぬぢや、夢を見て居る。ぢやから色々な手段を行つて、ソノ夢を覺ましてやる分ぢや。「但だ能く衆生の心を觀て、機に隨ひ病に應じて、藥を與へ方を施す」と、此のクドキが可厭ぢや。「遂に三乘十二分教有り。其の實は祖佛、古より今に至るまで、曾つて人の爲めに說かず」と、八萬四千の煩惱があるから、八萬四千の法門があるからサ。ソレは實際ドウぢや、佛祖が說いたか說かぬか、自己のホラッ腹を見よ、サー說いたか說かぬか。「只だ這の不爲人、正に好し參詳するに」と、コヽが眼目ぢや。「山僧常に說く、若し是れ一句を添へて、甜密密地なるも、好好に觀來れば、正に是れ毒藥なりと」、サー自己本有の上に一句を添へたらドウぢや。大龍和尙の如きは、「山花開いて錦に似、澗水湛へて藍の如し」と云ふた。「甜密密地」なぞと奇妙な句ぢや。コレを拖泥帶水の義とするときは、下の句は嶮峻ぢやぞ。併しサ、本則の不爲人を以つて比校すると大に違ふぞ。「若し是れ劈脊に便ち棒し、驀口に便ち摑して、推し將ち出で去らば、正に始めて親切の爲人ならん」と、コリヤ別して不可ん。是れ誤つて會したぢや。是も非も關はず棒を喫らはせ、頰桁をサラパヒ出せと云ふがサ、イヽヤ、ソリヤ滅多に不可ぬぢや。「衲僧今古頭を競ふて走る。到る處に是も也た問ひ、不是も也た問ひ、佛を問ひ祖を問ひ、向上を問ひ向下を問

ふ」と、上件のやうなものを以てからに、到る處に問ひ廻るが、眞實に至らなにや、コノ問は出んぞ。「然も此の如くなりと雖も、若し未だ這の田地に到らずんは、也た少くとを得じ。明鏡の臺に當つて列像殊なりと云ふが如きんば、只だ一句を消して明白を辨ずべし」と、斯樣にしても、未だサッパリした處に到らぬならばサ、益々問話もし、行脚もせよ。コノ南天棒も二十五道場を廻つて參尋したぞ。雪竇も九至三登で宗匠になつた。サウあらうぞならば、只だ一句で以て萬事は濟むぞ。實にハヤ分明ぢや程に子細に參せよ。「古人道く、萬象及び森羅、一法の所印なりと」、コリヤ「法句經」の文ぢや。山も川も、瀨戸も海道も、皆な是れ自己本有の佛性ぢや。何も彼も佛心ぢや。「又た道く、森羅及び萬象、總に箇の中に在つて圓かなりと」、コレは汾陽善昭禪師の語ぢや。心身脱落の處でコヽは見るべしサ。「神秀大師云く、身は是れ菩提樹」と、五祖弘忍の會下で上座をして居つて神秀の見解ぢや。釋迦が菩提樹下で成道せられたも、只だ此の身有つてのとぢや。「心は明鏡の臺の如し」と、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現す。山に向へば山、川に向へば川。「時時勤めて拂拭せよ」と、貪瞋癡と云ふ三毒の惡者が出て、鏡を汚すほどに、時々拂拭せよ。「塵埃を惹かしむると勿れと」、エー可愛いの、憎いのと、ソンナ塵埃を付けるナ。「大滿云く、他只だ門外に在りと」、ソコデ五祖の弘忍大師は、コノ頌を見てからに、彼は未だ眞實の大道には踏み込まぬと云ふた。「雪竇、恁麼に道ふ、且らく道へ、門內に在るか、門外に在るか。汝等諸人、各々一面の古鏡有り、森羅萬象、長短方圓、一一、中に於て顯現す」と、雪竇は、「明鏡臺に當つて列像殊なり、一一南に面つて北斗を看る」と云ふたが、サーこりや門內に在るか門外に在るか。諸人是れ、男も女も一面の古鏡ぢや。コレに種種な名を付けるから、千差萬別となるぢや。善惡有無、念佛が好いの、題目が好いのと狼狽へ廻るぢや。「儞若し長短の處に去つて會せば、卒に摸索不着ぢや。「所以に雪竇道く、明鏡臺に當つて列像殊なりと。却つて居つては、遂にコノ鏡には摸索不着ぢや。「所以に雪竇道く、明鏡臺に當つて列像殊なりと。却つて須らく是れ、一一南に面つて北斗を看る。既に是れ南に面つて、什麼と爲てか却つて北斗を看る」と、平等の大慧を得ると、コヽが手に入るぞ。「若し恁麼に會得せば、方に百丈南泉相見の處を見ん」と、コレは不可ない。コンナとで二師を見やうとすりや、遠うして遠しで、默目々々。「此の兩句は、百丈挨拶の處を頌す。丈云く、我れ又た是れ大善知識にあらず、爭でか說、不說有るとを知らんと。雪竇此に到つて頌し得て、死水裏に落在す」と、雪竇斯う云ふたが、コレぢや生佛一如の死水裏に落ち込むぞ。「人の錯つて會せんとを恐れて、却つて自ら提起して云く、卽今目前、斗柄垂る」と、ソラ又た斗柄の尻尾が下つた。コレから已下は圓悟の語ぢやない。「儞更に什麼の處に去つてか討ねんと」、却つて討ねる處はないぞ。「儞纔かに鼻孔を拈得せば口を失却し、口を拈得せば鼻孔を失却し了らん」と、コレは雪竇の一と振り刀ぢやに、サン〳〵なものにした。鼻孔ばかりか、全身失却するぞ。

註釈　〔毘婆尸佛〕過去七佛の第一祖なり。〔おくり狼〕送られるのが却つて狼なりとの意。〔叔、姪〕法嗣の關係を云ふ。〔西堂と作つて〕他山退院の人、化を助くるを云ふ。其の山の前住を東堂と稱するに相對す。西は賓位なるを以つてなり。〔屈棒〕苦屈の棒の意。他に宗要を問はれし時、苦しまぎれに打つ棒を屈棒と云ふ。臨棒亂打を評して屈棒々々と云ふ。〔能化〕所化の對。能く對機を教化するの意。轉じて教化の主格たる佛菩薩に名付く。〔元字脚〕言句と云ふこと。〔華嚴の四法界〕理法界、事法界、理事無碍法界、事々無碍法界を云ふ。〔慧可〕第二祖。達磨に嗣ぐ。〔雪竇も九至三登云々〕〔九至三登〕は、九度拄杖に至り、三度洞山に至るの意。修行に刻苦勵精せしこと。

第二十九則　大隋劫火洞然　【大隋劫火洞然】

垂示云、魚行水濁、鳥飛毛落、明辨主賓、洞分緇素、直似當臺明鏡掌內明珠、漢現胡來、聲彰色顯、且道爲什麼、如此試擧看

【和訓】　垂示に云く、魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。明かに主賓を辨じ、洞かに緇素を分つ。直に當臺の明鏡、掌內の明珠に似たり。漢現じ胡來り、聲に彰れ色に顯る。且らく道へ、什麼としてか此の如くなる。試に擧す、看よ。

【提唱】　コレは第二十九則、「大隋劫火洞然」と云ふのぢや。コノ則は、百丈獨坐底の端的、自然に三祇百劫を超越せるを明すのぢや。

「垂示に云く、魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。明かに主賓を辨じ、洞かに緇素を分つ」と、コリヤ師家分上を云ふたものぢや。師家はサ、學者がチラットすると、直に見て取る。コノ坊主は、得力か不得力かをチャンと見拔くぢや。丁度水が濁れば魚が行くと見、毛が落れば鳥が飛ぶと見るやうにサ。自然に蹤跡分明ぢや。黑白善惡の見損ひないぞ。「直に當臺の明鏡、掌內の明珠に似たり。漢現じ胡來り、聲に彰れ色に顯る」と、油斷なく骨折ると、コヽが手に入るぢや。サーさうあらうぞならば、コリヤ眞金かナマクラか、一ト口も口を發かぬ前に見て取る。「且らく道へ、什麼と爲てか此の如くなる。試に擧す、看よ」と、ドウして左樣な自由が得られるか。只だ〳〵參禪に骨折れば、人々皆な斯うなるぞ。サー本則を看よ。

擧僧問大隋劫火洞然大千俱壞未審這箇壞不壞　○這箇是什麼物○這一句天下納僧摸索不着○預搔待痒　隋云壞　○無孔鐵鎚當面擲○沒却鼻孔○未開口已前勘破了也　僧云恁麼則隨他去也　○沒量大人語脈裏轉却○果

然錯認　隋云隨他去　○前箭猶輕後箭深○只這箇多少人摸索不着○水長船高泥多佛大○若道隨他去在什麼處○若道不隨他去又作麼生○便打

【和訓】　擧す。僧、大隋に問ふ。刼火洞然として大千倶に壞す。未審し、這箇壞か不壞か。（○這箇是れ什麼物ぞ。○這の一句、天下の衲僧摸索不着。○孤め搔いて痒きを待つ。）隋云く、壞。（○無孔の鐵鎚當面に擲つ。○鼻孔を沒却す。○未だ口を開かざる已前勘破了也。）僧云く、恁麼ならば則ち他に隨ひ去るや。（○沒量の大人、語脈裏に轉却せらる。○果然として錯つて認む。）隋云く、他に隨ひ去る。（○前箭は猶ほ輕く後箭は深し。○只だ這箇多少の人摸索不着。○水長せば船高く、泥多ければ佛大なり。○若し他に隨ひ去ると道はゞ什麼の處にか在る。○若し他に隨ひ去らずと道はゞ又た作麼生。○便ち打たん。）

【提唱】

本則　コレから本則ぢや。

「擧す。僧、大隋に問ふ、刼火洞然として大千倶に壞す。未審し、這箇壞か不壞か」と、コノ僧は一機有るの漢ぢや。無間地獄から火が起ると、盡乾坤、微塵も殘さず燒き拂ふて、コノ三千世界が洞穴になると。コノ句は「仁王護國般若波羅密多經」の護國品から出て居る。ソノ第五の偈に、「刼火洞然として大千倶に壞す。須彌巨海、磨滅して餘り無し。梵、釋、天龍　諸有情等、尙ほ皆な殄滅す。何んぞ況んや此の身をや」とある。

「隋云く、壞」と、コリヤ合頭の語ぢや。然らばナント云ふべいか、吹毛切れども入らずぢや。コノ一語で、天堂も地獄も、山も川もラリコッパイぢや。

「僧云く、恁麼ならば則ち他に隨ひ去るや」と、コノ僧、狠狽者ぢや。直に隋の語に付いてからにソンならば萬物と倶に壞すか、ヤッパリ有爲生滅の法に隨ふかとサ。塊を犬に向つて投げると、犬は投げた人は逐はないで、塊を逐ふぢや。コノ僧も其の類ぢや。

「隋云く、他に隨ひ去る」と、コリヤすさまじい。茲に到つては、悟の迷のと云ふ穿鑿はいらぬ。コノ答處は古人も大いに稱せられたぞ。

著語　コレから圜悟の著語ぢや。

「擧僧問大隋刼火洞然大千倶壞未審這箇壞不壞」――「這箇是れ什麼物ぞ」、「這の一句、天下の衲僧摸索不着」、サー「壞、不壞」の處は、天下の衲僧にも解るまい。「預め搔いて痒きを待つ」、コノ僧、大千も未だ壞せざる以前に問ふたは、ヒドク取り越し苦勞ぢや。壞も不壞も、ソノ時のとぢや。

「隋云壞」――「無孔の鐵鎚當面に擲つ」、捉へ處がないぞ。實にハヤ、コノ「壞」は用ふる處がない。「鼻孔を沒却す」、「不壞」と見た處の悟の穴、コノ僧の大事にするものを沒却した。江戸で何の安物買ふかかと云へば、コノ僧困るべい。「未だ口を開かざる已前勘破了也」、圜悟は大隋が何んと